

衙跡発掘調査報告書

第9集

—— 金屋地区の調査 ——

平成元年3月

高知県教育委員会

土佐国衙跡発掘調査報告書

第9集

—— 金屋地区の調査 ——

平成元年3月

高知県教育委員会

序

高知県教育委員会の主要事業として、土佐国府跡の発掘調査を開始して以来本年度で9ヵ年が経過しました。

この間の発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての周辺官衙群と考えられる多数の掘立柱建物跡や溝跡など重要な遺構が検出され、国府域の様相解明に多くの進展をみることができました。

本年度は、これまでの成果をふまえた上で政庁跡を確認すべく、金屋地区を対象地とし、調査が行われました。その結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡及び塀跡等を検出することができました。さらに、官衙に関連するであろう全国に類例のない遺構も確認されております。

本書は、昭和63年度の調査成果をまとめたものであり、各方面で活用され、文化財保護と研究の一助となれば幸です。

最後に、調査にあたり御指導いただいた文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめ、御教示をいただいた先生方、終始御配慮下さった南国市教育委員会ならびに地権者の方々、そして調査に御協力下さった地元比江地区及び「国府史跡保存会」の皆様方に深く感謝の意を表し御礼申し上げます。

平成元年3月31日

高知県教育委員会

教育長 西森 久米太郎

例　　言

- 1 本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて、昭和63年度に実施した土佐国府跡発掘調査（重要遺跡確認緊急調査）の概要報告である。
- 2 発掘調査は、南国市教育委員会の協力と、山中敏史氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター上任研究官）の指導を受けて実施した。
- 3 発掘調査体制は次のとおりである。

調査顧問　岡本健児（高松短期大学教授・高知県文化財保護審議会々長）

調査員　廣田佳久（高知県教育委員会文化振興課主事）

庶務　橘瀬陽介（　　〃　　〃　埋蔵文化財班長）

- 4 本書の執筆、編集は廣田が行った。執筆に際しては、調査顧問岡本健児氏の指導を得た。
- 5 遺構については、ST（竪穴住居址）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土礫）、SA（焼跡）、SX（性格不明遺構）で標示し、遺構番号は『土佐国府跡発掘調査』第1～8集からの通し番号である。
- 6 出土遺物の図版番号については、実測図の番号と一致している。
- 7 遺構の測量にあたっては、昭和58年度に設置した公共座標第N系による基準点を使用し実施した。なお、標高は海拔高である。
- 8 報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。方位（N）は真北である。
- 9 調査にあたっては、地権者の方々をはじめとする地元比江地区及び南国市教育委員会の御協力をいただいた。また、現地作業員並びに整理作業員の皆様の御援助に対し、記して感謝する次第である。
- 10 整理作業にあたっては、SXに関連する資料を小森哲也氏（財団法人栃木県文化振興事業団）から提供していただいた。記して謝意を表する。
- 11 出土遺物、その他の資料は、高知県教育委員会において保管している。

本文目次

I 発掘調査にいたる経過	1
II 調査概要	5
1 調査方法と経過	5
2 層序	6
3 造構と遺物	7
(1) 包含層出土遺物	7
(2) 弥生時代	8
(3) 古墳時代	11
(4) 古代	13
III 総 括	33

挿図目次

第1図 上佐国府跡位置図	第18図 SX-6
第2図 上佐国府跡地名図	第19図 SX-7・8
第3図 上佐国府跡第1～22次発掘区設定図	第20図 SX-9
第4図 発掘区設定図	第21図 SX-10・11
第5図 発掘区セクション図	第22図 SX-12
第6図 遺構全体図	第23図 SX-15
第7図 調査区北端部セクション図	第24図 遺物実測図1
第8図 SK-79・80	第25図 " 2
第9図 SK-81・82・84・85	第26図 " 3
第10図 ST-26	第27図 " 4
第11図 SB-56	第28図 " 5
第12図 SK-88(集石検出状態)	第29図 " 6
第13図 SA-16	第30図 " 7
第14図 SX-1・2、P-1	第31図 " 8
第15図 SX-3	第32図 " 9
第16図 SX-4	第33図 " 10
第17図 SX-5、SK-88	

表目次

第1表 上佐国府跡発掘調査一覧表(第1～22次調査)
第2表 壓穴住居址計測表
第3表 捜立柱建物跡計測表
第4表 土壌計測表
第5表 摂跡計測表
第6表 性格不明遺構計測表
第7表 性格不明遺構規模分布表
第8表 遺物観察表1～14
第9表 杯、小杯法量分布表(SX-9～11)
第10表 杯法量分布表(その他の遺構)
第11表 盆、小皿法量分布表(遺構)

図版目次

図版1 A区調査前全景（北より） B・C区調査前全景（北より）	図版17 SK-82（東より） SK-84・85（北より）
図版2 試掘トレンチ遺構検出状態（北より） 試掘トレンチ遺構検出状態（南より）	図版18 SK-88集石検出状態（北より） SK-88（東より）
図版3 試掘トレンチ遺構検出状態（東より） 試掘トレンチ遺構検出状態（西より）	図版19 SK-88（北より） SK-94（西より）
図版4 A区遺構検出状態（北より） A区遺構検出状態（北より）	図版20 SX-1～7（西より） SX-1～7（東より）
図版5 B区遺構検出状態（東より） C区遺構検出状態（東より）	図版21 SX-1・2、P-1（北より） SX-1・2、P-1（西より）
図版6 A区遺構完掘状態（北より） A区遺構完掘状態（北より）	図版22 SX-1（北より） SX-2（北より）
図版7 B区遺構完掘状態（東より） C区遺構完掘状態（東より）	図版23 SX-3（北より） SX-4（北より）
図版8 A区北端部礫層検出状態（西より） A区北端部礫層検出状態（南より）	図版24 SX-5、SX-88（西より） SX-6（北より）
図版9 ST-25（北より） ST-25（北より）	図版25 SX-7（北より） SX-7（北より）
図版10 ST-26（西より） ST-26（西より）	図版26 SX-8（東より） SX-9（北より）
図版11 ST-27（北より） ST-27（北より）	図版27 SX-10・11（東より） SX-12（北より）
図版12 SB-56（北より） SB-56（北より）	図版28 SX-13・14（東より） SX-15（北より）
図版13 SB-57（北より） SB-58（北より）	図版29 ST-25、SK-79・88・93遺物出土 状態
図版14 SA-16（西より） SA-16（南より）	図版30 SK-79、SX-2～6遺物出土状態
図版15 SK-79（北より） SK-79（西より）	図版31 SX-6・7・9遺物出土状態
図版16 SK-80（東より） SK-81（東より）	図版32 SX-9・11・14、P-1遺物出土状 態
	図版33 第Ⅱ層出土遺物 第Ⅱ層出土遺物

图版34	第Ⅱ层出土遗物	图版41	出土遗物 1
	S T - 26出土遗物	图版42	" 2
图版35	S T - 26出土遗物	图版43	" 3
	S T - 26出土遗物	图版44	" 4
图版36	S T - 26出土遗物	图版45	" 5
	S X - 3 出土遗物	图版46	" 6
图版37	S X - 6 出土遗物	图版47	" 7
	S X - 9 出土遗物	图版48	" 8
图版38	S X - 6 · 7 · 9 · 13 · 14出土遗物	图版49	" 9
	S X - 11、S K - 94出土遗物	图版50	" 10
图版39	S X - 9 出土遗物	图版51	" 11
	S X - 11出土遗物	图版52	" 12
图版40	第Ⅱ层出土遗物	图版53	" 13
	S X - 1 · 6 · 15出土遗物	图版54	" 14

I 発掘調査にいたる経過

土佐国府跡の発掘調査（重要遺跡確認緊急調査）は9年目であり、事業費500万円、発掘面積は704.1m²であった。

本年度の発掘調査は、昨年度と同じく高知県教育委員会が事業主体となり実施した。調査対象地は、昨年度検出された溝跡（SD-49）の規模、性格を確認する意味で、昨年度調査区の北側、金屋地区ホノギ名カナヤノ後及び外杉とした。この地区は、標高約17.5mを測る水田で昨年度の調査区との比高差約0.2mである。北側は現地形で約1.3m高くなってしまい、丁度永源寺の参道に該当する。また、約200m北の山腹には日吉神社が鎮座する。

調査は、A区（西側）から実施し、引き続ぎ野菜の取り入れが終わってまもないB地区とC地区に移った。調査期間は、測量も含め昭和63年10月12日から昭和63年12月10日までであった。

調査にあたっては、南国市教育委員会の斡旋で土地所有者である小松栄一氏及び小松斎氏に調査の快諾をいただいた。また、調査地周辺の土地所有者及び比江地区の方々、「四国史跡保存会」にも多大な御協力をいただき、ここに記して謝意を表したい。

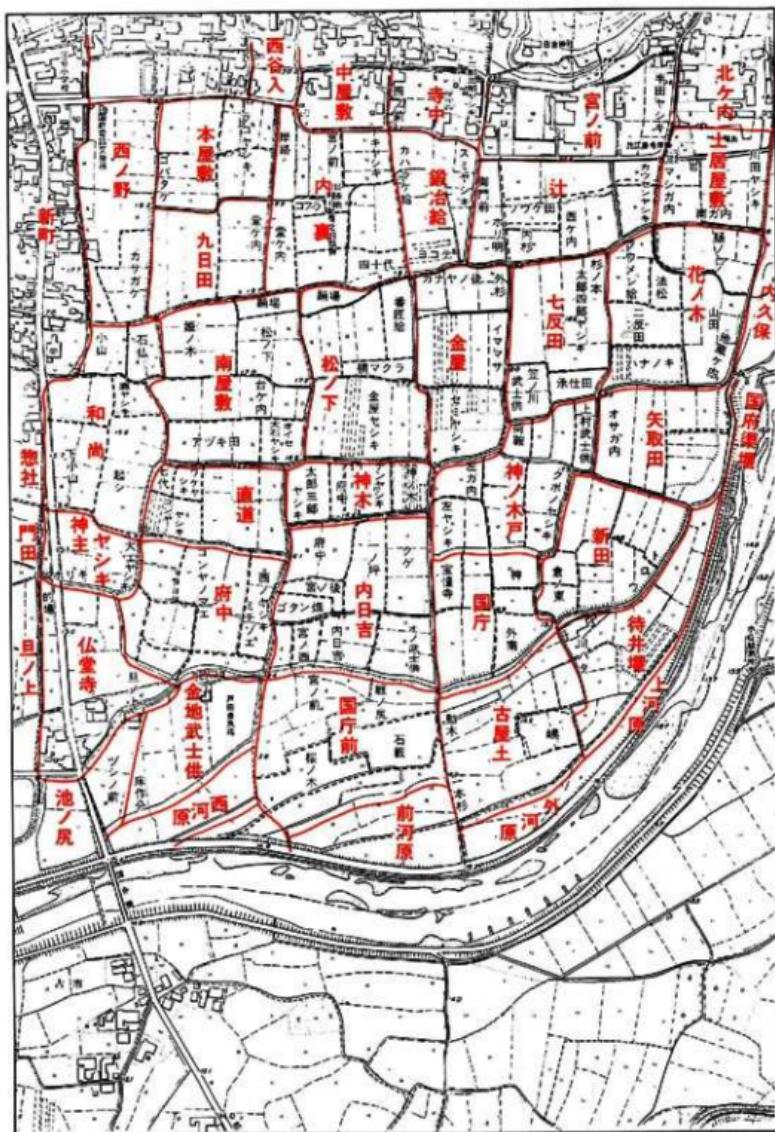
第1表 土佐国府跡発掘調査一覧表（第1～22次調査）

調査 次数	期間	調査地区	調査の種類	検出遺構			出土遺物
				掘立柱建物址	溝跡	その他	
1	52.2.1 ～ 52.2.3	新ラ田	緊急発掘調査 (市道改良工事)			柱穴	縄胎陶器
2	54.1.27 ～ 54.2.1	松ノ下	同上	2 (中凹)		柱穴	
3	54.2.13 ～ 54.3.1	太郎三郎屋敷	同上	3 (平安2)	2	土器底 1	黒色土器・瓦器 土師器・鉄刃
4	54.4.20 ～ 54.5.2	神ノ木戸	重要遺跡 確認調査		3 (奈良末・ 平安中2)	土壇 3	円面鏡・黒色土器 気泡器・土師器
5	54.8.20 ～ 54.9.12	宮ノ西	緊急発掘調査 (市道改良工事)	2 (平安末 ～鎌倉)	4	上壇 2 (奈良末)	円面鏡・転用鏡 墨書き器 風字鏡・縄胎陶器
6	54.11.6 ～ 54.12.11	クグ 国	重要遺跡 確認調査	1 (奈良末)	2 (平安前1)	柱穴 (中凹)	円面鏡・青磁 白磁
7	55.9.28 ～ 55.10.4	クボノヤシキ 荷左内	緊急発掘調査 (市道改良工事)		1	上壇 1	氣泡器・青磁 青滑

調査 次数	期 間	調査地区	調査の種類	検出遺構			出土遺物
				据立柱遺物址	溝 跡	その他	
8	55.11.17 ～ 55.12.15	ダイリ	重要遺跡 確認調査	5 (平安3)	1	堅穴住居3 貯蔵穴2	須恵器(横竪) 縄釉陶器
9	56.9.10 ～ 56.11.4	内日吉のうち 府 中	同 上	7	5	堅穴住居2 土 壤 7	円面鏡 縄釉陶器
10	56.10.8 ～ 56.10.19	神ノ木 内 日 吉	緊急発掘調査 (市道改良工事)		1	柱 穴	
11	57.9.17 ～ 57.11.6	内 日 吉 太郎三郎屋敷	重要遺跡 確認調査	11 (奈良6・ 平安2)	13 (奈良5)	堅穴住居2 土 壤 16	円面鏡・瓦器 青磁・白磁
12	58.10.5 ～ 58.11.7	内 裏 堂 ケ 内	同 上	6 (奈良～平安)	1 (6C末～ 7C初)	堅穴住居5 土 壤 5	須恵器・土師器
13	58.11.22 ～ 58.12.10	内 日 占 タ グ	同 上	2 (奈良)	2 (中世)	井 戸 1 土 壤 8	須恵器・瓦器
14	59.10.1 ～ 59.11.1	一ノ坪	重要遺跡 確認調査	5 (奈良～平安)	3	堅穴住居1 橋 列 5 (奈良～平安)	須恵器・土師器
15	59.11.16 ～ 59.11.22	鐵治給	同 上	1 (奈良～平安)		土 壤 1	"
16	59.11.30 ～ 60.1.10	松ノ下	同 上	6 (奈良～平安)		堅穴住居1 土 壤 4 橋 列 1	"
17	61.10.16 ～ 61.11.29	松ノ下	同 上	4 (奈良～平安)	4	堅穴住居1 土 壤 10 (平安3)	刻畫土器(須恵器)
18	61.11.12 ～ 61.12.19	南 屋 敷	同 上		1 (奈良)	上 壤 15	須恵器・土師器
19	61.11.20 ～ 61.12.15	内 日 占	緊急発掘調査 (排水路 改修工事)		1 (平安～中世)		"
20	62.11.16 ～ 62.12.18	松ノ下 (横マクラ)	重要遺跡 確認調査	2 (奈良～平安)	3 (奈良～平安)	堅穴住居3 土 壤 3	"
21	62.12.1 ～ 63.1.8	金 屋	同 上	5 (奈良～平安)	3 (奈良～平安)	堅穴住居3 土 壤 7 橋 列 6	縄釉陶器
22	63.10.12 ～ 63.12.10	同 上	同 上	3 (平 安)		堅穴住居3 土 壤 22 溝 跡 1	須恵器・土師器 円面鏡・縄釉陶器



第1図 土佐國府跡位置図 ($S = 1/50,000$)



第2図 土佐国府跡地名図

土佐国府跡現況平面図



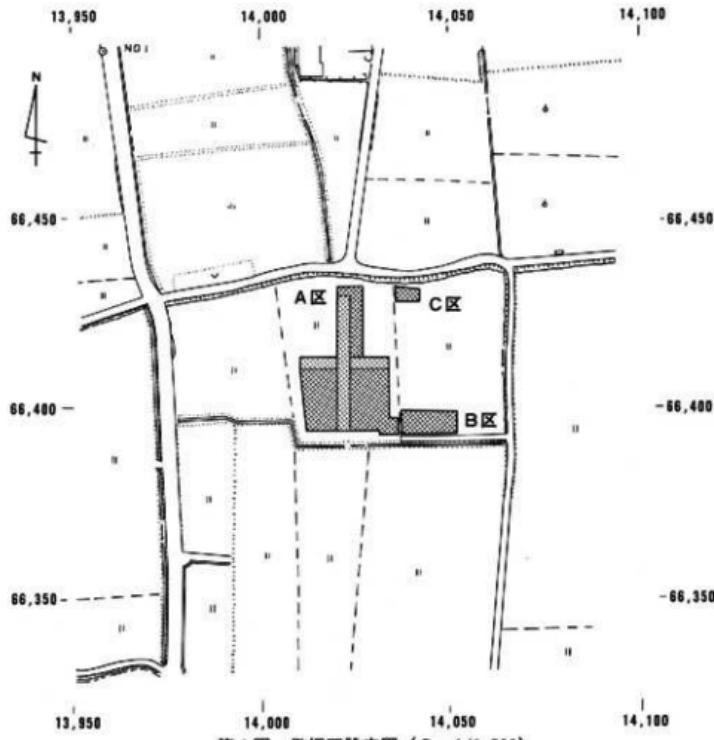
第3図 土佐国府跡第1～22次発掘区設定図 (S=1/4,000)

II 調査概要

1. 調査の方法と経過

今次の発掘調査対象地は南国市比江字金屋503と502番地であり、標高約17.5mを測る水田である。小字は金屋で、ホノギを前者がカナヤノ後、後者が外杉と称す。昨年度の第21次調査の調査対象地の北に位置し、その間に約0.2mの比高差がみられる。また、北側は、字鍛冶給、辻に接するが、現地形で約1.3mの段差がある。

調査は、発掘区をA～C区に分け、A区から順次実施した。A区では、公共座標を基準に南北トレンチ（3×36m）と東西トレンチ（3×24m）を設定することにより、昨年度検出された溝跡（S D-49）の延長をつかむと共に政庁跡に関連する遺構の検出に努めた。その結果、南北トレンチ北部で南北に並ぶ柱穴列、中央部で建物跡の一角、南部で方形の土壙とみられる



第4図 発掘区設定図 ($S=1/1,500$)

遺構群、東西トレンチ中央部で住居址とみられる遺構をそれぞれ検出した。また、南北トレンチ北端部で礫層を検出した。このため、東西トレンチを南へ19m、南北トレンチを北へ2m、東へ7mそれぞれ拡張して調査を実施した。A区南端部で東西に規則的に並ぶ方形の遺構を検出したことにより、南東端部をさらに東へ2.2m、南へ1.5m拡張した。

B区は、A区南東部に隣接させ、南北6.5m、東西15.0mを発掘区とし、A区で検出した方形の遺構群の広がりとその性格を追求した。

C区は、A区北端部で検出した礫層の広がりを確認するため設けた南北4mと3.7m、東西6mの発掘区である。

今次の調査によって確認された遺構は、竪穴住居址3棟、掘立柱建物跡3棟、土墳22基、堀跡1列、性格不明の竪穴遺構15基及び柱穴と考えられるピット群であった。⁽¹⁾出土遺物は、総点数約30,000点と従来の調査に比べ多量であった。これは、遺物包含層の残存状況が比較的良好であったことと掘り方の深い遺構が多かったことによるとみられる。遺物の大半は須恵器と土師器で、特に土師器の占める割合が高かった。また、これらはほとんど細片で摩耗が著しく、復元可能なものは少なかった。

これらの遺構・遺物は、調査区中央部から南部にかけて集中しており、弥生時代から古代にかけてのものである。この中には弥生時代の竪穴住居址1棟、土墳7基、古墳時代の竪穴住居址2棟、土墳2基、そして古代の官衙に関連するとみられる掘立柱建物跡3棟、堀跡1列が含まれる。

2. 層序

調査において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層 耕作土層

第Ⅱ層 黒褐色粘質土層

第Ⅲ層 黒色粘質土層

第Ⅳ層 暗褐色粘質土層

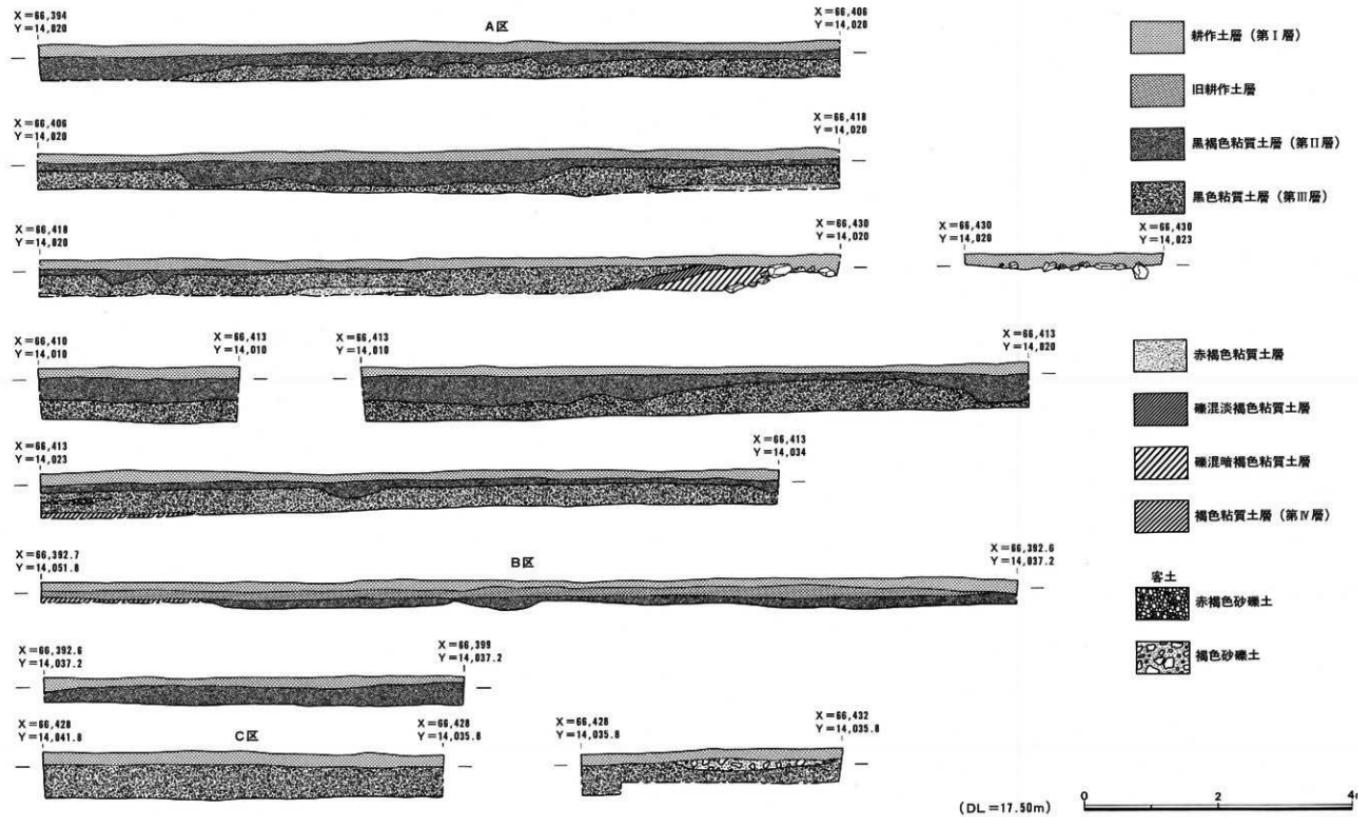
第Ⅴ層 灰褐色砂礫上層

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅲ層及び第Ⅳ・V層上面であった。

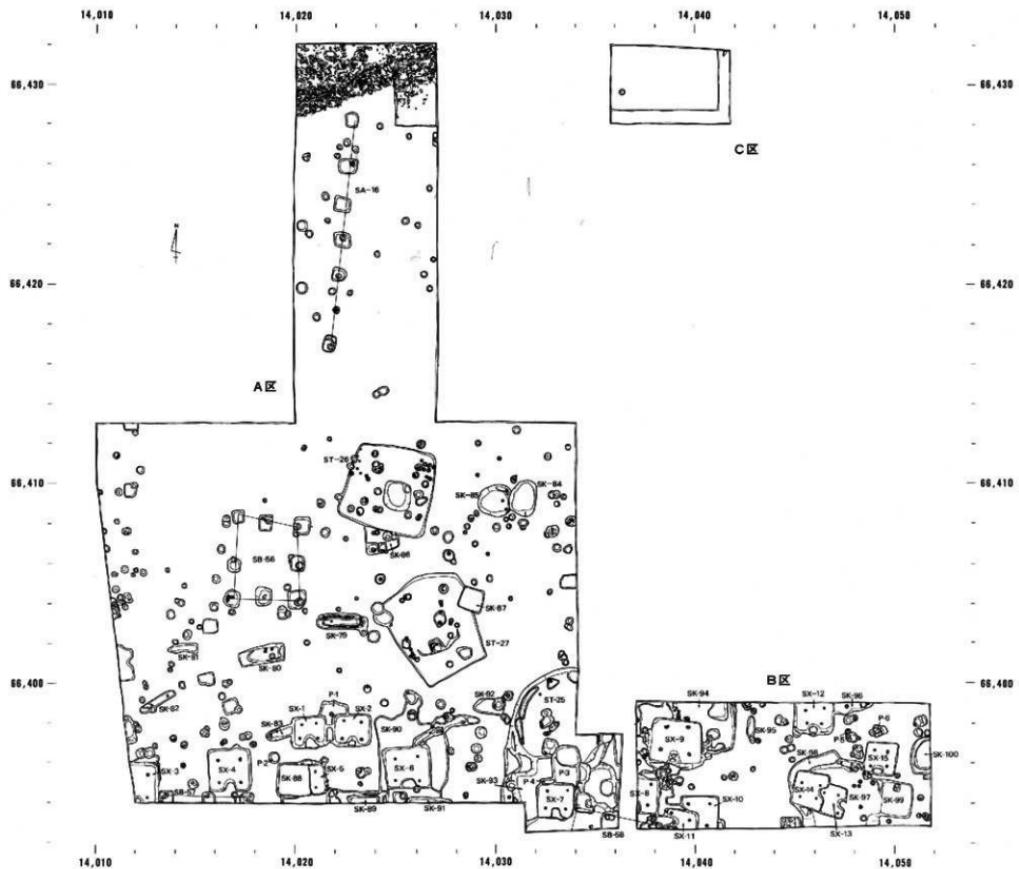
第Ⅰ層は表十層で、現在の耕作土層である。厚さ15~20cmを測る。B区でのみ、本層の下層に旧耕作土層とみられる灰黄色粘質上層を認めた。

第Ⅱ層は遺物包含層で、調査区南部から中央部にかけて認められ、厚さ40cmを測る部分もあるが、北部へと次第に薄くなり、A区北端部、C区では消滅する。包含する遺物は、上師器、須恵器が中心で、比江地区南部の遺物包含層から出土する土師質土器及び中世の遺物は皆無に等しい。遺物量は、遺構が集中する中央部から南部にかけてが圧倒的に多い。

第Ⅲ層はA・C区で認められた黒ボク（音地とよばれる鬼界カルデラの火山灰に腐植土の混



第5図 発掘区セクション図



第6図 速構全体図 (S = 1/200)

入したもの)を多量に含む層で、北部へとその堆積が厚くなる。礫層が露呈するA区北端部では消滅する。堆積が厚い北部では、腐植土との混和が十分でなく赤褐色を帯びている箇所が存し、調査区北端部では、黒色粘質土の下層部で認められた(第7図)。この層は、深んだ状態の自然地形に黒ボクが堆積上とともに流れ込んだものと考えられる。また、北部ではこの層の下層部で遺構を検出した。

第IV層は無遺物層で調査区中央部から南部にかけての遺構検出面となっている。調査区北端部では、黒色粘質土との間に礫混りの淡褐色と暗褐色の粘質土層を確認した(第7図)。これらの層も無遺物層である。

第V層は基盤の砂礫土層であり、A区の北端部で認められた層序であると共に、A区北端部での遺構検出面となっている。掘り方の深いSX等の遺構では、この層まで掘り込んでいる。

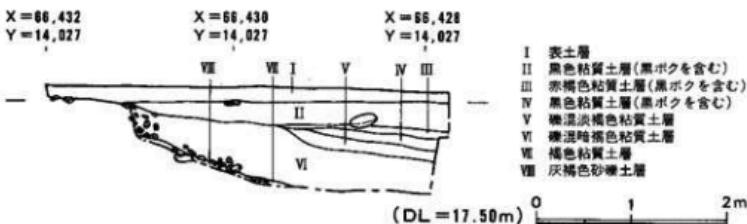
3. 遺構と遺物

(1) 包含層出土遺物

遺物包含層は第II層のみであり、弥生時代から平安時代にかけての遺物が出土している。図示できたのは、この内古墳時代以降のものであり、器種には須恵器、縄文陶器、土器、土鍾等がある。これらの大半は平安時代のものである。

須恵器(第24・25図1~26)

1~9は古墳時代の須恵器であり、1・2が杯蓋、3~7が杯身、8が邊の口頸部、9が蓋の口縁部であり、9の口縁部外面にはハケ状工具によるとみられる斜め方向の削突穴が残存する。また、杯蓋・身ではロクロから切り離す際のヘラ切り痕が残存するもの(1・4~7)があり、回転ヘラ削り調整は一部に施されているのみである。10はかえりのある杯蓋である。11~26は古代の須恵器である。11は振宝珠形のつまみが付く杯蓋、12~15が杯で、12には高台が付き、15の底部は深くなっている。16が碗、17~19が皿であり、17のII縁端部は内側へ折り返している。20~23は甕で、23は副部から底部にかけての破片である。24は鉢、25は円面鏡である。円面鏡の出土は、土佐国府跡発掘調査では5例目である。26は平釜の把手の一部ではないかとみられる。



第7図 調査区北端部セクション図

縁輪陶器（第25図27～29）

27・28は碗の口縁部、29は碗の底部であり、27・28が濃緑色、29が淡緑色を呈す。

土師器（第25・26図30～43）

30は杯、31～34は小杯⁽²⁾で、杯の口径は12cm以上、器高は3.5cm以上、小杯の口径は10.5cm以下、器高は3.5cm以下を測る。これらの底部はすべて回転ヘラ切りである。35は杓で、高さ1.4cmの高台が付く。36は皿、37～40は小皿で、皿の口径は12cm以上、小皿の口径は10.5cm以下を測る。これらの底部はすべて回転ヘラ切りである。41・42は台付皿で、41には高さ2.3cm、42には高さ2.5cmの「ハ」の字状に開く高台が付く。43は小型甕で、外面には煤が付着する。

黒色土器（第26図44）

椀であり、底部外面端部には断面逆三角形の小さな高台が付く。内面が黒色を呈す内黒の土器で、内面にのみヘラ磨きを施す。

土鍤（第26図45～55）

45～47が須恵質、48～55が土師質の土鍤である。45～47・50・52～55はほぼ円筒形で、それら以外は筋鉢形を呈す。

（2）弥生時代

弥生時代に属する遺構として、竪穴住居址1棟（S T-25）、土墳7基（S K-79～85）を検出した。7基の土墳の内5基は墓墳であるとみられる。

竪穴住居址

S T-25

S T-25は、A区南東端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の約1/2は調査区外にあり、全体は調査していない。遺構は、S K-93及びビット等に切られ、南側の壁は残存していない。平面形はほぼ円形で、直径5.05mを測る。壁はほぼ平坦な床面より急角度に立ち上がり、部分的に袋状をなして立ち上がっている。その高さは0.55m前後で床面の標高は16.592～16.655mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土であるが、床面直上部で黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を多く含む箇所と若干含む箇所が一部認められた。付属遺構として9個のビットと壁溝を確認した。ビットの内3個は、壁に沿って検出された。それらの深さは、床面から4～23cmであり、他の6個のビットはすべて床面から10cm以下である。⁽³⁾これらからして、主柱穴に足る深さを有する明確なビットは存在しないが、壁に沿って検出したビットが主柱穴になる可能性もあるのではないかろうか。出土遺物の量は比較的多かったが、そのほとんどは外面にタタキ目が残存する甕の細片であり、図示できたものは5点であった。

出土遺物

弥生土器（第26図56～60）

56は壺で、口縁部は大きく外反する。57は甕の底部で、外面にはタタキ目が残存する。58は瓶で、底部中央部に径7mmの円孔を穿つ。59・60は支脚の脚台部で、59は外面にタタキ目、内

面にしぶり目が残存する。60の脚台部は、底部中央部に5.5mmの円孔を穿ち、外面には下部から上部へ向ってへの指ナデ調整を施すものである。

土壤

SK-79 (第8図)

SK-79は、A区中央部南寄り、第V層上面で検出した木棺墓である。遺構の東南端部にピット1個が掘り込まれていた。平面形は舟形を呈し、長辺2.55m、短辺0.80m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN-89°-Eで、ほぼ真東を向く。遺構は2段掘りとなっており、断面形は逆凸状を呈す。底面より一段上がった平場の北側と南側に側石を配し、東端に人頭大の河原石を置く。埋土は、上層が黒色粘質土、下層が黒色粘質土に褐色粘質土のブロックを含む土である。出土遺物は極めて少なく、図示できたのは1点であった。

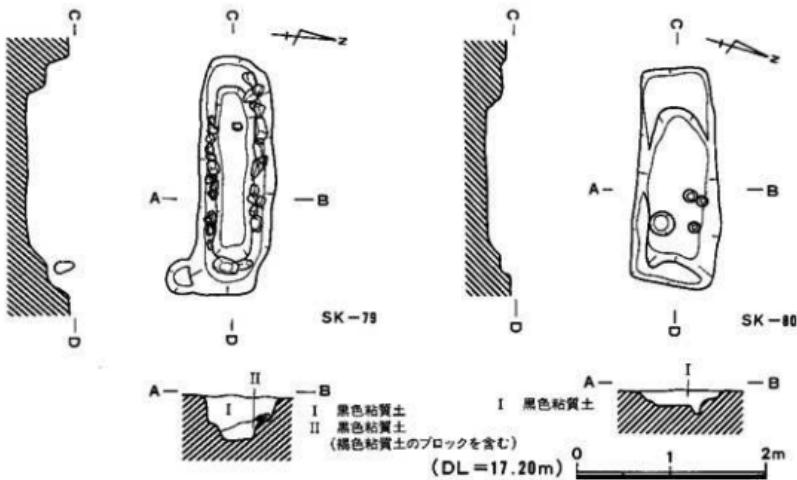
出土遺物

弥生土器 (第26図61)

壺の口縁部の破片で、口縁部はラッパ状に大きく外反する。

SK-80 (第8図)

SK-80は、SK-79の西約2mに位置し、第VI層上面で検出した。平面形はほぼ方形を呈し、長辺2.30m、短辺0.88m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN-78°-Eである。断面形は中央で舟底形、西で逆台形状を呈す。埋土は黒色粘質土で、底面でピット4個を検出した。遺物は、外面向にタタキ目が存する壺の細片が1点のみであった。



第8図 SK-79・80

SK-81・82(第9図)

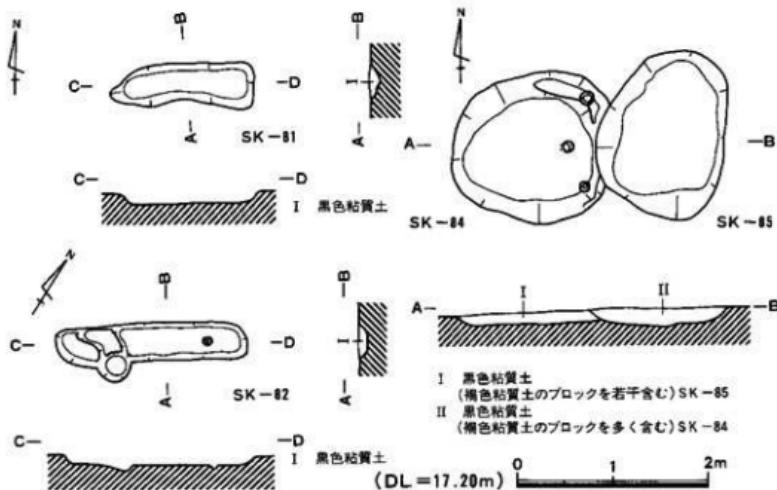
SK-81・82は、A区南西部、第Ⅳ層上面で検出した。平面形は、2基とも舟形を呈し、SK-81が長辺1.50m、短辺0.40m、深さ0.09m、SK-82が長辺2.00m、短辺0.40m、深さ0.09mを測る。長軸方向は、SK-81がN-87°-E、SK-82がN-61°-Eである。断面形は2基とも舟底形を呈し、ほぼ平坦な底面から緩やかに上がる。SK-82の底面にはピット1個が掘り込まれる。埋土は黒色粘質土であった。出土遺物は、SK-80同様皆無に等しく図示できるものはなかった。

SK-83

SK-83は、A区南部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の東側は、SK-1に掘り込まれ、残存していない。平面形は舟形を呈し、長辺1.36m以上、短边0.58m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-60°-EとSK-82とはほぼ同一方向である。断面形は概ねU字形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から比較的急な角度で上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物は、タタキ日の存する弥生土器の細片が3点であった。

SK-84・85(第9図)

SK-84・85は、A区西部北寄り、第Ⅳ層上面で検出した。SK-84がSK-85の東端部を切っている。平面形は、2基とも不整橢円形を呈し、SK-84が長辺1.79m、短辺1.36m、深さ0.16m、SK-85が長辺1.70m、短辺1.60m、深さ0.16mを測る。長軸方向は、SK-84がN-5°-E、SK-85がN-89°-Eで、直交した形となる。断面形は2基とも舟底形を呈し、



第9図 SK-81・82・84・85

ほぼ平坦な底面から緩やかに上がる。埋土は黒色粘質土で、SK-84が褐色粘質土のブロックを多く含むのに対しSK-85はその混入が少なかった。出土遺物は少なく、タタキ目が存する弥生土器の細片が十数点ずつあったに過ぎない。

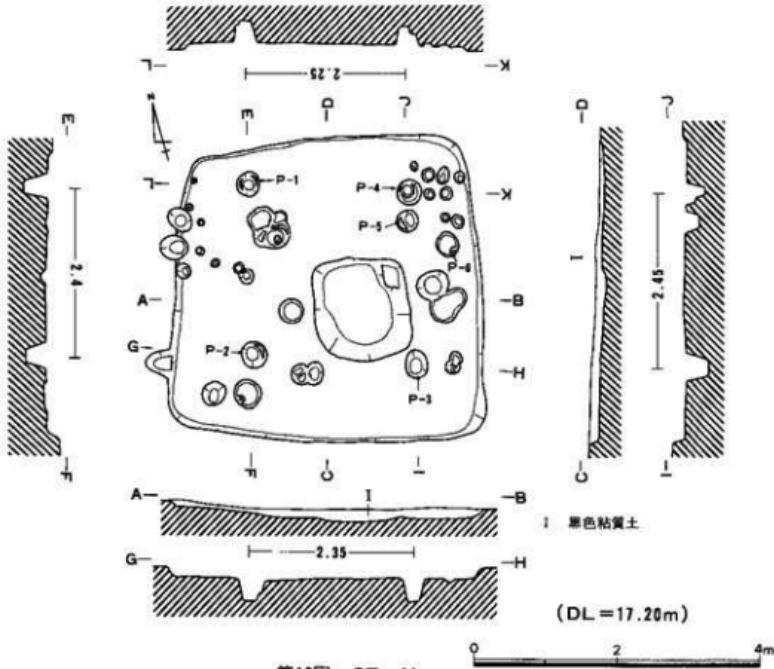
(3) 古墳時代

古墳時代に属する遺構として、竪穴住居址2棟(ST-26・27)、土塙2基(SK-86・87)を検出した。

竪穴住居址

ST-26(第10図)

ST-26は、A区ほぼ中央部、第N層上面で検出した。遺構は、SK-86の北側を切り、西壁で2個のピットに掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺4.4m、短辺4.3mを測る。長軸方向はN-78°-Wである。壁は概ねほぼ平坦な床面から角度を持って上がるが、北壁では床面との比高差約3cmと遺存状態が悪い。最も残存状態の良い部分でも20cm前後である。床面の標高は16.878~16.974mを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土のブロックを若干含むものであった。付属遺構として多数のピットを検出した。この内主柱穴と考えられるのはP-1~4で



ある。規模は、P-1が径0.34m、深さ0.29m、P-2が径0.36m、深さ0.29m、P-3が径0.34~0.40m、深さ0.33m、P-4が径0.35m、深さ0.29mで、ほぼ同規模の主柱穴であったといえる。これら柱穴の柱間距離はP1~2間2.40m、P2~3間2.35m、P3~4間2.45m、P4~1間2.25mで、ほぼ等間隔である。住居址中央部には、平面形が隅丸方形で長辺1.45m、短辺1.35m、深さ0.09mを測る浅い落ち込みが存在するが、その性格は不明確である。これら以外のピットは、P-5が深さ0.23m、P-6が0.26mを測る以外深さ0.10m前後と浅く、主柱穴とは考え難い。また、連替えは、主柱穴となり得るピットが先述の4個以外にないことから、行われなかつたと考えられる。出土遺物には、須恵器、土師器があるが、遺構の遺存状態が不良であったため量的に少なく、かつ細片であり、図示できたのは3点のみであった。

出土遺物

土師器（第27図62~64）

すべて甕で、62のみ全器形を知ることができる。62の甕の口縁部は胴部から「く」の字状に外反しそのまま口縁端部に至り、丸く仕上げるが、63と64の甕のそれは口縁端部でさらに外傾し、細く仕上げる。

ST-27

ST-27は、ST-26の南東約2mに位置し、第N層上面で検出した。遺構は、東壁でSK-87、北西壁で2個のピットに掘り込まれていた。平面形はほぼ方形で、長辺5.0m、短辺4.4mを測る。長軸方向はN-28°-Wである。壁はほぼ平坦な床面から角度を持って上がるところもあるが、壁高は5cm前後と極めて遺存状態が悪い。床面の標高は17.085~17.177mを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土のブロックを若干含むものであった。付属遺構として大小20個のピットを検出したが、その配置等から主柱穴と考えられるピットは確認できなかった。その他付属遺構とみられるものは検出されなかった。出土遺物には、須恵器、土師器があるが、遺構の遺存状況が極めて不良であったため少なく、かつ細片であった。

土壤

SK-86

SK-86は、A区ほぼ中央部、第N層上面で検出した。遺構の北側は、ST-26に掘り込まれて残存していない。平面形は方形を呈していたとみられ、長辺1.67m、短辺1.47m以上、深さ0.09mを測る。長軸方向はN-74°-Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面より急角度で上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物は、土師器の甕の細片が15点であった。

SK-87

SK-87は、A区中央部南東寄り、第N層上面で検出した。遺構は、ST-27の東壁を切って掘り込まれていた。平面形は方形を呈し、長辺1.20m、短辺1.14m、深さ0.05mを測る。長軸方向はN-71°-Eである。断面形はほぼ逆台形を呈するとみられるが、遺構の遺存状況が不良で不明確である。埋土は黒色粘質土である。遺物は、土師器の細片が数点で皆無に等しい。

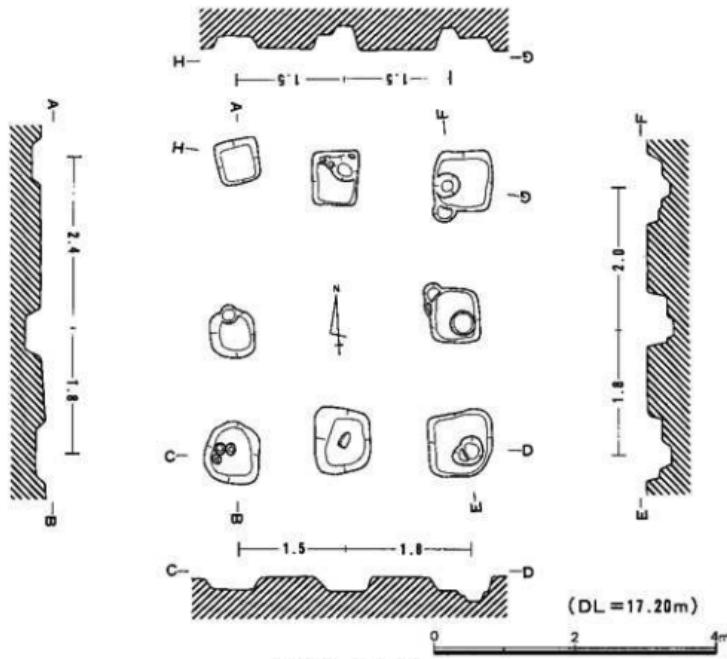
(4) 古代

古代に属する遺構として、掘立柱建物跡3棟(SB-56~58)、土塹13基(SK-88~100)、掘跡1列(SA-16)、性格不明遺構15基(SX-1~15)及び建物跡の復元には至らなかったが柱穴とみられるピット群を検出した。

掘立柱建物跡

SB-56(第11図)

SB-56は、A区中央部南西寄り、第N層上面で検出した桁行2間(総長約4.2m、14尺)、梁間2間(総長3.3m、11尺)の南北棟掘立柱建物跡である。棟方向は、N-3°5' - Eであるが、棟に歪みがあり一定しない。柱間寸法は、桁行が1.8~2.4m(6~8尺)、梁間が1.5~1.8m(5~6尺)とまちまちである。柱穴の掘り方はほぼ方形で、一辺64~94cmを計り、柱径は15~25cmである。これら柱穴の深さは検出面から13~34cmで、底面の標高は16.782~16.982mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土で、部分的に褐色粘質土の十粒を若干含むものであった。遺物には、弥生土器片2点、須恵器片1点、土師器の杯ないし碗の細片6点があるが、復元可能なものはなかった。



第11図 SB-56

SB-57

SB-57は、A区南端部西寄り、第Ⅳ層上面で検出した桁行不明、梁間2間（総長約4.2m、14尺）の南北棟掘立柱建物跡と推測される。棟方向はN-2°19'-Eである。柱間寸法は、桁行が不明で、梁間が1.8~2.4m（6~8尺）である。柱穴の掘り方はほぼ方形で、一辺60~68cmを測り、柱径は15~25cmである。これら柱穴の深さは検出面から22~60cmで、底面の標高は16.737~16.892mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土で、部分的に褐色粘質土の土粒を若干含むものであった。遺物には、須恵器、土師器があり、図示できたのは3点である。

出土遺物

須恵器（第27図65）

皿で、口縁部は体部から上外方へ真直にのび、端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラ切りで、器面は摩耗が著しい。

土師器（第27図66・67）

66は杯で、底部は回転ヘラ切りである。67は皿で、形態的には65の須恵器の皿とはほぼ同じである。

SB-58

SB-58は、A区とB区に跨っており、A区の柱穴はSK-93を掘り下げた段階、B区の柱穴は不定形の浅い落込みを除去した段階でそれぞれ検出した。建物は桁行不明、梁間2間（総長約4.2m、14尺）の南北棟掘立柱建物跡と推測される。棟方向はN-14°2'-Eである。柱間寸法は、桁行が不明で、梁間が1.8~2.4m（6~8尺）である。柱穴の掘り方はほぼ方形で、一辺58~98cmを測り、柱径は、各柱穴に残存する礎盤とみられる石から径20cm前後と考えられる。これら柱穴の深さは検出面から9.5~27cmで、底面の標高は16.427~16.671mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土で、部分的に褐色粘質土の土粒を若干含むものであった。遺物には、タタキ日の存する弥生土器片、須恵器の杯身・蓋、土師器の杯の細片があるが、図示できたのは、混入したとみられる須恵器1点であった。

出土遺物

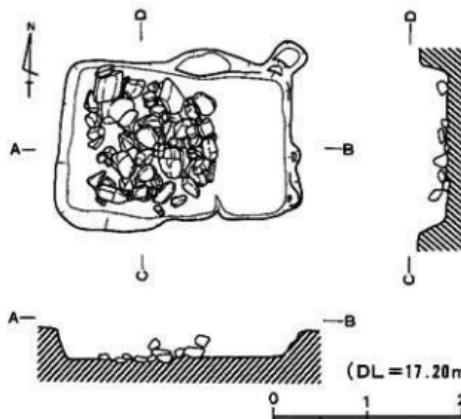
須恵器（第27図68）

須恵器の杯身で、たちあがりは6mmと低く、底部外面はヘラ切りである。

土壤

SK-88（第12図）

SK-88は、A区南端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、SX-5の西半分を切って掘り込まれている。検出時は、調査区外へ延びる遺構とみられたが、約5cm掘り下げた段階で明確なプランを確認できた。平面形は方形を呈し、長辺約1.78m、短辺約1.72m、深さ1.11mを測る。長軸方向は、N-0°-Eで、真北を向く、断面形は概ね逆台形を呈するが、袋状を成す箇所がある。壁はほぼ平坦な底面よりほぼ垂直に上がる。埋土は6層に分れ、第1層黒色粘質土、



第12図 SK-88 (集石検出状態)

第Ⅰ層淡黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を多量に含む、第Ⅲ層黒褐色粘質土、第Ⅳ層淡黒色粘質土、第Ⅴ層淡黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を少量含む、第Ⅵ層黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を若干含むものである。この内、第Ⅰ層中から集石を検出した。その状況からみて投棄されたものと考えられる。また、付属遺構とみられるものは確認されなかった。遺物量は比較的多く、器種には、須恵器、土師器があり、図示できたのは8点であった。

出土遺物

須恵器 (第27図69・70)

69は杯で、底部から体部にかけてが残存する。高台は、断面逆台形を呈する離りしたものである。70は皿で、底部は回転ヘラ切り、体部から口縁部にかけてほぼ真直に立ちあがる。

土師器 (第27図71~76)

71~73は杯で、底部はすべて回転ヘラ切りである。73の器高は4.8cmと他に比べ高い。74は盤で、高さ8mmの高台が付き、内外面にヘラ磨きを施す。75・76は皿で、底部は回転ヘラ切りである。75は完形である。

SK-89・91

SK-89・91は、A区南端部、第Ⅳ層上面で検出した。2基とも、遺構の大半が調査区外へ延びており、全容は不明である。後述のSXのような遺構となる可能性もある。平面形は方形を呈するとみられ、SK-89が長辺2.83m、短辺0.53m以上、深さ0.18m、SK-91が長辺2.20m以上、短辺0.24m以上、深さ0.67mを測る。長軸方向は、SK-89がN-89°-W、SK-91がN-88°-Wとほぼ同一方向である。断面形はほぼ逆台形で、SK-91の壁は底面から垂直に近い角度で上がる。埋土は、2基とも黒色粘質土である。遺物には、須恵器、土師器があるが、すべて細片であった。

SK-90

SK-90は、A区南端部東寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の中央部は、SX-6によつて掘り込まれている。平面形は不整形で、北と東に窪状に派生する。長辺5.38m、短辺5.20m、深さ0.09mを測る。長軸方向はN-3°-Wである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は床面より急角度で上がる。埋土は黒色粘質土で、遺物には、須恵器片、土師器片、土錐があった。

出土遺物

土錘（第27図77）

土師質の土錘で、紡錘形を呈す。

SK-92

SK-92は、A区南東部、第Ⅳ層上面で検出した。平面形は不整形で、長辺1.50m、短辺0.86m、深さ0.08mを測る。長軸方向はN-85°-Wである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は南側で急角度、北側で緩やかに上がる。底面には、深さ10cmのビット1個が掘り込まれる。埋土は黒色粘質土である。遺物には、須恵器片1点、土師器片9点があるが、すべて細片であり、図示できるものはない。

SK-93

SK-93は、A区南東端、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ST-25の南を切って掘り込んでいる。一方、SX-9及び数個のビットに掘り込まれる。平面形は不整方形で、長辺5.60m、短辺3.80m以上、深さ0.72mを測る。長軸方向はN-84°-Wである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は底面より急角度で上がる。また、壁は途中で部分的に平場を有す。埋土は黒色粘質土である。遺物には、弥生時代の住居址を掘り込んでいるため弥生土器片が比較的多くあり、他に須恵器片、土師器片もあった。これらの大半は細片で、図示できたのは、混入したとみられる遺物類であった。

出土遺物

弥生土器（第27図78）

小形の器台とみられるもので、脚部の大半が欠損する。脚部内面にはしづり目が残存する。

須恵器（第28図79）

杯身で、焼成時の歪みが残存する。底部はヘラ切りである。

砥石（第28図80）

砂岩の砥石で、表裏両面を使用する。印石としての再利用が考えられる。

SK-94

SK-94は、B区西部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の南東部は、SX-9によって掘り込まれる。平面形は不整方形で、長辺3.15m、短辺2.58m以上、深さ0.35mを測る。長軸方向はN-87°-Wである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は底面より急角度で立ち上がる。底面には大小10個のビット、西壁、南壁直下には幅15cm前後の細い溝を一部で確認した。埋土は黒色粘質土である。遺物には、須恵器片、土師器片があるが、ほとんど細片であり図示できたのは1点であった。

出土遺物

土師器（第28図81）

羽釜で、口縁部直下に鈎が付く。外面には煤の付着は認められない。

SK-95

SK-95は、B区中央部西寄り、第N層上面で検出した。遺構は、南端でビット1個を切っている。平面形は舟形で、長辺1.06m、短辺0.39m、深さ0.09mを測る。長軸方向はN-5°-Eである。断面形は舟底形を呈し、壁はほぼ平坦な底面より緩やかに上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物はすべて土師器で、器形には杯ないし碗と甕がある。すべて細片であった。

SK-96

SK-96は、B区北東部、第N層上面で検出した。遺構の西側はSX-12に切られ、また、その大半は調査区外に延びており企窓は不明である。平面形は、方形になる可能性もあるが、現状では不整形で、長辺2.00m以上、短辺0.64m以上、深さ0.13mを測る。長軸方向はN-77°-Eである。断面形はほぼ逆台形を呈するとみられ、壁は底面より急角度で立ち上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物には、弥生土器片、上師器片があるが、すべて細片で、かつ摩耗する。

SK-97・98

SK-97・98は、B区中央部東寄り、第N層上面で検出した。SK-97はSK-98を切って掘り込み、また、2基ともSX-13・14を切っている。平面形は、2基とも不整形で、SK-97が長辺4.00m以上、短辺3.29m、深さ0.27m、SK-98が長辺2.80m、短辺0.56m以上、深さ0.43mを測る。長軸方向は、SK-97がN-88°-E、SK-98がN-72°-Eである。断面形は、2基ともほぼ逆台形を呈し、壁は底面より急角度で立ち上がる。埋土は、SK-98が黒色粘質土、SK-97が黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を若干含むものであった。遺物は、その大半が上師器の細片であるが、図示できたのは、混入したとみられる土製支脚と土錐である。2点ともSK-97からの出土である。

出土遺物

弥生土器（第28図82）

文脚で、角部2本と脚台部下半が欠損する。脚台部内面にはしづり目が残存する。

土錐（第28図83）

土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。

SK-99

SK-99は、B区東部、第N層上面で検出した。遺構は、SK-87を切って掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺1.78m、短辺1.59m、深さ0.29mを測る。長軸方向はN-8°-Eである。後述のSXとはほぼ同形、同規模であるが、杭穴と階段状の段部が欠落する点で異なる。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がる。埋土は、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土のブロックを多量に含む黒色粘質土であった。また、底面北端部で検出した平面形が方形のビットは、SK-97の埋土とは異なり、SK-99によりビット上部を掘削されたものと判断される。遺物量は比較的多く、器種には須恵器、土師器、黒色土器（内黑）があるが、すべて細片で図示できるものはなかった。

SK-100

SK-100は、B区東端部、第Ⅶ層上面で検出した。遺構の東半分は調査区外にあり、全容は不明である。平面形は不整梢円形で、長辺1.90m、短辺0.95m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN-1°-Wで、ほぼ真北を向く。遺構は2段掘りで、断面形は舟底形を重ねた形となり、壁は底面、平場より緩やかに立ち上がる。埋土は黒色粘質土であった。遺物には弥生土器の器片から土師器の小皿片までがあり、全部で16点である。これらはすべて細片で、図示できるものはなかった。

壠跡

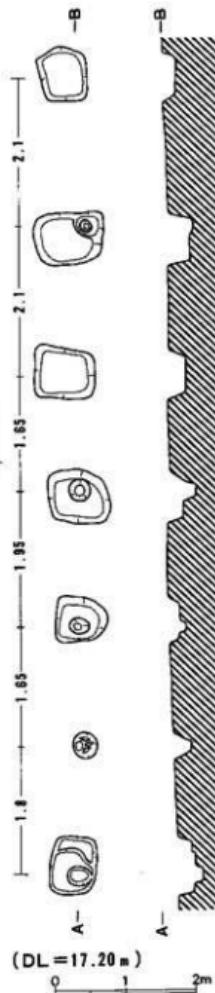
SA-16（第13図）

SA-16は、A区北部、第Ⅲ層下層部で検出した南北の壠跡である。試掘トレンチで検出したため、当初建物跡を想定し、東側を拡張したが、相対する柱穴は検出されず、壠跡とした。方向は、N-6°8'-Eで、ほぼ磁北を向く。規模は6間（総長約11.25m、37.5尺）で、柱間寸法は1.65~2.10m（5.5~2.1尺）と様々である。柱穴の掘り方は、1個が径37cmの円形である以外、すべて方形で、一辺65~97cmを測り、柱径は17cm前後と考えられる。これら柱穴の深さは検出面より16.3~42.0cmで、底面の標高は16.605~17.007mを測る。埋土は褐色粘質土の土粒を若干含む黒色粘質土であった。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器の細片が数点出土しているのみである。

性格不明遺構

SX-1・2（第14図）

SX-1・2は、A区南部、第Ⅸ層上面で検出した。遺構は、P-1を切って掘り込まれており、検出段階では東西に長い平面形が長方形を呈する遺構とみられ、約7cm掘り下げた時点で2基のプランを確認した。平面形は、2基とも正方形に近い方形で、SX-1が長辺1.80m、短辺1.60m、深さ0.55m、SX-2が長辺1.88m、短辺1.63m、深さ0.55mを測り、ほぼ同規模である。長軸方向は、SX-1がN-87°26'-E、SX-2がN-89°8'-Eであり、ほぼ同一方向を示す。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で立ち上がっている。底面の標高は、2基とも16.560~16.669mを測る。埋土は、2基とも上層が褐色粘質土上の土粒を多量に含む黒色粘質土で、下層が褐色粘質土のブロックを若干含む黒色粘質土であ



第13図 SA-16

る。付属遺構として、各4個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径8~16cm、深さ6~11cmを測り、杭間距離は、SX-1が0.73~0.80m、SX-2が0.88~0.98mである。段部の底面からの高さは、SX-1が44cm、SX-2が41cmである。遺物は、須恵器、土師器等があるが、全般に細片であり、図示できたのは、4点で、84~86がSX-1、87がSX-2からの出土である。87は混入したものとみられる。

出土遺物

土師器（第28図84）

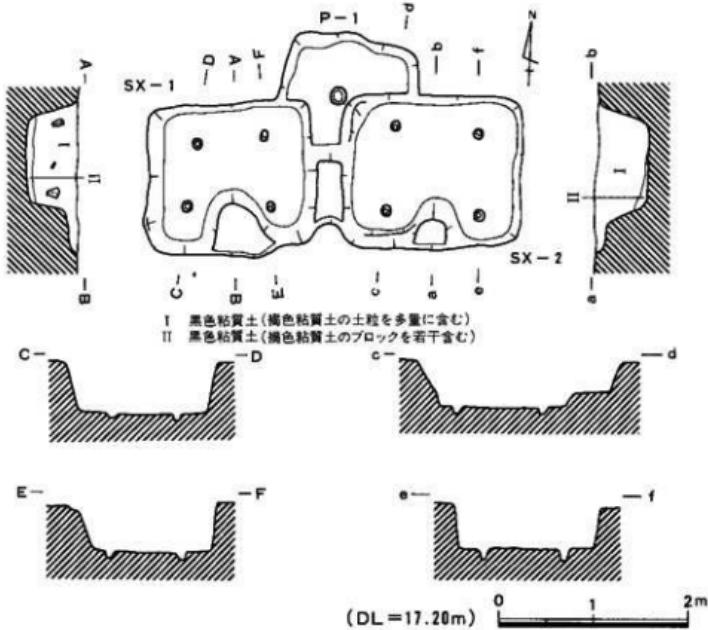
杯で、底部は回転ヘラ切りである。体部は内湾気味に上外方へ立ち上がり、口縁部でやや外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。

土錘（第28図85・86）

土師質の土錘で、85がほぼ円筒形、86が鉤錘形を呈す。

須恵器（第28図87）

杯身で、古墳時代のものである。たちあがりは、1.2cmと比較的高く、底部外面ほぼ全面に回転ヘラ削り調整を施し、3~7のような底部外面のヘラ切り痕は認められない。



第14図 SX-1・2、P-1

SX-3 (第15図)

SX-3は、A区南西端、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の西半分と南端部は調査区外である。平面形は方形で、長辺2.20m以上、短辺1.49m以上、深さ0.46mを測る。長軸方向はN-1°9'-Wで、ほぼ真北を向く。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.624~16.681mを測る。埋土は、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘質土である。付属遺構として、2個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径15~18cm、深さ約10cmである。杭間距離は1.15mである。段部の高さは、底面から34cmである。遺物は、須恵器、土器があるが、その大半は細片である。

出土遺物

須恵器 (第28図88・89)

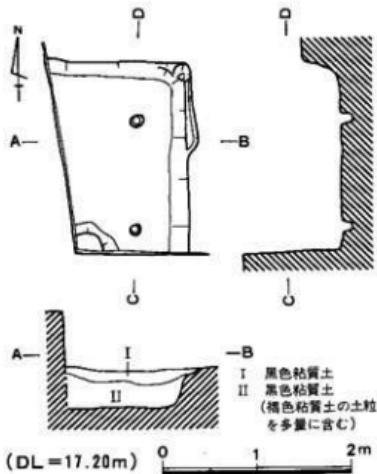
88は回転ヘラ切り底の杯、89は甕で、底部から胴中央部にかけて残存する。

土師器 (第28図90~92)

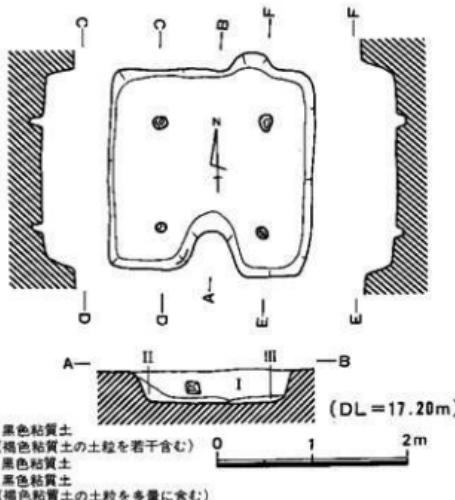
90は碗で、高さ1.2cmの高台が付く。91・92は皿で、口縁端部を若干肥厚する。

SX-4 (第16図)

SX-4は、A区南端部西寄り、第Ⅳ層上面で検出した。平面形は方形で、長辺2.20m、短辺2.15m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN-1°55'-Wで、ほぼ真北を向く。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.754~16.797mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土であり、褐色粘質土の土粒の含有量により3層に分層できる。付属遺構として、4個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径12~17cm、深さ7~16cmである。杭間距離は1.10~1.18mである。段部の高さ



第15図 SX-3



第16図 SX-4

は、底面から31cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、その大半は細片であった。

出土遺物

土師器（第28図93）

杯で、底部は回転ヘラ切りである。体部は内湾気味に上がり、口縁部で外反し、端部は細い。

SX-5（第17図）

SX-5は、A区南端部、第Ⅶ層上面で検出した。遺構の西半分は、SK-88に切られ残存していない。平面形は方形で、長辺1.75m、短辺0.83m以上、深さ0.60mを測る。長軸方向はN-3°51'-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.552～16.622mを測る。埋土は黒色粘質土で、下層部に褐色粘質土の土粒を若干含む褐色粘質土を認める箇所があった。付属遺構として、2個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部の一端を確認した。杭穴の規模は直径約10cm、深さ5～8cmである。杭間距離は0.83mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、ほとんど細片である。

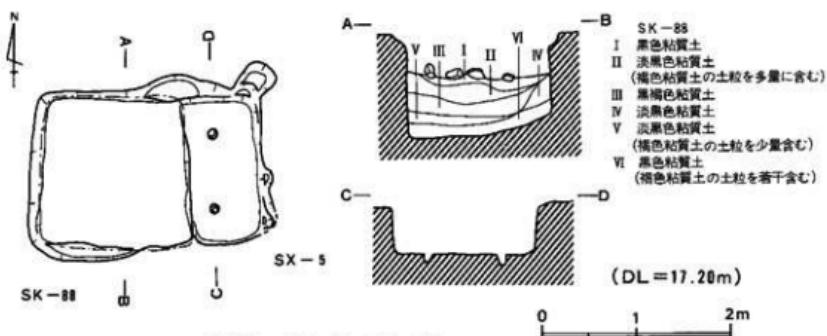
出土遺物

土師器（第28図94～97）

94～96は杯である。底部外周はすべて回転ヘラ切りである。97は皿で、完形であり、底部外周は回転ヘラ切りである。

SX-6（第18図）

SX-6は、調査区南端部東寄り、第Ⅶ層上面で検出した。遺構は、SK-90を切って掘り込み、南壁でピット1個に掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺2.31m、短辺2.20m、深さ0.64mを測る。長軸方向はN-84°7'-Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.484～16.557mを測る。埋土は、3層に分層でき、第Ⅰ層が黒色粘質土、第Ⅱ層が褐色粘質土の土粒を多量に含む褐色粘質土、第Ⅲ層が褐色粘質土。



第17図 SX-5、SK-88

の土粒を若干含む黒色粘質土であった。付属遺構として、5個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径10~12cm、深さ12~17cmである。この内、南壁直下から検出された杭穴は、他の杭穴と位置的にずれる。他の4個の杭間距離は1.20~1.27mである。段部の高さは底面から41cmである。遺物は、須恵器、土師器、土鉢、銅環があり、復元可能な遺物が比較的多くあった。

出土遺物

須恵器（第28・29図98~102）

98は杯身で、底部外面はヘラ切りである。99は杯蓋で、つまみは残存していない。100は高杯の脚台部とみられる。101・102は甕で、口縁部が残存する。

土師器（第29図103~110）

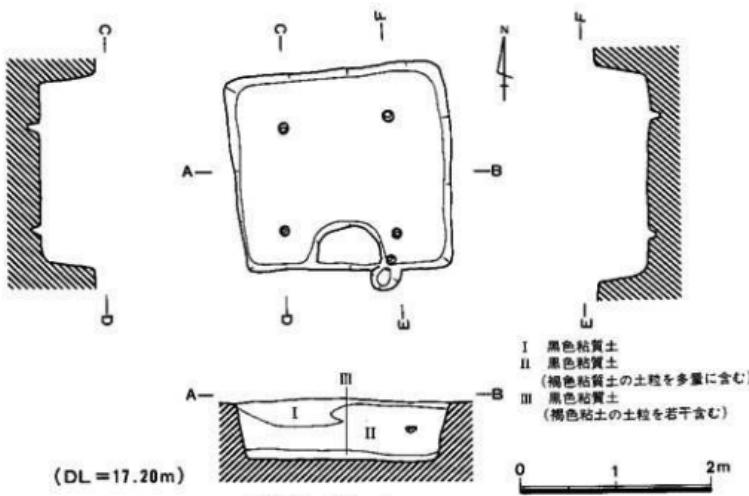
103~106は杯で、底部はすべて回転ヘラ切りである。103の外面と104の内面にはヘラ磨きを一部施す。107は碗で、断面逆台形の高さ1.1cmの高台が付く。108~110は甕で、110縁部は胴部から大きく外傾する。110の外面のみに漆の付着が認められた。

土鉢（第29図111~118）

すべて土師質の土鉢で、116・118が筋鉢形、他が円筒形を呈す。

銅環（第29図119）

環外径2.3cm、環内径1.2cmを測る。全般に銹化している。



SX-7 (第19図)

SX-7は、A区南東端部、第N層上面で検出した。遺構はSK-93を掘り込んでいた。平面形は方形で、長辺1.93m、短辺1.73m、深さ0.98mを測る。長軸方向はN-87°35' - Eである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は、垂直に近い角度で上がる箇所と袋状をなす箇所がある。底面の標高は16.232~16.307mを測る。埋土は、黒褐色粘質土と黑色粘質土であるが、褐色粘質土の土粒の含有量により5層に分層できる。付属遺構として、4個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径8~12cm、深さ約8cmである。杭間距離は0.90~1.03mである。段部の高さは底面から37cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、大半は細片である。

出土遺物

須恵器 (第29図120)

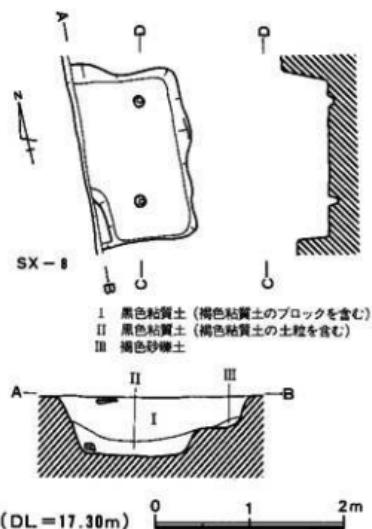
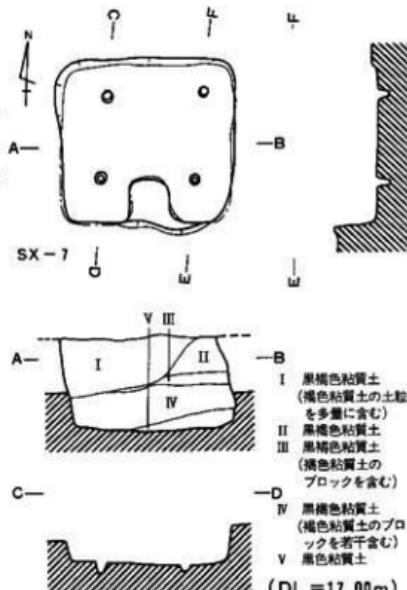
堀で、外面にはタタキとハケ調整を施す。

土師器 (第30図121)

高杯で、内外面にヘラ磨きを施し、内面に粗雑な螺旋状の硝文が残存する。

SX-8 (第19図)

SX-8は、B区西端部、第N層上面で検出した。遺構の西半分は調査区外である。平面形は方形で、長辺1.80m、短辺1.14m以上、深さ0.56mを測る。長軸方向はN-3°12' - Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.603~16.676mを測る。埋土は、3層に分層でき、第I層が褐色粘質土のブロックを含む黒色粘質土、第II層が褐色粘質土の土粒を含む黒色粘質土、第III層が褐色砂礫土である。付属遺構として、2個の杭穴と南壁に掘り残された



第19図 SX-7・8

階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径約10cm、深さ約7cmである。杭間距離は1.10mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、その大半は土師器が占める。また、ほとんどの遺物は細片であり、図示できたのは3点である。

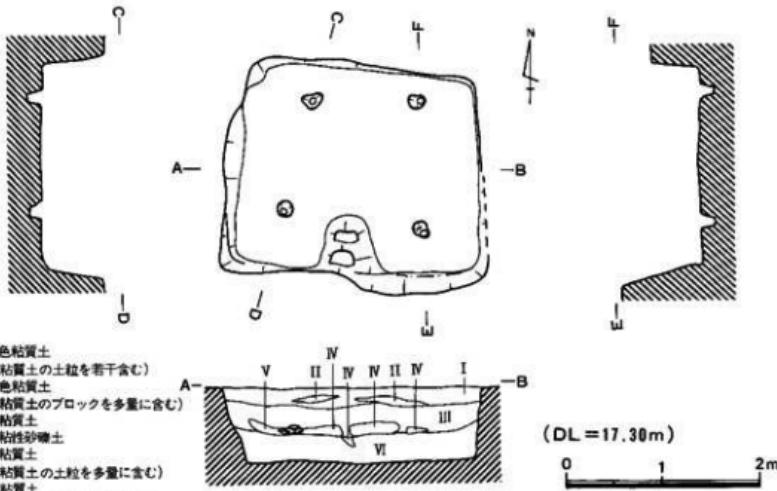
出土遺物

土師器（第30回122～124）

122は杯、123・124は小皿である。底部外周はすべて回転ヘラ切りである。

SX-9（第20回）

SX-9は、B区西部、第N層上面で検出した。遺構はSK-94を掘り込んでいた。平面形はほぼ方形で、長辺2.70m、短辺2.40m、深さ0.76mを測る。長軸方向はN-86°34' - Wである。断面は逆台形を呈し、壁は垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.396～16.499mを測る。埋上は大きく3層に分層され、上層から褐色粘質土の土粒を若干含む黒褐色粘質土、黒色粘質土、褐色粘質土の土粒を若干含む黑色粘質土である。間層として、褐色粘質土のブロックを多量に含む黒褐色粘質土、褐色粘性砂礫土、褐色粘質土の土粒を多量に含む黑色粘質土を認めた。付属遺構として、4個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径12～18cm、深さ9～15cmである。杭間距離は1.13～1.50mである。段部は2段で、底面からの高さは、下段面が14cm、上段面が34cmである。遺物は、須恵器、土師器、土鍾があり、出土量は比較的多くその大半は土師器であった。その内、図示できたのは、須恵器1点、土師器25点、土鍾2点である。



第20回 SX-9

出土遺物

須恵器（第30図125）

長頸甌の底面近くとみられ「ハ」の字状に大きく開く高台が付く。

土師器（第30・31図126～150）

126・127は杯で、126の器面全面にヘラ磨きを施す。128～130は小杯、131・132は碗である。133は皿、134～138は小皿であり、137・138の底面外面は糸切りで、それ以外は回転ヘラ切りである。139～143は台付皿で、139・140の口縁部内面には円線を回らす。144・145は台付小皿で、145の底部外面は糸切りである。146・147は甌で、147の外面には煤が付着する。148～150は羽釜で、148・149は口縁部下に鈎が付き、150は胴部に鈎と把手が付く。148の外面には煤の付着が若干認められる。

土鍤（第31図151・152）

土師質の土鍤で、151は紡錘形、152は円筒形を呈す。

S X - 10（第21図）

S X - 10は、B区南西部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、S X - 11に切られ、かつ、南側は調査区外である。平面形はほぼ方形で、長辺1.90m、短辺1.64m以上、深さ0.31mを測る。長軸方向はN-89°31' - Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.926～17.023mを測る。埋土は2層に分層され、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を含む黒色粘質土である。付属遺構として、3個の杭穴と西壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径13～17cm、深さ4～14cmである。杭間距離は1.13～1.15mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器、土鍤があり、その大半は、土師器である。

出土遺物

土師器（第31図153～157）

153・154は小杯で、155は小皿であり、底部外面はすべて回転ヘラ切りである。156・157は羽釜で、口縁部下には鈎が付く。157の外面には煤が付着する。

土鍤（第31図158）

須恵質の土鍤で、円筒形を呈す。

砥石（第31図159）

表裏両面、外側面を使用する。約1/4が欠損する。

S X - 11（第21図）

S X - 11は、B区南西部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、S X - 10を切って掘り込まれていた。平面形はほぼ方形で、長辺1.75m、短辺1.05m以上、深さ0.54mを測る。長軸方向はN-82°24' - Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.607～16.688mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土であるが、褐色粘質土の土粒、ブ

ロックの含有量により4層に分層される。付属遺構として、2個の杭穴と西壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径約14cm、深さ約14cmである。杭間距離は1.00mである。段部は2段で、底面からの高さは、下段面が20cm、上段面が31cmである。遺物は、須恵器、土師器、土鏡があり、その大半は土師器であった。遺物量は、遺構の規模に比べ多く、かつ、完形に近い遺物が比較的多かった。また、164の杯の内面に貼り付いた状態で176の小皿が出土した。

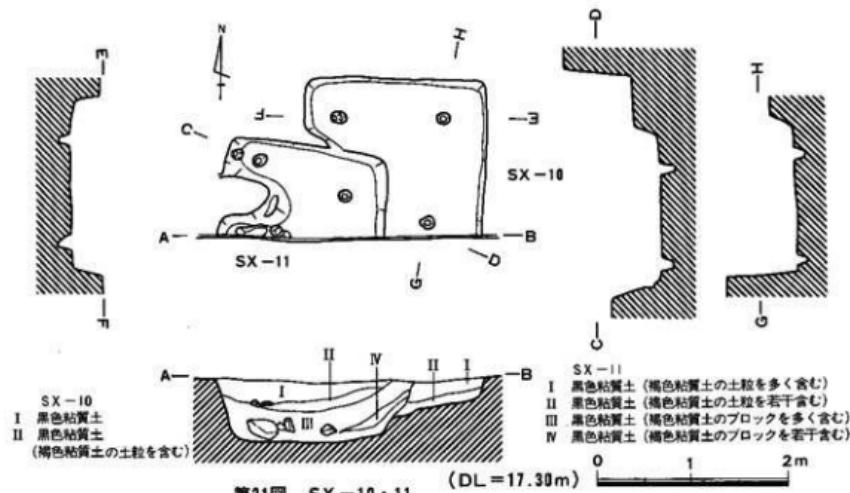
出土遺物

須恵器（第32図160）

杯で、底部外面は回転糸切りである。

土師器（第32・33図161～180）

161～164は杯で、底部外面は、161～163が回転ヘラ切り、164が糸切りである。165～174は小杯で、底部外面は、165～170・172・173が回転ヘラ切り、171・174が糸切りである。体部の形態には、上外方へほぼ直线上に上るもの、内湾気味に上るものがあり、口縁部の形態には、体部の形態がそのまま続くもの、外傾ないし若干外反するものがある。175は碗で、底部外面には「ハ」の字状に開く高台が付く。176・177は小皿で、176の口縁部内面には凹線が回る。底部外面は2点とも回転ヘラ切りである。178は台付小皿で、底部外面には「ハ」の字状に開く高さ1.6cmの高台が付く。179は甕で、胴部は若干外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は、若干肥厚し、丸く仕上げる。頸部内面には平行のタタキ目が残存する。外面には、煤の付着は認められない。180は羽釜で、口縁部下には鉤が付く。外面にはハケ日と縦方向のタタキ目が残存する。外面には煤の付着は認められない。



SX-12 (第22図)

SX-12は、B区中央部北寄り、第IV層上面で検出した。遺構の北側は、調査区外である。また、遺構は、SK-96を切って掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺2.04m、短辺1.50m以上、深さ0.57mを測る。長軸方向はN-89°12'-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.736~16.804mを測る。埋土は、2層に分層され、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を含む黒色粘質土である。付属遺構として、4個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径12~14cm、深さ6~10cmである。杭間距離は0.65~0.95mである。段部の高さは底面から32cmである。遺物は、須恵器、土師器、土錐があるが、大半が細片で、図示できたのは2点であった。

出土遺物

土師器 (第33図181)

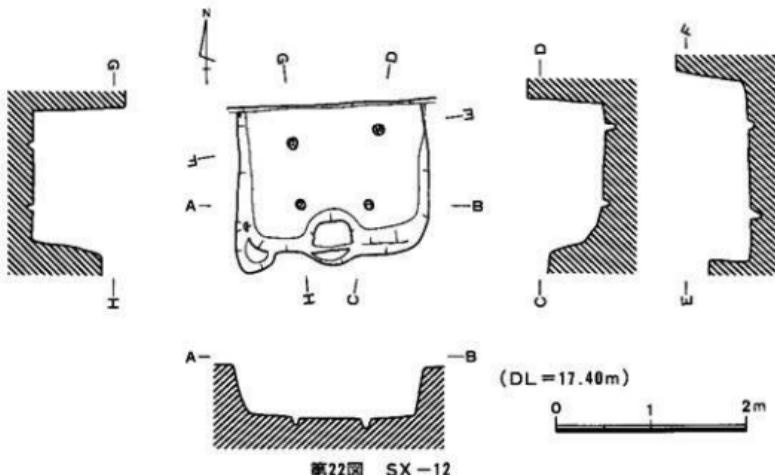
耳皿で、底部外面は回転ヘラ切りである。

土錐 (第33図182)

土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。

SX-13

SX-13は、B区中央部東寄り、第IV層上面で検出した。遺構は、SX-97及びSX-14を切って掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺1.56m、短辺1.50m、深さ0.56mを測る。長軸方向はN-15°31'-Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.771~16.794mを測る。埋土は褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘



第22図 SX-12

質土である。付属遺構として、4個の杭穴と東壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径6~10cm、深さ4~5cmである。杭間距離は0.63~0.93mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、大半が細片であった。

出土遺物

土師器（第33図183・184）

183は杯、184は皿である。2点とも底部外面は回転ヘラ切りである。

須恵器（第33図185）

鉢であり、焼成は瓦質上器に似る。調査は須恵器の手法であり、内面が同心円文のタタキ、外面が平行のタタキの後に回転カキ目調整を施す。

S X-14

S X-14は、B区中央部東寄り、第Ⅶ層上面で検出した。遺構はSK-97・98を切って掘り込まれていた。一方、東端部をS X-13に切られていた。平面形は方形で、長辺1.86m、短辺1.60m、深さ0.62mを測る。長軸方向はN-14°23'-Eである。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.718~16.779mを測る。埋土は2層に分層され、上層が褐色粘質土の土粒を若干含む黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を比較的多く含む黒色粘質土であった。付属遺構として、4個の杭穴と東壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径6~10cm、深さ約5cmである。杭間距離は0.70~0.85mである。段部は、S X-13に切られているため、残存高4cmであるが、30cm程度はあったものと推測される。遺物は、須恵器、土師器、土鍤があり、その大半は土師器が占めるが、ほとんど細片で、図示できたのは6点である。

出土遺物

須恵器（第33図186）

杯蓋で、天井部中央には丸味のあるつまみが付く。

土師器（第33図187~190）

187~189は杯である。体部から口縁部にかけては上方へほぼ直直上がる。190は皿である。何れも底部外面は回転ヘラ切りである。

土鍤（第33図191）

土師質の土鍤で、紡錘形を呈す。

S X-15（第23図）

S X-15は、B区東部、第Ⅷ層上面で検出した。遺構は、SK-97の北東端を切って掘り込んでいる。平面形は方形で、長辺1.65m、短辺1.60m、深さ0.45mを測る。長軸方向はN-8°58'-Eである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は平坦な底面から概ね垂直に近い角度で上がるが、一部袋状をなす箇所もある。底面の標高は16.848~16.913mを測る。埋土は、2層に分層され、上層が褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘質土、下層が黒色粘質土である。付属遺構と

して、4個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径8~13cm、深さ3~6cmである。杭間距離は0.67~0.85mである。段部の高さは底面から25cmである。遺物は、須恵器、土師器、土鍤があり、その大半は土師器が占めるが、ほとんど細片であった。

出土遺物

土師器（第33図192・193）

192は杯、193は皿である。2点とも底部外面は回転ヘラ切りである。

土鍤（第33図194）

土師質の土鍤で、紡錘形を呈す。

その他の遺構と遺物

遺構

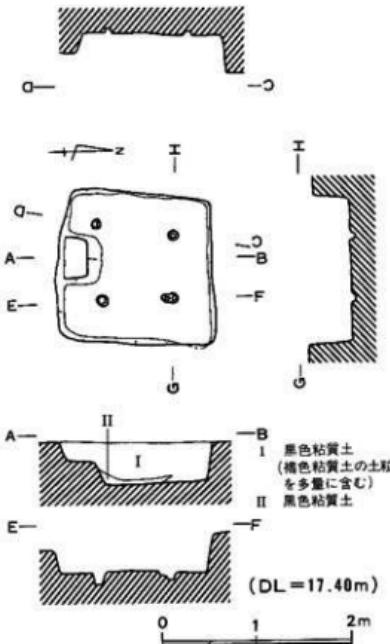
遺構の大半はピットであり、その多くは、建物跡等は確認できなかった柱穴とみられる。掘り方は、円形ないし方形を呈し、黒色粘質土を埋土とする。遺物は、赤陶土器、須恵器、土師器、黑色土器、土鍤等があるが、

ほとんどが細片で、出土量も僅かであった。この内、図示できたのは7点で、P-1~6から出土している。また、この中には混入とみられる遺物（197・198）も含まれる。

P-1は、一辺1.35m、深さ0.32mを測る方形のピットで、SX-1・2に切られている。P-2は、径0.56m、深さ0.08mを測る円形のピットである。P-3・4は、一辺1.35~1.95m、深さ0.68~0.76mを測る方形のピットで、P-3はP-4に、P-4はSX-7にそれぞれ切られている。P-5・6は、径0.28~0.60m、深さ0.19~0.24mを測る円形のピットである。

出土遺物（第33図195~201）

195はP-1出土の土師器の柄で、底部外面は回転ヘラ切りである。196はP-2出土の土師器の杯で、底部外面は回転ヘラ切りである。197はP-3出土の赤陶土器の甕で、外面にはタタキ目が残存する。198・199はP-4出土の須恵器と土師器である。198は杯蓋で、天井部はヘラ切りである。199は杯で、底部外面は回転ヘラ切りである。200はP-5出土の土師器の杯で、底部外面は糸切りである。201はP-6出土の土師器の小皿で、底部外面は回転ヘラ切りである。



第23図 SX-15

註

- (1) この遺構の時期を古代の範疇で捉えた場合、現時点では全国的に類例がなく、その性格についても、兵舎や宿等が考えられるが、明確ではない。底面に杭穴が残存することから、上部構造も考慮され、竪穴遺構ともみることができるが、本報告書では、性格不明遺構(S X)として序述している。
- (2) 上部器の羽釜が共伴するS X-9~11では、第9表にみるように法量において大きく2つに分けることができる。すなわち、口径8.5~11.0cm、器高2.0~4.5cmの一群と口径12.5~18.0cm、器高3.0~6.0cmの一群である。これらは、明らかに意図的に製作されたものとみられ、それゆえに前者を小杯、後者を杯という呼称で表現したい。また、上部器の羽釜が共伴しない他の遺構では、第10表のように小杯と杯の中間的な一群が存在する。それらは、口径11.0cm以上、器高2.5cm以上であり、從前から杯と称されているもので、本報告書でもそれに従うこととした。
- (3) 田村遺跡群で検出された弥生時代前期前半の住居址(Loc. 18のS T 1, Loc. 25のS T 3・5等)に類例を求めることができる。(高知県教育委員会『田村遺跡群』第2分冊 1986年)

第2表 竪穴住居址計測表

遺構番号	平面 形態	規 模 (m)	E軸 方向 (Nは真北)	柱 穴 (主柱穴)	施 設	面 積 (m ²)	備 考
S T-25	円形	5.05	——	不明確	壁溝、ピット等	20.03	弥生時代
S T-26	方形	4.4×4.3	N-74'-W	4	ピット等	18.92	古墳時代
S T-27	"	5.0×4.4	N-28'-W	不明確	"	22.00	"

第3表 据立柱建物跡計測表

遺構番号 (建物名)	規 模				面 積 (m ²)	棟 方 向 (Nは真北)	備 考			
	梁×桁 (間)×(間)	梁間m×桁行m (尺)×(尺)	柱 間 距 離							
			梁m(尺)	桁m(尺)						
SB-56	2×2	3.3(11)×4.2(14)	1.5(5)~1.8(6)	1.8(6)~2.4(8)	13.86	N-3'5"-E	棟に添み			
SB-57	2×-	4.2(14)×	1.8(6)~2.4(8)	——	——	N-2'19"-E	桁は不明			
SB-58	2×-	4.2(14)×	1.8(6)~2.4(8)	——	——	N-14'2"-E	"			

第4表 土墳計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸 方向 (Nは真北)	備 考
		長辺m	短辺m	深さm		
SK-79	舟 形	2.55	0.80	0.42	N-89°-E	弥生時代、側石を有す
SK-80	方 形	2.30	0.88	0.18	N-78°-E	弥生時代
SK-81	舟 形	1.50	0.40	0.09	N-87°-E	"
SK-82	"	2.00	0.40	0.09	N-61°-E	"
SK-83	"	(1.36)	0.58	0.20	N-60°-E	"
SK-84	不整椭円形	1.79	1.36	0.16	N-5°-E	"
SK-85	"	1.70	1.60	0.12	N-89°-E	"
SK-86	方 形	1.67	(1.47)	0.09	N-74°-E	占墳時代
SK-87	"	1.20	1.14	0.05	N-71°-E	"
SK-88	"	1.78	1.72	1.11	N-0°-E	古代
SK-89	"	2.83	(0.53)	0.18	N-89°-W	"
SK-90	不 整 形	5.38	5.20	0.09	N-3°-W	"
SK-91	方 形	(2.20)	(0.24)	0.67	N-88°-W	"
SK-92	不 整 形	1.50	0.86	0.08	N-85°-W	"
SK-93	不 整 方 形	5.60	(3.80)	0.72	N-84°-W	"
SK-94	"	3.15	(2.58)	0.35	N-87°-W	"
SK-95	舟 形	1.06	0.39	0.09	N-5°-E	"
SK-96	不 整 形	(2.00)	(0.64)	0.13	N-77°-E	"
SK-97	不 整 方 形	(4.00)	3.29	0.43	N-88°-E	"
SK-98	"	2.80	(0.56)	0.16	N-72°-E	"
SK-99	方 形	1.78	1.59	0.29	N-8°-E	"
SK-100	不整椭円形	1.90	(0.95)	0.16	N-1°-W	"

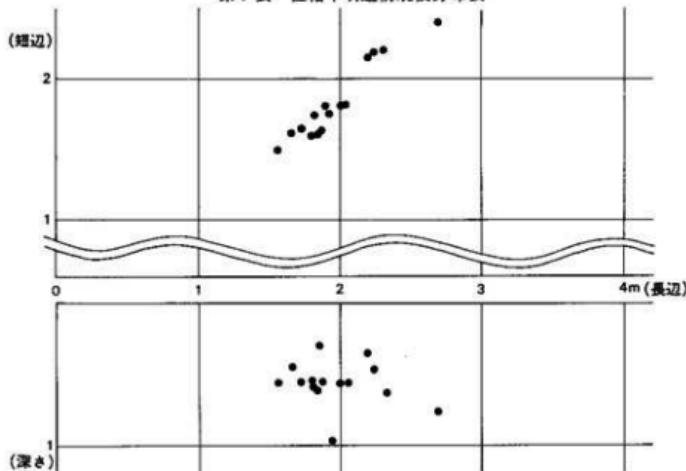
第5表 墓跡計測表

遺構番号	規 模			方 向 (Nは真北)	備 考
	柱穴数	全長m(尺)	柱間距離m(尺)		
SA-16	7	11.25 (37.5)	1.65(6.5)~2.1(7)	N-6°8'-E	

第6表 性格不明遺構計測表

遺構番号	平面 形態	規 模			長軸方向 (Nは真北)	階段状遺構 の位置	備 考
		長辺m	短辺m	深さm			
S X - 1	方形	1.80	1.60	0.55	N-87°26'-E	南側	
S X - 2	"	1.88	1.63	0.55	N-89°8'-E	"	
S X - 3	"	(2.02)	(1.49)	0.46	N-1°9'-W	"	
S X - 4	"	2.20	2.15	0.35	N-1°55'-W	"	
S X - 5	"	1.75	(0.83)	0.60	N-3°51'-W	"	
S X - 6	"	2.31	2.20	0.64	N-84°7'-E	"	
S X - 7	"	1.93	1.73	0.98	N-87°35'-E	"	
S X - 8	"	1.80	(1.14)	0.56	N-3°12'-E	"	
S X - 9	"	2.70	2.40	0.76	N-86°34'-W	"	
S X - 10	"	1.90	(1.64)	0.31	N-89°31'-W	西側	
S X - 11	"	1.75	(1.05)	0.54	N-82°24'-W	"	
S X - 12	"	2.04	(1.50)	0.57	N-89°12'-W	南側	
S X - 13	"	1.56	1.50	0.56	N-15°31'-E	東側	
S X - 14	"	1.86	1.60	0.62	N-14°23'-E	"	
S X - 15	"	1.65	1.60	0.45	N-8°58'-E	南側	

第7表 性格不明遺構規模分布表



III 総 括

本年度の調査は、金屋地区の北部を対象地として実施した。昨年度実施した第21次調査地区の北側に隣接する部分で、第21次調査で検出したSD-49の延長の有無を確認するとともに、約70m四方は未調査のため、調査を必要とする部分でもあった。

調査結果としては、政方跡に比定できる遺構は検出されなかったが、堅穴住居址、官衙関連とみられる据立柱痕跡や堀跡、上墳、性格不明遺構等の遺構が確認された。また、遺物も例年となく纏まって出土しており、土佐國府跡の様相を考える上では貴重な資料である。以下、各時代ごとに遺構、遺物について、若干の考え方述べ、総括したい。

1. 弥生時代

遺構では、ST-25、SK-79~85が該当する。ST-25の時期は、57の如く胴部外面にタキ目が存し、かつ、小さいが平底の底部を有する遺物等が出土している点から、本地方のヒビノキⅡ式土器の時期に該当するとみられ、弥生時代終末と考えられる。上墳には、側石を配す木棺墓（SK-79）と所謂「土壙」（土坑墓）（SK-81~83）がある。SK-80は、側石の存在は認められないが、SK-79同様2段掘りであり、本棺墓ではなかろうか。SK-84・85は、遺存状態が不良で、遺物量も少なく、その性格は不明確といわざるを得ない、これら土墳は、比較的集中し、SK-84・85のように切り合った遺構もあり、ある程度の時期差は考慮しなければいけないが、遺物は、先述のもの以外に出土しておらず、住居址同様、概ね弥生時代終末と考えてよろしくはなかろうか。また、細片のため図示できなかったが、包含層出土の遺物もほぼこの時期と判断される。このように、遺構・遺物が多量に検出されたことにより土佐國府成立以前のこの地域の文化の様相がさらに1歩明確にされたことは注目すべきである。

2. 古墳時代

遺構では、ST-26・27、SK-86・87が該当する。遺物は、遺構出土のものが少なく、遺物包含層から比較的纏まって出土しており、須恵器の杯で3種類の調整技法が認められる。すなわち、杯蓋の天井部と杯身の底部の調整技法においてであり、(1) ロクロからの切り離しの際のヘラ切り痕を残さず、すべて回転ヘラ削り調整を施すもの（2・87）、(2) 回転ヘラ削り調整も一部施すが、ヘラ切り痕を残すもの（3・4）、(3) 回転ヘラ削り調整を全く施さず、ヘラ切り痕を残すもの（5～7）がある。また、3・4はたちあがりの高さに違いがあり、若干の時期差を感じる。これらの時期は、総じて6世紀後半から7世紀前半といえるのではないかろうか。遺構の内、ST-26の時期は、出土した土師器の甕（62～64）の口縁部の形態に若干の差異を認めるものの、概ね6世紀末から7世紀初頭に位置付けてよろしくはなかろうか。他の遺構については、出土遺物が極めて少なく遺物包含層の遺物をもって時期を考慮すれば、大きく6世紀後半から7世紀前半と考えざるを得ない。

なお、包含層から7世紀後半から8世紀初頭に位置付けられる須恵器（10）も1点出土している。

3. 古代

ここでは、奈良時代以降、平安時代の遺構・遺物について述べる。遺構では S B - 56~58、S K - 88~100、S A - 16、S X - 1~15 等が該当する。遺物には、奈良時代に属する須恵器 (11~13・99等)、土師器 (74・121等) から淡緑色を呈す近江産 (27・28)・淡緑色を呈す洛西産 (29) の縦釉陶器、⁽³⁾ 摂津 C型の羽釜が出土する 10世紀代のものがある。奈良時代の遺物の内、遺構出土のものは其件遺物からみて、混入したものと考えられ、遺構として、奈良時代に位置付けられるものは確認できなかった。なお、これらの時期は、概ね 8世紀後半に位置付けられるものであろう。

よって、今次の調査で確認された遺構の時期は、9世紀から10世紀にかけてである。これらの遺構は、羽釜の有無により、2期に大別することができる。

I期 遺構では、S B - 56~58、S K - 88~93・100、S X - 1~8・12~15 が該当し、杯類、皿類の底部外面はすべて回転ヘラ切りである。

II期 遺構では、S X - 9~11、S K - 94 が該当し、杯類、皿類の底部外面は回転ヘラ切りによるものが主であるが、糸切りの杯類、皿類も共存する。

III期の遺物の中で、羽釜は摂津 C型に属し、その時期を 10世紀代とみることができる。また、⁽³⁾ 口縁部や脚部の形態から、3類に分けることができる。

羽釜 A類：脚部は内傾して立ち上がり、口縁部に至るもの。(156・157)

羽釜 B類：脚部はやや内傾して立ち上がり、口縁部でさらに内傾するもの。(81・180)

羽釜 C類：脚部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部に至るもの。(148・149)

これら羽釜は、口縁部下に鈎が付くものであるが、鈎の貼付部位に若干の差異が認められる。羽釜 A・B類は口縁端部下約 5mm から、羽釜 C類はほぼ口縁端部に付く。この差異は、時期差によるものとみられ、遺構の切り合ひ関係からもいえるようである。すなわち、羽釜 A類→羽釜 B類→羽釜 C類の順になると考えてよいようである。

次に、S X - 9・11出土の高台付皿と小皿についてみてみる。139・140の高台付皿と 176 の皿は、皿部が極端に浅く、口縁部内面に凹線を向らすもので、托とも呼称される器形であり、薬師寺西僧房床面土器の資料にその類例を見い出すことができ、10世紀後葉に位置付けられるものである。これら遺物から考慮して、II期については 10世紀後半と時期設定することができるのではなかろうか。これから判断して、I期を 9世紀から 10世紀前半と考えることができよう。

さて、I期の遺構は、重複関係、遺物の差異等により、当然時期差が考えられるものである。まず、S X - 3~6 についてみてみると、ほぼ等間隔で交互に配置されていること、S X - 3・6 の土師器の椀一 (90) と (107) 一とが形態的に類似すること、S X - 4~6 の土師器の径高指數が 22 前後であることなどから、ほぼ同時と判断される。また、上師器の皿の口縁部内面を若干折り返すもの (91・92) や土師器の内外面に若干ヘラ磨きを施すもの (103・104) が存在することから、9世紀前半と位置付けられよう。そして、これに続行するものとして、他の

多くの遺構群をあげることができる。しかし、これらでも遺構の重複関係がみられ、その時期差を感じ得るもの、現時点では明確な時期設定はできず、一応大きく9世紀後半から10世紀前半としておきたい。ただ、中でも、SB-56・57、SX-13は比較的古く、SK-88、SX-12・14は比較的新しい時期に位置付けられるものであろう。また、遺構の重複関係から先述のSX-3～6に先行する遺構も存するが、遺物が極めて少なく、今回はⅠ期の範疇で捉えておきたい。

Ⅰ期の遺構は、先にも若干触れたが、遺構の重複関係、遺物等により3小期に細分できる。すなわち、Ⅰ-1期がSX-10、Ⅰ-2期がSX-11とSK-94、Ⅰ-3期がSX-9である。ただし、その存続期間は不明確であって、3小期併せてここでは大きく10世紀後半と把握しておきたい。

古代の項の最後として、Ⅱ期の遺物と性格不明遺構について述べてみたい。

Ⅱ期の遺物の内、杯類については、調査概要の中で触れたように、法量により杯と小杯に区分が可能である。この杯の分化は、田村遺跡群⁽⁷⁾、芳原城跡⁽⁸⁾、十万遺跡⁽⁹⁾の資料でも見出すことができるが、時期的には15世紀が中心である。この間の資料には、現時点で類例がなく、この分化は、この時期の1つの特徴として指摘できるのかもしれない。

また、土師器の中には、回転ヘラ切り底と糸切り底が共存し、特に、SX-11の杯(164)の内面に小皿(176)が貼り付いた状態で出土している。そして、Ⅰ期の遺物の中には、糸切り底のものは存在しない。このことから、本地方の土師器における糸切り技法の出現をほぼこの期、すなわち、10世紀後半とすることができるのでなかろうか。ただし、土師器中の糸切り底の占める割合は低く、一般化するのは、11世紀以降とみられる。須恵器については、川土量が少なくなるが、160のように、ベタ高台で糸切り底のものが出土しており、この時期には、須恵器も糸切り底に転化していたと考えられる。

性格不明遺構(SX)について古代という範疇で捉えた場合、その類例は発見されていない。しかし、中世以降になると西日本では山口県の下右田遺跡⁽¹⁰⁾、東日本では関東以北で、比較的多くの類例が存す。そして、その性格については、住居址、貯蔵庫(空)⁽¹¹⁾、作業場、兵事の簡易住居⁽¹²⁾、集会場、季節の住居等々があり、また、その名称についても、方形堅穴造構⁽¹³⁾、堅穴状造構⁽¹⁴⁾、方形堅穴建築址等⁽¹⁵⁾があり一定していない。以上の如き諸例とその規模等を今回発見したSXと比較した場合、一辺で0.5～1.0mほど大きく、階段状の段部が存在しないものや位置の異なるもの等があり、一概にこれを比較検討の材料とするには難があるようである。

SXの特徴の1つとして挙げられるものは、煮炊用具として壺が比較的多く出土している点である。この壺の出土は、一時的であれ、生活を行った痕跡とみなければならない。一方、住居と即断するには、小規模で、恒常的なものとは考え難い。また、一辺1.8m前後のものについては、室(貯蔵穴)⁽¹⁶⁾と考えた方が妥当かもしれない。本地方では、古代以降の一般的住居は、ほとんどが独立柱建物であり、このSXは、特殊な性格を有するものとした方が合理的である。その際、規格性を有し、かつ、集中的に存在すること、それに、国府内という地域を加味して考えれば、兵舎とそれに伴う宿等ではなかろうか。⁽¹⁷⁾

4.まとめ

以上、今回の調査について、序述したが、その調査地区はS X等の存在から政府隣接地区とは考え難い。よって今後の調査では、調査地区的再検討も必要であろう。その際、有望視されるのは比江地区中央部の神木、松ノ下、金屏に挟まれた地区と北部の内裏を中心とする地区ではなかろうか。中央部は、8世紀後半から9世紀前半にかけての建物跡が多く確認されている平面、13世紀から14世紀にかけての遺構も多い。北部は、古墳時代の遺構は比較的多く確認されている平面、8世紀後半から9世紀前半の建物跡の検出例は少ない等の問題点は存するが、従来の調査より引き出された一応の結論である。いずれにしても来年度の調査は、重要遺跡確認緊急調査として土佐国府跡発掘調査を始めての「年目に該当し、1つの大きな節日でもあり、大きな成果を期待したいものである。

註

- (1) 上佐山田町教育委員会『ひびのき遺跡』1976年
- (2) 斎藤 忠『日本史小百科 墳墓』1978年
- (3) 平尾政幸氏(京都市埋蔵文化財研究所)の御教示による。
- (4) 皆原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
1983年
- (5) (4) 同じ
- (6) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 1985年
- (7) 高知県教育委員会『山村遺跡群』第6~10分冊 1986年
- (8) 高知県教育委員会『芳原城跡発掘調査報告書』 1984年
- (9) 香我美町教育委員会『十方遺跡発掘調査報告書』 1988年
- (10) 山口県教育委員会『下右田遺跡』 1978年
- (11) 濱岡町教育委員会『濱岡城跡Ⅵ』 1985年 鴻巣市遺跡調査会『赤台遺跡』 1985年
栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区』 1987年
- (12) 小山岳夫「大井城跡の堅穴状遺構」『長野県考古学誌』第54号 1987年
- (13) (11) の『自治医科大学周辺地区』と同じ
- (14) (11) の『濱岡城跡Ⅵ』と同じ
- (15) 千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』 1982年
- (16) 山中敏史氏の御教示により、室の可能性も指摘され、今次の報告ではS Xとして扱った。
- (17) 宮本長二郎氏の御教示による。

第8表 遺物観察表1

件番番号	層位番号	器形	複形	寸法 (cm)	口徑 器高 脚径 底径	形態・文様	手法	備考
24-1	第Ⅰ層	須彌器 杯(蓋)		11.8 3.9 — —	大井部は丸味を有し、口縁部は、下外方に下り、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外縁方に凹輪ヘタ割り調査、大井部内面ナゲ調整。他は回転ナゲ調整。		
〃-2	"	"		13.4 4.0 —	大井部は丸く、口縁部は、下外方に下り、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部は全体的に凹輪ヘタ割り調査、大井部内面ナゲ調整。他は回転ナゲ調整。	天井部外縁にヘタ記号がある。	
〃-3	"	"	杯(蓋)	11.9 3.6 たちあがり高0.9 受部径	底部は深く、ほぼ平らである。 受部は上外方へのび、端部は丸い。 たちあがりは内傾してのび、端部を削く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁はヘタ切り後ナゲ調整。 底部外縁の一部に回転ヘタ割り調査。他は回転ナゲ調整。		
〃-4	"	"		12.2 3.9 たちあがり高0.7 受部径	底部は比較的深く、平らである。 受部は腹と上外方へ内き、端部は丸い。たちあがりは腹と内傾し、端部を削く仕上げる。	"	"	
〃-5	"	"		9.8 3.6 たちあがり高0.5 受部径	11.8	"	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁はヘタ切り後ナゲ調整。他は回転ナゲ調整。	
〃-6	"	"		9.4 3.4 たちあがり高0.5 受部径	11.4	"	"	
〃-7	"	"		10.2 4.0 たちあがり高0.4 受部径	12.6	"	"	
〃-8	"	"	甌	11.5 (5.5)	瓶部は外反してのび、口縁部は上外方へ高め上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部外向下面に一束の凹線を回らす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面には自然筋が動かし、調査不明。他は回転ナゲ調整。		
〃-9	"	"	甌	29.0 (6.5)	口縁部は大きく外反してのび、端部を削ぎ落す。端部は内傾する平面を成す。外周面は、外側する浅い凹面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部外向下面に凹輪ヘタ割り調査後、調査穴を施す。他は回転ナゲ調整。	内面には自然筋がかかる。	
〃-10	"	"	杯(蓋)	14.0 3.2 つまみ紐	2.2	天井部はほぼ平らで、中央部には鑿突部のつまみが付く。口縁部は斜め下方へ下り、端部を下方へ屈曲する。口縁部内面には、かえりを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外縁方に凹輪ヘタ割り調査、天井部内面中央部のみナゲ調整。他は回転ナゲ調整。	
〃-11	"	"	つまみ紐	14.5 2.4 2.4	大井部はほぼ平らで、中央部には斜め下方に付く。口縁部は斜め下方へ下り。端部を下方へ屈曲する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面の大半はナゲ調査。他は回転ナゲ調整。	外面は部分的に自然筋が動かす。	
〃-12	"	"	杯(身)	12.8 4.0 8.9	底部は平らで、端部に低い高台が付く。高台周縁は外側する凹面を成す。体部、口縁部は上外方へ直線のび、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面とも回転ナゲ調整。		
〃-13	"	"		13.7 4.5 9.8	底部は平らである。体部、口縁部は、上外方へ直線のび、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁はヘタ切り後、板状圧痕が残存。他は摩耗しており、不明。		
〃-14	"	"		13.3 3.1 8.0	"	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁はヘタ切り後、板状圧痕から体部外縁にかけてナゲ調整。内面は回転ナゲ調整。		
〃-15	"	"		12.5 4.6 8.3	底部は平らで、体部から口縁部にかけて内側突出して上り、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周はヘタ切り後、ナゲ調査。内面は回転ナゲ調整。		

第8表 遺物観察表2

探査番号	層位番号	器 器	器 形	生 高 (cm)	口被 露高 露長 度	形態・文様	手 法	備 考
24-16	第Ⅱ層	須 恵 瓶	瓶	—	底部は丸窓を有し、外延端には、(3.3) 「ハ」の字状の高台が付く。高台 端部は、下方を向く平面を成す。 体部は内両側面に上гарる。	マキアグ、ミズビキ成形。 底部外面は、ヘラ切り、体部外 面下端に回転ヘラ削り調整。他 は回転ナガ調整。		
〃-17	〃	〃	瓶	16.9 2.2 — 13.4	底部は丸窓を有し、体部は外反弧 形で瓶上部より口被部に立ち、口被 端部を肥厚する。	マキアグ、ミズビキ成形。 底部外面は、回転ヘラ切り、他 は回転ナガ調整。		
〃-18	〃	〃	瓶	15.4 (2.3) — 13.5	底部はほぼ平らで、体部は上外方 へ短く上上がり瓶部に立ち。口被 端部は丸く仕上げる。	マキアグ、ミズビキ成形。 底部外面は、回転ヘラ切り後に ナダ調整。他は回転ナガ調整。		
〃-19	〃	〃	瓶	16.6 2.2 — 14.0	—	—	—	内外面とも部 分的に火だす きがかかる。
〃-20	〃	〃	瓶	22.0 (6.1) (28.5)	口被部は、上肩部から「く」の字 状に外反する。瓶部は内側する複 い凹面を成す。	マキアグ、ミズビキ成形。 肩部外面は、平行と格子文のタ タキ、内面は同心円文のタタキ の後にヨコナチ調整。他は回転 ナガ調整。		
25-21	〃	〃	瓶	16.3 (7.9) (23.9)	腹部は上内方へのび、頸部は短く 上方へのび、口被部は外傾する。 口被端部は凹面を成す。	マキアグ、ミズビキ成形。 腹部内面は、同心円文のタタキ の後にヨコナチ調整。他は回転 ナガ調整。		
〃-22	〃	〃	瓶	21.0 (15.0) 23.6 —	底部はほぼ平らに最大径を有し、 内両側面に上garる。口被部は、 「く」の字状を成し、瓶部は内傾 する凹面を有す。	マキアグ、ミズビキ成形。 腹部外面は、格子並のタタキの 後にハケ調整、内面は同心円文の タタキを施す。他は、單純が 著しく、調整不明。		
〃-23	〃	〃	瓶	— (17.7) (37.0)	底部は丸く、胴部は内両側面に上 garる。	マキアグ、ミズビキ成形。 外面は、格子並のタタキの後に ハケ調整、内面は同心円文のタ タキを施す。		
〃-24	〃	〃	瓶	19.9 (5.5) —	体部は上外方へのび、口被部に短 く直立する。口被端部は、外傾す る複い凹面を成す。	マキアグ、ミズビキ成形。 内面から口被部外面にかけてヨ コナチ調整。		
〃-25	〃	円 筒	外壺	10.3 (2.5) — —	脚部は「ハ」の字状に開くとみ られるが火焼し、通しは不明。外 面下端に1条の突起を配す。	マキアグ、ミズビキ成形。 外壺は回転ナガ調整、内面はナ ダ調整。		
〃-26	〃	平 壺	金 縫 全厚	— (5.6) 2.6 0.9	瓶部は丸窓を有し、瓶部を細 く仕上げる。口被端部は無く仕上 げる。瓶底は薄い。	各面ともヘラ削りを施す。		
〃-27	〃	縦 縫 壺	瓶	15.4 (3.7) —	体部は上外方へのび、口被部でや や外反する。口被端部は無く仕上 げる。瓶底は薄い。	全面に施され、外側が淡紫色、 内面が濃紫色を呈す。		
〃-28	〃	〃	瓶	16.4 (2.3) — —	口被部は上外方を向き、肩部を細 く仕上げる。口被端部に花文を施 す。	全面に施され、外側も濃 紫色を呈す。		
〃-29	〃	〃	瓶	— (1.3) — 8.2	底部はやや丸窓を有し、外側部に は、断面逆L形状の高台が付く。 高台端部は、下方を向く平面を成 す。	底部外面は回転ヘラ切り。高台 内側以外に施され、外側と も淡紫色を呈す。		
〃-30	〃	土 器	杯	12.6 3.8 — 7.4	底部はやや丸窓を有す。体部は上 外方へトガり、口被部に生る。口 被端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は 回転ナガ調整。		

第8表 遺物観察表3

拂因番号	部位番号	器 種 形	法 量 (cm)	内径 容積 測定 直徑	移 植 ・ 文 様	手 法	備 考
25-31	第Ⅰ腰	土器 小 杯		10.0 3.0 — 5.5	底部は平らで、体部は上外方へ直 立のびて盛滿に至る。口縁端部には 丸く仕上げる。口縁端部に凹 溝がある。	底部外面は回転ヘラ切り。 口縁端外面から内面にかけて回 転ナゲ調整。	
"-32	"	"		9.8 2.5 — 5.6	底部はほぼ平らで、体部は上外方 へ直立のびて盛滿に至る。口縁端部には 丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。 表面に摩耗しており調整不明。	
"-33	"	"		9.9 3.3 — 7.0	底部はほぼ平らで、体部は上外方 へ直立のびて盛滿に至る。口縁端部には 丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。 口縁端外面から内面にかけて回 転ナゲ調整。	
"-34	"	"		10.1 3.6 — 7.2	底部は丸味を有し、体部は上外方 へ直立のびて盛滿に至る。口縁端 部は丸く仕上げる。	"	
26-35	"	" 碗		— (4.8) — 9.5	底部は平らで、端部に大きく「ハ」字型 の字状に開き高さ1.5cmの高台が 付く。端部が丸く仕上げる。体部は内側 方に上がる。	底部外面は素練しており調整不明。	
"-36	"	" 皿		12.4 1.8 — 7.7	底部はやや平く、体部は上外方へ のび、口縁端部でやや外傾する。口 縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで、最 辺部を中心にナゲ調整。内面中 央部はカゲ調整。他は回転ナ ゲ調整。	
"-37	"	" 小 皿		10.2 1.3 — 6.6	底部は平らで、体部は上外方へ直 立のび、口縁部に至る。口縁端部は 丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。口縁 部から内面にかけて回転ナゲ調 整。	
"-38	"	"		10.3 1.5 — 6.6	底部は平らで、体部は内側突出 のび、口縁部に至る。口縁端部は丸 く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで、板 状加工が残存する。他は回転ナ ゲ調整。	
"-39	"	" 台付皿		10.2 1.8 — 6.6	底部はほぼ平らで、体部は上外方へ のび、口縁部に至る。口縁端部は 丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。口縁 部から内面にかけて回転ナゲ調 整。	
"-40	"	" "		9.2 2.0 — 6.0		底部外面は回転ヘラ切り。 表面に摩耗しており調整不明。	
"-41	"	" 台付皿		10.6 4.1 — 5.8	底部は平らで、体部は上外方へ直 立のび、口縁部に至る。高台は「ハ」の 字状に開き、底部でさらに開く。 端部は丸く仕上げる。	表面に摩耗しており調整不明。	
"-42	"	" "		12.5 4.5 — 6.6	底部は平らで、体部から口縁部に かけて直線的にのびる。口縁端部は 細い。高台には「ハ」の字状に開 き、底部は丸く仕上げる。	"	
"-43	"	" 小 皿		25.0 (5.5) —	内部は内側突出に上がり、口縁部 で大きく外傾する。口縁端部は丸 く仕上げる。	口縁部内外面ともナゲ調整。他 はハケ調整。	外側には保が付着する。
"-44	"	黑色土器 碗		15.7 3.8 — 9.0	底部はほぼ平らで、底部に断面逆 三角形の高台が付く。体部は内側 突出に上がり、口縁部に至る。口 縁端部は丸く仕上げる。	底部外面ナゲ調整。外側ココナ ゲ調整。底部内面には一向方に 丸くへり跡。口縁端部全面に 横方向のヘラ磨きを施す。	
"-45	"	土 器	全長 全幅 重量(g)	4.2 1.4 9.8	ほぼ円錐形であり、完形。 孔径は5mmである。	状態の土器。	

第8表 遺物観察表4

標示番号	部位番号 遺構番号	基部	種類	法 量 (cm)	口器 器高 測定 底径	形態・文様	手 法	備 考
26-46	第Ⅱ唇 土 蝶			全長 4.5 全幅 2.4 重量(g) 26.9	口器円筒形であり、完形。 孔径は6mmである。	痕跡質の土蝶。		
n-47	n	n		全長 4.2 全幅 2.3 重量(g) 27.2	口器円筒形であり、完形。 孔径は8mmである。	n	片面に自然擦 がかかる。	
n-48	n	n		全長 4.6 全幅 1.3 重量(g) 7.5	幼綱形であり、完形。 孔径は5mmである。	十輪質の上総。		
n-49	n	n		全長 4.1 全幅 1.6 重量(g) 8.7	n	n		
n-50	n	n		全長 4.1 全幅 1.7 重量(g) 11.4	口器円筒形であり、完形。 孔径は6mmである。	n		
n-51	n	n		全長 5.0 全幅 1.8 重量(g) 13.5	幼綱形であり、両端が一部欠損。 孔径は6mmである。	n		
n-52	n	n		全長 3.9 全幅 2.4 重量(g) 15.9	口器円筒形であり、完形。 孔径は5mmである。	n		
n-53	n	n		全長 4.5 全幅 1.9 重量(g) 16.7	口器円筒形であり、完形。 孔径は6mmである。	n		
n-54	n	n		全長 4.5 全幅 2.2 重量(g) 18.7	口器円筒形であり、完形。 孔径は7mmである。	n		
n-55	n	n		全長 4.0 全幅 2.0 重量(g) 23.3	口器円筒形であり、完形。 孔径は12mmである。	n		
n-56	S T-25	劣生土蝶 壳		20.2 (3.6) — —	頭部はほぼ直立し、口器部は大きく外側に突出する。口器端部は外側する凹面を成す。	口器部外向はハケ調整。ココナ ゲ調整。口器部内向ハケ調整の 後ナダ調整とココナゲ調整。		
n-57	n	n 蝶		— (3.0) — 5.0	底部は平らで、洞部は内側丸味に 付ける。	底部外面はナゲ調整。洞部外側 にはタキヤ、内面にはナダ調整。		
n-58	n	n 蝶		— (5.7) — 2.0	底部は小さな平坦部を作り、その 中央部に径7mmの円孔を穿っている。 洞部は上方外へ向けた真直上があ る。	底部外向はナゲ調整。洞部外面 にはタキヤ、内面にはナダ調整。		
n-59	n	n 支 脚		— (5.5) — 7.5	脚台部のみ残存。脚台部は下方に 下り、腹部で屈曲する。	外面にはタキヤと指端正爪、 内面にはしづり目が残存する。		
n-60	n	n		— (5.3) — 6.2	脚部はほぼ直立し、口器部は大き く外側に突出する。口器端部は内側する 凹面を成す。	外面には指取り爪と下から上への 折ナゲを施す。他はナゲ調整で、指端正爪が残存する。		
n-61	S K-79	立		15.0 (4.1) — —	頭部はほぼ直立し、口器部は大き く外側に突出する。口器端部は内側する 凹面を成す。	背面は歩足が著しく、調節不易。		
27-62	S T-26	土 器 壳		13.1 16.6 15.2 —	底部は丸く、脚部は内側球体に上 がり、脚部最大径を中筋部上位に 有す。↑脚部から中筋部にかけて は「X」の字状を成す。口器端部 は丸く往々上昇する。	脚部外面はハケ調整、内面はナ ゲ調整。口器部内面はハケ調整 の後に外筋具ナゲ調整。		

第8表 遺物観察表5

検査番号	遺物番号	器種	形状	法量 口縁 基底 側厚 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
27-63	S T-25	上部器	器	21.4 (10.5) 24.1 —	底部は内側先端に上がり、側部は大径の中側部上位に有る。口縁部は幅より外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	口縁部外周はヨコナナゲ調節。他は、器表が削離しており調節不明。	
〃-64	"	"	"	17.5 (28.6) 23.4	底部は斜面を呈し、側部は大径を中側部位に有る。口縁部は外傾してのび、さらに外傾し、端部に来る。口縁端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面ともヨコナナゲ調節。側部外面は強いヨコナナゲ調節。ナゲ調節、側部内面はナゲ調節。	
〃-65	S B-57	底窓器	皿	16.3 2.0 — 12.6	底部は平らで、体部は上方へ内窓気孔に上がりロ繩部に生る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は、器面が剥離しており調節不明。	
〃-66	"	土器	器	12.6 2.9 — 7.9	底部は平らで、体部は上方へ内窓気孔に上がりロ繩部に生る。ロ繩端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は、器面が剥離しており調節不明。	
〃-67	"	"	"	18.2 1.5 — 15.0	底部は平らで、体部は上方へ直线上がりロ繩部に有る。ロ繩端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後、ナゲ調節及び部分的にヘラ磨き。他は回転ナゲ調節で、底部にのみヘラ磨き。	
〃-68	S B-58	底窓器	杯(考)	12.6 3.3 — 14.8	底部は浅く、平らである。受部は上方へのび、端部は丸い。たもあがりは細く内傾し、端部は丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビヤ成形。底窓外周はヘラ切り後ナゲ調節。底窓外周の一帯に回転ヘラ切り調節。他は同軸ヘラ調節。	
〃-69	S K-88	"	杯	13.0 — 8.7	底部は平らで、端部に断面是正方形の凸筋が付く。高台端部は下方を向く前面を成す。体部は直線的で上方へ外方へのびる。	マキアゲ、ミズビヤ成形。底窓外周は回転ヘラ切り後にナゲ調節。他は回転ナゲ調節。	
〃-70	"	"	"	17.1 2.4 — 13.5	底部はほぼ平らで、体部は上方へ内窓気孔に上がりロ繩部に有る。ロ繩端部は丸く仕上げる。		内外面に火打しきがかかる
〃-71	"	I. 土器	器	12.9 3.2 — 7.5	底部はほぼ平らで、体部は内窓気孔にあり、ロ繩部は上方を向く。ロ繩端部は丸く仕上げる。	底窓外周は回転ヘラ切りで、秋田折成が残存する。	
〃-72	"	"	"	13.4 4.3 — 9.4	底部はやや丸味を有し、体部は上方へ直线上がりロ繩部に有る。ロ繩端部は丸く仕上げる。	底窓外周は回転ヘラ切り。他は器面が剥離しており調節不明。ロ繩端部は丸く仕上げる。	
〃-73	"	"	"	11.6 4.6 — 6.6		底部外周は回転ヘラ切り。ロ繩部から内面にかけて回転ナゲ調節。	
〃-74	"	"	器	20.4 2.7 — 15.0	底部は平らで、高さ8mmの高台が付く。高台端部は内側する平面を成す。体部は上方へ直線的に上がり、ロ繩部で外傾し、端部を若干肥厚する。	底窓外周は回転ナゲ調節。他はヘラ磨き。	
〃-75	"	"	"	11.4 2.0 — 8.2	底部は丸味を有し、体部は上方へ直线上がりロ繩部に有る。ロ繩端部は丸く仕上げる。	底窓外周は回転ヘラ切り後、ナゲ調節。他は回転ナゲ調節。	
〃-76	"	"	"	10.8 2.1 — 6.6	底部は丸味を有し、体部は上方へ直线上がりロ繩部に有る。ロ繩端部は丸く仕上げる。	底窓外周は回転ヘラ切り。ロ繩部から内面にかけて回転ナゲ調節。	
〃-77	"	土器	器	今長 今幅 重量(g)	4.5 1.8 6.6	筋縫形であり、定形。乳部は5mmである。	上部質の上縁。

第8表 遺物観察表 6

標本番号	遺構番号	器種	様形	法量 (cm)	山根 器高 鉢底径	形態・文様	手法	備考
27-75	SK-93	赤生土器	盆	9.0 (5.5) — —	丸く性上げる。 脚台部は「ハ」の字状に開く。	外縁はナデ調査。脚台部内面にはしごり目が残存する。		
28-79	"	灰窓器	杯(身)	12.2 4.4 たちあがり高1.2 受部径	底部は比較的深く、平らである。 受部はよく水半分にのび、端部は丸い。 たちあがりは高い。 底部は丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビヤ成型。 底部外縁はへラ切り後ナデ調査。 底部外縁の一側に回転ヘラ削り調査。底部内面中央にナデ調査。 他は回転ナデ調査。	口縁部を中心 に焼成時の痕 が残存する。	
"-80	"	灰	石	全長 全幅 全厚 重量(g)	14.3 5.3 2.6 360.0	河原石を使用しており、表面凹凸を保有する。また、縁辺部と表裏1箇所に敲打痕が残存し、印石として利用されたとされる。	石材に砂押。	
"-81	SK-94	土器	羽釜	21.3 4.5 22.8	脚部はほぼ直面に上がり、口縁部は内側に、丸く仕上がる。口縁部下端部やや反り上がる跡が付く。	別部外縁には傾方向のハケ調査。 他はヨコナダ調査。特に、口縁部内面と縁の上面を並々ヨコナダ調査する。		
"-82	SK-97	赤生土器	盆	(9.8) — —	3箇の舟が付いていたとみられるが、2箇が欠損する。脚台部から受部にかけて開く。	鉢型で、各所に押摩江浜が残存する。脚台外面にはタキ目、内面にはしごり目が残存する。		
"-83	"	土器	上縁	全長 全幅 重量(g)	4.7 1.5 9.1	切妻形であり、上端部が一部欠損する。孔径は5mmである。	土器質の上縁。	
"-84	SX-1	土器	羽釜	12.6 (3.0) — 7.7	底部はやや丸味を有し、全体は内側面に上がり、口縁部は内側面やや外反する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外縁は回転ヘラ切り後ナデ調査。他は回転ナデ調査。		
"-85	"	土器	深	全長 全幅 重量(g)	2.6 1.2 2.9	ほぼ円筒形であり、一部欠損。 孔径は5mmである。	土器質の上縁。	
"-86	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	4.4 1.5 7.6	切妻形であり、両端が一部欠損。 孔径は5mmである。	"	
"-87	SX-2	灰窓器	杯(身)	12.1 3.5 たちあがり高1.1 受部径	底部は比較的浅く、丸穴を有す。 受部は上方へのび、端部は丸い。 たちあがりは内側して仕上げて、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビヤ成型。 底部外縁は全縁に回転ヘラ削り調査。他は回転ナデ調査。		
"-88	SX-3	"	杯	11.7 2.6 — 7.8	底部は人爪を有し、全体は外反味に上り口縁部に変る。口縁端部を右側に厚壁とする。	底部外縁はへラ切り後ナデ調査。 底部外縁端部には押摩江浜が残存する。他はナデ調査。		
"-89	"	"	甕	— (16.2) (28.0)	底部は丸く、脚部は内側気味に上がる。	脚部外縁には格子目のタキ目が残存する。中縫内面には同心円状のタキ目のあとナデ調査。 下縫内面にはナデ調査。	底部には焼成時の歪が残存する。	
"-90	"	土器	深	— (4.6) — 8.8	底部はほぼ平らで、縁部に開き高さ1.3cmの高台が付く。高台端部は丸く仕上げる。全体は上方へ直線的に上る。全体は内側から1段落ち込んだ形状を呈す。	底部外縁は回転ヘラ切り後中央部をナデ調査。縁辺部をヨコナダ調査。他は回転ナデ調査。		
"-91	"	"	皿	16.7 2.1 — 11.1	底部はほぼ平らで、全体は内側気味に上り口縁部は外傾する。口縁端部を若干厚壁とする。	底部外縁は回転ヘラ切り。他は回転ナデ調査。		
"-92	"	"	"	19.4 2.0 — 10.5	"	"		

第8表 遺物観察表7

探査番号	遺物番号	器 種 類	形 状	法 量 (cm)	口部 器用 調査 結果	形態・文様	手 仏	備 考
28-93	SX-4	土器 杯		13.8 4.7 — 5.8	底部はほぼ平らで、体部は内側気 味に上がり、口縁部で外反する。 口縁部は強く仕上げる。	底面外周は、回転ヘタ切りで、 板状底盤が残る。底盤内面はナ ゲ調査。口器部から内面にかけ て回転ナゲ調査。		
n-94	SX-5	"	"	11.0 4.4 — 6.0	底部はやや丸味を有し、体部は内 側気味に上がり、口縁部で外反す る。口縁部は丸く仕上げる。	底面外周は回転ヘタ切りで、 板状底盤が残る。口器部から内面にかけ て回転ナゲ調査。他は回転ナゲ調査。		
n-95	"	"	"	12.4 3.6 — 7.8	底部はほぼ平らで、体部は上外方 へほぼ直線に上がり口縁部に至る。 口縁部は強く仕上げる。	"	"	
n-96	"	"	"	13.7 3.0 — 7.5	底面は比較的平らで、体部は内側気 味に上がり口縁部に至る。口縁部 は丸く仕上げる。	器皿は廃棄しており調査不明。		
n-97	"	"	"	11.0 2.0 — 7.4	底面は丸味を有し、体部は内側気 味に上がり口縁部に至る。口縁部 は強く仕上げる。	底面外周は回転ヘタ切りで、板 状底盤が残る。口器部から 内面にかけて回転ナゲ調査。底 盤内面はナゲ調査。		
n-98	SX-6	痕跡 杯(身) たちあがり0.6 受御部		10.2 3.2 — 11.8	底面は比較的浅く、丸味を有す。 受御部は身の中にひび、端部は斜い。 たちあがりは内傾してひび、端部 は強く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底面外周はヘタ切りと回転ヘタ 削り調整。底盤内面中央にナ ゲ調査。他は回転ナゲ調査。	底面外周にヘ タ切りがある。	
n-99	"	"	杯(頭)	14.0 (1.9)	天井部はほぼ平らで、口縁部は斜 め下方へやや丸味を持ち下りて、 口縁部は下方へ屈曲する。口縁 部は強く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部に回転ヘタ削り調査。 天井部内面はナゲ調査。他は回 転ナゲ調査。		
n-100	"	"	高 杯	(3.4) — 8.0	杯底底盤は丸味を有す。脚は(ハ の字状で大きくて脚、器部は外方 へ屈曲し、脚部は下方へ屈曲する。 底部は強く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯底内面はナゲ調査。他は回 転ナゲ調査。		
29-101	"	"	壺	19.8 (5.5)	頭部は反してのび、口縁部はさ らに外反する。口縁部は肥厚し、 内傾する半円を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面とも回転ナゲ調査。		
n-102	"	"	"	23.0 (7.0)	頭部は内側気味に上がり、器部は 外反してのび口縁部に至る。口縁 部は内側に平面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 頭部外周は平行のタキヤ、内面 はナゲ調査。他は回転ナゲ調査。		
n-103	"	土器 器 杯		14.0 3.2 — 8.4	底部は平らで、体部は内側気味に 上がり、口縁部は上外方へ向く。 口縁部は強く仕上げる。	底面外周は回転ヘタ切り後ナ ゲ調査。口縁部内外面には扇形 にナゲ磨きを施す。		
n-104	"	"	"	14.2 3.2 — 8.4	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直線的ひび、口縁部で外反する。 口縁部は強く仕上げる。	底面外周は回転ヘタ切り後ナ ゲ調査。内面底盤と底座の境のみ にヘタ磨きを施す。他は回転ナ ゲ調査。		
n-105	"	"	"	13.8 3.0 — 9.0	底部は平らで、体部は内側気味に 上がり、口縁部で外反する。口縁 部は強く仕上げる。	底面外周は回転ヘタ切り。他は 脚部が廃棄しており調査不明。		
n-106	"	"	"	12.2 2.6 — 8.3	"	"	"	
n-107	"	"	瓶	(4.2) — 9.7	直筒形はほぼ直線的ひび、底面は上外方 へほぼ直線的ひび、底面には断面台形状の高台が行く。高 台周囲は外側する平面を成す。	"		

第8表 遺物観察表8

件目番号	遺物番号	器種	器形	法量 (cm)	口径 器高 脚径 底径	形態・文様	手法	備考
29-108	SX-6	土器	高足 窓	29.6 (8.9) (28.7)	脚部は内傾してのび、口縁部は大きく外傾し、端部を上方へ組合さす。	脚部外面はハケ調整、内面はナガ調整。口縁部内外面ともヨコナガ調整。		
"-109	"	"	"	23.2 (4.5) (18.5)	脚部は内傾してのび、口縁部は大きく外傾し、端部は内傾する度い凹面を成す。	脚部外面には横力角、内面には横力方向のハケ調整を施す。他はヨコナガ調整。		
"-110	"	"	"	25.2 (15.2) 21.1	底部は丸く、脚部は中央まで内側に上がり、上部で外傾してのびる。口縁部は大きく外傾し、端部を押出する。	脚部外面はタタキのあとハケ調整、内面は全面にハケ調整。口付蓋する。底面内外面はヨコナガ調整。		
"-111	"	土器	窓	全長 全幅 重量(g)	4.3 1.0 3.9	ほぼ円筒形であり、完形。孔径は5mmである。	土窓質の土器。	
"-112	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	2.7 1.3 4.5	ほぼ円筒形であり、完形。孔径は5mmである。	"	
"-113	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	3.3 1.4 5.3	ほぼ円筒形であり、完形。	"	
"-114	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	3.3 1.4 5.4	ほぼ円筒形であり、完形。孔径は8mmである。	"	
"-115	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	3.3 1.5 6.2	"	"	
"-116	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	4.5 1.5 6.2	筋跡形であり、完形。孔径は8mmである。	"	
"-117	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	4.7 1.4 7.2	ほぼ円筒形であり、端部が欠損。孔径は6mmである。	"	
"-118	"	"	"	全長 全幅 重量(g)	3.8 1.6 7.3	筋跡であり、完形。孔径は5mmである。	"	
"-119	"	漆器	漆器	底外径 底内径 重量(g)	2.3 1.2 8.0	底外径 底内径 重量(g)	マキアゲ、ミゼキ皮剥。漆器外からは平行のタタキの後斜め方向のハケ調整。内面は同心円形のタタキの後ナガ調整。	
"-120	SX-7	便器	便器	11.6 (6.2) —	脚部は大きく内傾する。腹部は外反し、口縁部は外傾する。口縁端部は上方へ組合する。			
30-121	"	土器	高足 杯	23.0 (2.9) — —	杯部の破片で、体部は内側気体に緩やかに上がり、口縁部は屈曲して上方を向く。口縁端部は内傾する度い凹面を成す。	内側面ともヘラ磨き、特に内面のみに特徴的な螺旋状の擦りを施す。		
"-122	SX-8	"	杯	13.4 3.5 — 7.8	底部は平らで、体部は外反気体に上がり口縁部へ至る。口縁端部は丸く上げる。	底部外面は回転ヘタ切り。口縁部から内面にかけて回転ナガ調整。		
"-123	"	"	小皿	10.5 1.7 — 7.0	底部は平らで、体部は外反気体に上がり口縁部へ至る。口縁端部は丸く上げる。	底部外面は回転ヘタ切り後ナガ調整。他は回転ナガ調整。		
"-124	"	"	"	9.5 2.0 7.0	"	"		

第8表 遺物観察表9

検査番号	通査番号	器 器 種 形	法 量 (cm)	口徑 高 度 底 部 度	器 底 文 様	手 法	備 考
30-125	SX-9	須 多 器 皿		(3.5) — 12.8	底部は丸味があり、頸部に「ハ」の字状に大きく開く高台が付く。 高台端部は下刃を向く平面を成す。 体部は内面気泡に上がる。	マキアゲ、ミズビキ成型。 器底は回転ナガ調整。	高台に焼成時 の径が残存す る。
n-126	"	上 部 器 杯		14.2 3.2 — 10.0	底部は平らで、体部は上外方へほぼ直角に上り口縫部に至る。口縫端部を内面に折り返す。	底部外面は回転ヘラ切り後ナダ 調整。他は内外面ともヘラ磨き を施す。	
n-127	"	"		14.1 4.9 — 8.8	底部は厚く、平らである。体部は 内面して上がり口縫部は上外方を 向く。口縫端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転条切り。 口縫部から内面にかけて回転ナ ガ調整。	
n-128	"	小 器 杯		10.7 4.4 — 7.0	底部は厚く、平らである。体部は 内面気泡に上がり、口縫部に至る。 口縫端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面 はナダ調整。他は回転ナガ調整。	
n-129	"	"		8.8 2.7 — 6.8	底部はほぼ平らで、体部は上外方 へほぼ直角に上り口縫部に至る。 口縫端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナダ 調整。口縫部から内面にかけて 回転ナガ調整。	
n-130	"	"		10.6 2.7 — 6.2		底部外面は回転ヘラ切り後ナダ 調整。他は、器底が摩耗してお り調整不明。	
n-131	"	" 純		13.2 5.1 — 7.0	底部はほぼ平らで、体部は内面し て上がり口縫部に至る。口縫端部 は丸く仕上げる。底部外面には 「ハ」の字形に開く高台が付く。高 台端部は下刃を向く平面を成す。	器底は摩耗しており、調整不明。	
n-132	"	"		(6.1) — 10.2	底部はほぼ平らで、「ハ」の字状 に大きく開く高台が付く。頸部は 丸く仕上げる。体部は内面気泡に 上がる。	底部内面はナダ調整。他は回転 ナダ調整。	
n-133	"	" 皿		12.0 2.3 — 8.0	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直角に上り口縫部に至る。口縫 端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。 口縫部から内面にかけて回転ナ ガ調整。	
n-134	"	小 器 皿		9.6 1.5 — 5.6	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直角に上り口縫部に至る。口縫 端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は、 器底が摩耗しており、調整不明。	
n-135	"	"		10.2 1.8 — 6.8		底部外面は回転ヘラ切り。他は、 回転ナダ調整。	
n-136	"	"		10.2 2.0 — 7.6	底部は平らで、体部は内面気泡に 上がり口縫部に至る。口縫端部は 細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は、 器底が摩耗しており、調整不明。	
n-137	"	"		9.8 2.0 — 5.3	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直角に上り口縫部に至る。口縫 端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は、 器底が摩耗しておらず、調整不明。	
n-138	"	"		9.7 2.2 — 5.5	底部は平らで、体部は内面気泡に 上がり口縫部で若干外傾する。口 縫端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転条切り。他は器 底が摩耗しており、調整不明。	
n-139	"	合 村 皿		14.1 (2.2) — —	底部は平らで、中央部に径1.3cm の内孔を穿つ。体部は上外方へほ ぼ直角に上り口縫部に至る。口縫 端部に凹溝が凹る。	器底は回転ナダ調整。 脚部は欠損す る。	

第8表 遺物観察表10

件番号	遺構番号	器種	法式	口径 高さ 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
30-140 SX-9	上部器 台付皿			16.0 5.5 — 8.4	杯部の形態は「30と全く同じ。周縁は「へ」の字状に大きく開き、周縁は下方を内側に開く平底を成す。	周縁は単純が著しく調整不明。	
n-141	n	n	n	— (2.9) — 9.6	底部は平らで、「へ」の字状に開く高さ2cmの高台が付く。周縁は大きく仕上げる。	*	
n-142	n	n	n	— (3.2) — 10.4	高さは「へ」の字状に開く。高さは2.7cmである。周縁は丸く仕上げる。	内外面とも回転ナゲ調整。	
n-143	n	n	n	— (3.0) — 10.6	高台は「へ」の字状に開く。高さは2.8cmである。周縁は下刃を内側に開く底面を成す。	周縁は単純が著しく調整不明。	
31-144	n	台付小皿		9.4 3.4 — 6.0	皿底部は中央に矢張り有し、体部は内側に「へ」の字状に開く。口縁端部は丸く仕上げる。高台は「へ」の字状に開く。周縁は下方を向く凹面を成す。	*	
n-145	n	n	n	9.8 3.2 — 5.7	皿底部はほぼ平型で、体部は上外側にはほぼ直上に口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。高台は「へ」の字状に開く。	底部外縁は回転み切り。他は、表面が著しく牽制しており調整不明。	
n-146	n	n	腹	16.0 (7.0) (25.0)	胸部は内側気味に上がり、口縁部は大きく外傾する。口縁端部は内側する長い凹面を成す。	胸縁外縁には舟腹江底、内面には強い横方向のナゲが残存する。口縁部内外正丸もヨコナゲ調整。	
n-147	n	n	n	27.6 (5.9) —	胸部は「へ」外方へ上がり、口縁部は大きく外傾する。口縁端部を上方へ突出す。	胸縁外縁は直角方向のハケ調整。他はヨコナゲ調整。	外側には煤が付着する。
n-148	n	羽器		20.6 (3.7) (20.9) —	胸部はほぼ直上に上がり口縁部に至る。口縁部下には水平にのびる筋が付く。胸縁部は浅い凹面を成す。	*	*
n-149	n	n	n	20.8 (6.0) (21.1)	胸部はほぼ直上に上がり、外面には倒れた三角形の跡が認められる。胸の上には耳状の把手が付く。	胸部外縁はナゲ調整。他はヨコナゲ調整。	
n-150	n	n	n	— (11.0) 30.4	胸部はほぼ直上に上がり、外面には倒れた三角形の跡が認められる。胸の上には耳状の把手が付く。	胸部外縁は横方向のハケ調整、内面はナゲ調整。	
n-151	n	土器		全長 全幅 重量(g)	5.1 1.5 9.5	切妻形であり、ほぼ光形。孔径は5mmである。	上面質の土器。
n-152	n	n	n	全長 全幅 重量(g)	6.0 2.1 23.0	ほぼ円錐形であり、両端が欠損。孔径は7mmである。	*
n-153 SX-10	土器 小 杯			10.6 3.7 — 7.5	底部はやや丸味を有し、体部は内側気味に上がり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外縁は回転ヘラ切り後ナゲ調整。口縁部から内面にかけて回転ナゲ調整。	
n-154	n	n	n	10.2 2.7 — 7.0	底部はほぼ平らで、体部は「外方へほぼ直上にあり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外縁は回転ヘラ切り。他は表面が牽制しており調整不明。	

第8表 遺物観察表II

検査番号	遺構番号	器種	形態	法量 (cm)	口径 基部 側面 底盤	形態・文様	手法	備考
31-155	SX-10	土器	小皿	-	11.0 (1.7) - 7.8	底盤は平らで、体部は上外刃へ直貫のび、口縁部へ至る。口縁部は丸く仕上げる。	底盤外面は四版へラ切り後ナゲ調整。他は四版ナゲ調整。	
n-156	"	羽釜	"	-	22.7 (3.5) (25.0)	鋸歯は内側して上がり、口縁部でさらに外傾する。口縁部下には水平にのびる筋が付く。脚端部は丸く仕上げる。	鋸歯外面は横方向のハケ調整。他はヨコナゲ調整。	
n-157	"	"	"	-	23.2 (5.3) (25.0)	鋸歯は内側して上がり、口縁部でやや直立する。口縁部下にはやや外方を向く筋が付く。脚端部は凹面を成す。	鋸歯外面は横方向のハケ調整の後タメキを施す。他はヨコナゲ調整。	外面は盛が付着する。
n-158	"	土器	"	-	全長 全幅 全厚 重量(g)	4.3 2.2 1.9 20.1	は底円筒形であり、完形。孔径は7mmである。	復元質の土器。
n-159	"	砥石	"	-	全長 全幅 全厚 重量(g)	8.7 5.8 1.9 122.0	表面両面と欠損部以外の側面を使用する。特に表面両面の使用が多く断面四面を成す。	石材は砂岩。
32-160	SX-11	復元器	杯	-	16.0 5.7 - 7.8	底盤はベタ高台となっており、体部は内側気泡に上がり、口縁部でやや外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底盤外面は糸切りである。他は器面が摩耗しており調整不明。	
n-161	"	土器	小皿	-	15.4 4.4 - 8.2	底盤はほぼ平らで、体部は直線的に上がり口縁部へ至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底盤外面は四版へラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
n-162	"	"	"	-	18.0 4.6 - 9.6	-	"	
n-163	"	"	"	-	13.7 5.6 - 7.0	底盤は平底でベタ高台である。体部は内側気泡に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底盤外面は糸切りである。他は器面が摩耗しており調整不明。	
n-164	"	"	"	-	14.5 5.5 - 6.8	底盤は平底でベタ高台である。体部は内側気泡に上がり口縁部で上方力を向く。口縁端部は丸く仕上げる。	底盤外面は糸切りである。口縁部から内面にかけて四版ナゲ調査。	内面に176gの黏付いた状態で出土。
n-165	"	小杯	"	-	10.4 4.2 - 6.0	底盤は平底でベタ高台である。体部は内側気泡に上がり口縁部で外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	"	体部から口縁部外面にかけた様が付着する。
n-166	"	"	"	-	8.6 2.4 - 6.8	底盤はほぼ平らで、体部は外刃へほぼ直貫に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底盤外面は四版へラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
n-167	"	"	"	-	9.6 2.3 - 7.2	-	"	
n-168	"	"	"	-	10.0 2.3 - 7.8	-	"	
n-169	"	"	"	-	9.8 2.5 - 7.0	底盤外面は四版へラ切り。他は四版ナゲ調査。		

第8表 遺物観察表12

辨認番号	遺物番号	器 名	種 類	法 並 (cm)	口縁 器底 脚柱 底柱	形態・文様	手 法	備 考	
32-170	SX-11	土 瓶 小 器 杯		9.8 3.0 — 6.6 4.2	底部はやや丸味を有す。 体部は上外方へほぼ直线上に張り出る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面 はナデ調整。他は回転ナデ調整。			
〃-171	"	"	"	9.8 2.4 — 6.8	底部はほぼ平らで、体部はやや内 周気味に上がり口縁部に生ずる。口 縁端部は細く仕上げる。	底部外面は素切り、内面はナデ 調整。口唇部から内面にかけて 回転ナデ調整。			
〃-172	"	"	"	9.6 2.2 — 6.3	底部はほぼ平らで、体部は上外方 へほぼ直线上に張り出る。口縁部で若干 外傾する。口縁端部は丸く仕上げ る。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ 調整。口唇部から内面にかけて 回転ナデ調整。			
〃-173	"	"	"	10.4 3.1 — 6.3		"	"		
〃-174	"	"	"	9.6 3.0 — 5.8	底部は平らで、体部は内周気味に 上がり、口縁部で若干外傾する。 口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は素切り。口唇部外面 から内面にかけて回転ナデ調整。 底部はナデ調整。			
〃-175	"	"	瓶	15.5 6.5 — 6.0	底部はほぼ平らで、体部は内周気味に 上がり、口縁部で若干外傾する。 口縁端部は丸く仕上げる。底部には 「ハ」の字状の高さ1.0cmの高台が付 く。瓶底は内傾する凹面を成す。	器底は厚底が著しく調整不明。 器底は非常に薄い。			
〃-176	"	"	小 瓶	9.4 1.3 — 5.8	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直线上に張り出る。口縁部で内 周気味に上がり口縁部に張る。口縁 部内面に凹線を残す。	底部外面は回転ヘラ切り。 口唇部から内面にかけて回転ナ デ調整。			
〃-177	"	"	"	10.0 1.4 — 7.6	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直线上に張り出る。口縁部に張 る。	器底は厚底が著しく調整不明。			
〃-178	"	"	台付小瓶	9.2 3.4 — 5.1	底部は平らで、体部は内周気味に 上がり口縁部に張る。口縁端部は 丸く仕上げる。底部には「ハ」の 字状の高さ1.6cmの高台が付く。	"			
33-179	"	"	瓶	28.2 (3.0) (24.7)	底部は上外方へ上がり、口縁部で 大きく外反し、瓶底を若干肥厚 させた。瓶底は内傾する凹面 を成す。	瓶底内面に平行のタキ。瓶底 内面はナデ調整。他はココナデ 調整。			
〃-180	"	"	羽 釜	24.8 (4.7) (27.4)	瓶底は内周気味に上がり口縁部に 張る。口縁下には上外方を向く 凹線が付く。瓶底を若干肥厚 させた。瓶底は内傾する凹面 を成す。	瓶底外面は横方向のハケ目とタ キ目が残存し、内面はナデ調 整。他はココナデ調整。			
〃-181	SX-12	土 瓶 耳 器		7.4 2.9 — 4.0	底部はほぼ平らで、体部から口縁 部の2ヶ所を内側に折り曲げる。 口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ 調整。他は回転ナデ調整。	内外面とも浅 黄色を呈す。		
〃-182	"	土 瓶		全長 全幅 重量(g)	4.5 1.6 10.7	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は4.5mmである。	土瓶質の土器。		
〃-183	SX-13	土 瓶 器 杯		12.0 3.4 — 7.8	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直线上に張り出る。口縁部で若干外傾 する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面 はナデ調整。他は回転ナデ調整。			
〃-184	"	"	皿	14.2 2.3 — 9.0	底部は平らで、体部は上外方へほ ぼ直线上に張り出る。口縁 端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、他は 器底が厚底としており調整不鮮			

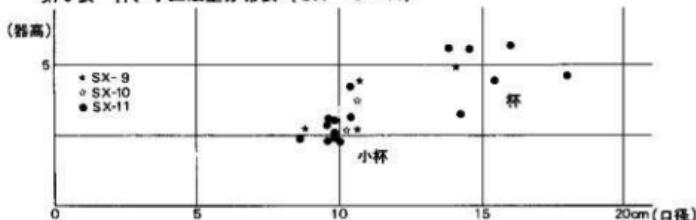
第8表 遺物観察表13

件名番号	遺物番号	器種	種類	法量 (cm)	口径 最高 最低 底径	形態・文様	手法	備考
33-185	SX-13	須恵器	杯	24.0 10.1 — —	体部は上方へほぼ直上上がり、 口縁部に至る。口縁端部を若干肥 厚する。	器面は擦耗するが、外面に平行 のタキヤの後に回転カギ目調査、 内面に青面紋文のタキヤが残存 する。	焼成はやや不 良で瓦質土器 に似る。	
n-186	SX-14	"	杯(蓋)	(1.8)	天井部は平らで、中央部に丸いつ まみが付く。	マキアゲ、ヒズビキ形成。 器面は回転ナゲ調査。		
n-187	"	土器	器	12.2 3.3 — — 7.5	底部はやや丸味を有し、体部は上 方へほぼ直上上がり口縁部に至 る。口縁端部は丸く仕上げる。	近部外面は回転ヘラ切り後ナゲ 調査。他はナゲ調査。		
n-188	"	"	器	11.6 5.4 — — 6.8	底部は深く、やや丸味を有す。体 部は上方へほぼ直上上がり口縁 部に至る。口縁端部は丸く仕上げ る。	底部外面は回転ヘラ切りで版状 形成が残存する。内面は回転ナ ゲ調査。		
n-189	"	"	器	13.5 5.1 — — 8.0	底部は比較的深く、平らで、体部 はやや直角味に上がり、口縁部 で上方に向く。口縁端部は丸く 仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は 器面が擦耗しており調整不明。		
n-190	"	"	器	13.2 1.9 — — 9.0	底部はほぼ平らで、体部は上方 へほぼ直上上がり口縁部に至る。 口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナゲ 調査。他は回転ナゲ調査。		
n-191	"	土器	全長	3.6	筋鉢形であり、光沢。 孔径は4mmである。	土面質の土器。		
n-192	SX-15	土器	器	13.4 5.1 — — 7.1	底部は底盤平らで、体部は上方 へほぼ直上上がり、口縁部が若干 外傾する。口縁端部は丸く仕上げ る。	底部外面は回転ヘラ切り。他は 器面が擦耗しており調整不明。		
n-193	"	"	器	12.8 2.4 — — 9.4	底部は底盤平らで、体部は上方 へほぼ直上上がり口縁部に至る。 口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面 へほぼ直上上がり口縁部に至る。 口縁端部は丸く仕上げる。		
n-194	"	土器	全長	4.5	筋鉢形であり、光沢。 孔径は5mmである。	土面質の土器。		
n-195	P-1	土器	器	15.0 7.2 — — 8.2	底部は底盤平らで、両面に「ハ」 字形の溝く高さ1.9cmの高台が 付く。口縁端部は丸く仕上げる。 体部は上方へほぼ直上上がり口 縁部に至る。端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで版状 形成が残存する。他は回転ナ ゲ調査。		
n-196	P-2	"	杯	12.1 3.2 — — 9.0	底部は底盤平らで、体部は上方 へほぼ直上上がり口縁部に至る。 口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は 器面が擦耗しており調整不明。		
n-197	P-3	赤土器	器	(2.8) — — — 4.5	底部は平らで、側部は上方へ上 がる。	外面上にタキヤが残存し、内面 はナゲ調査。		
n-198	P-4	須恵器	杯(蓋)	10.0 (3.3) — — —	天井部は丸味を有し、縁やかに下 り、口縁部で下方に見当する。 口縁端部は細く仕上げる。	天井部外面はヘラ切りで一部に 回転ヘラ削り調査。他は回転ナ ゲ調査。		
n-199	"	土器	器	10.2 3.5 — — 6.4	底部は平らで、体部は上方へは ほぼ直上上がり口縁部に至る。口縁 端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナゲ 調査。口部から内面にかけて 回転ナゲ調査。		

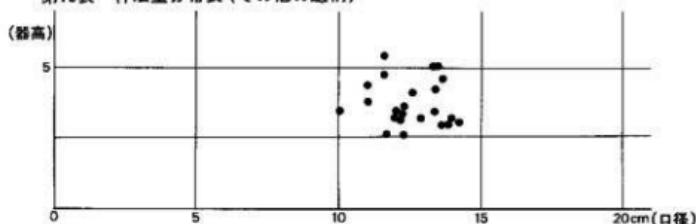
第8表 遺物観察表14

探査番号	遺物番号	器 形	底 高 (cm)	口径 等高 底高 底径 底深	形態・文様	手 法	備 考
33-200	P-5	L.側 等 杯	11.0 2.8 — 6.1	底部はほぼ平らで、体部は上外方へ上がり、口縁部で外傾する。口縁端部は細く仕上げる。	底部外周は赤切り。内面はナゲ調整。口肩部から内市にかけて回転ナガ調整。		
—201	P-6	小 皿	9.8 1.3 — 5.6	底部はほぼ平らで、体部は上外方へ直線的にしがり口縁部へ至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底盤外周は回転ヘラ切り後ナゲ調整。他は回転ナガ調整。		

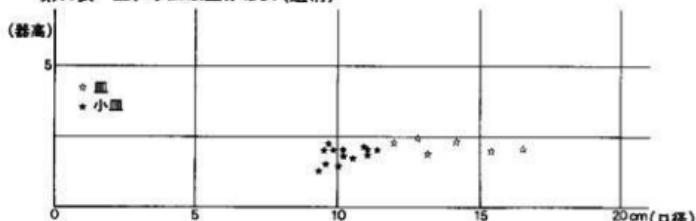
第9表 杯、小皿法量分布表 (SX-9~11)

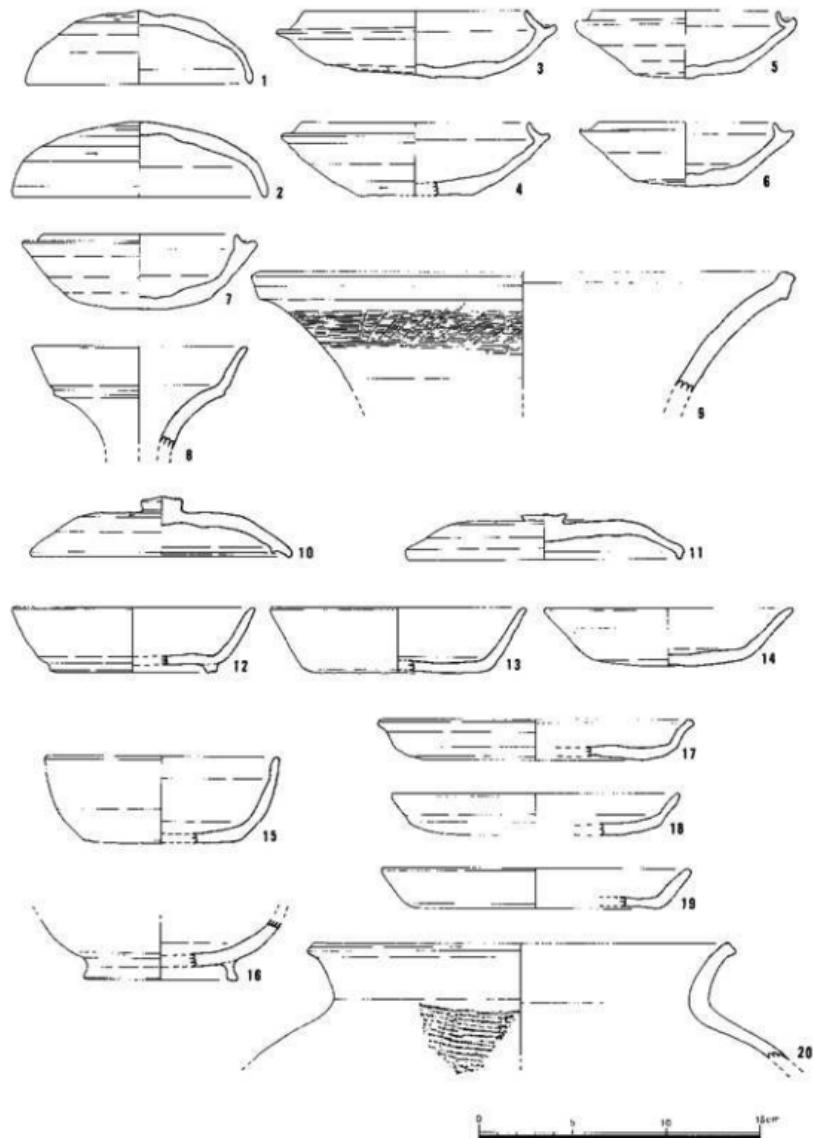


第10表 杯法量分布表 (その他の造構)

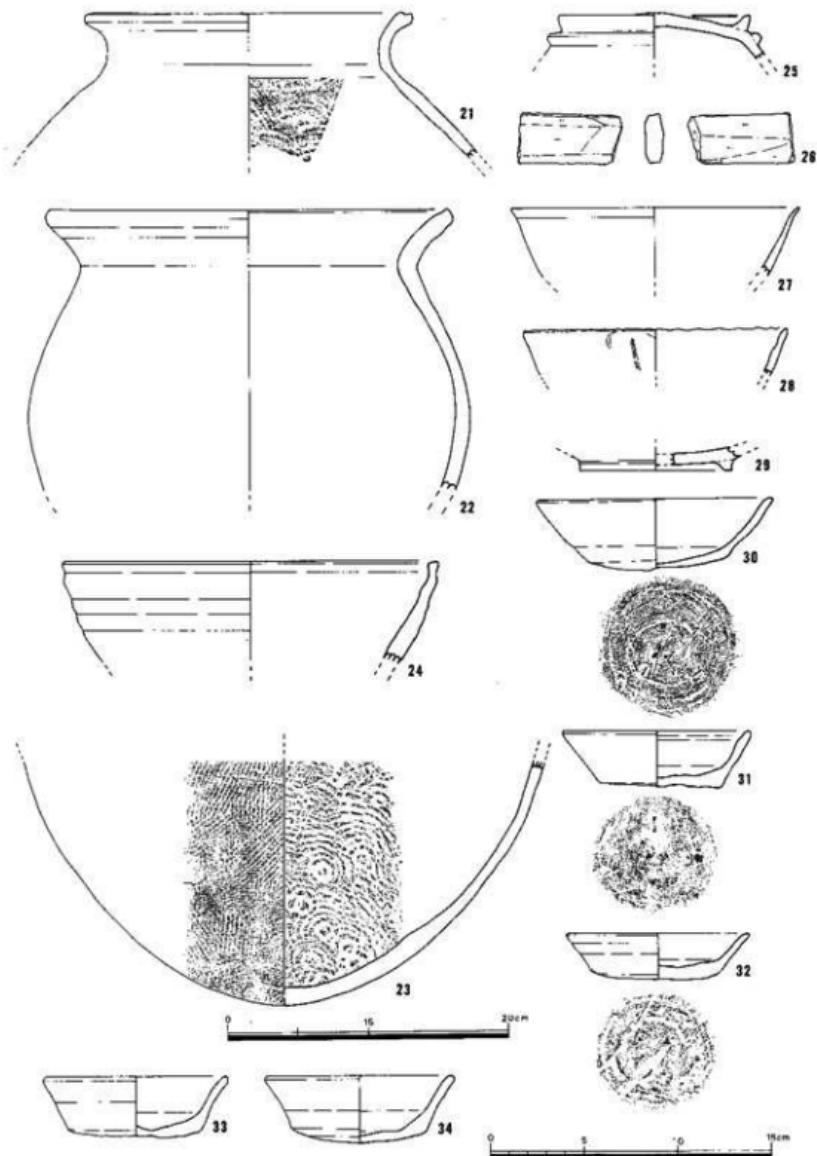


第11表 皿、小皿法量分布表 (造構)

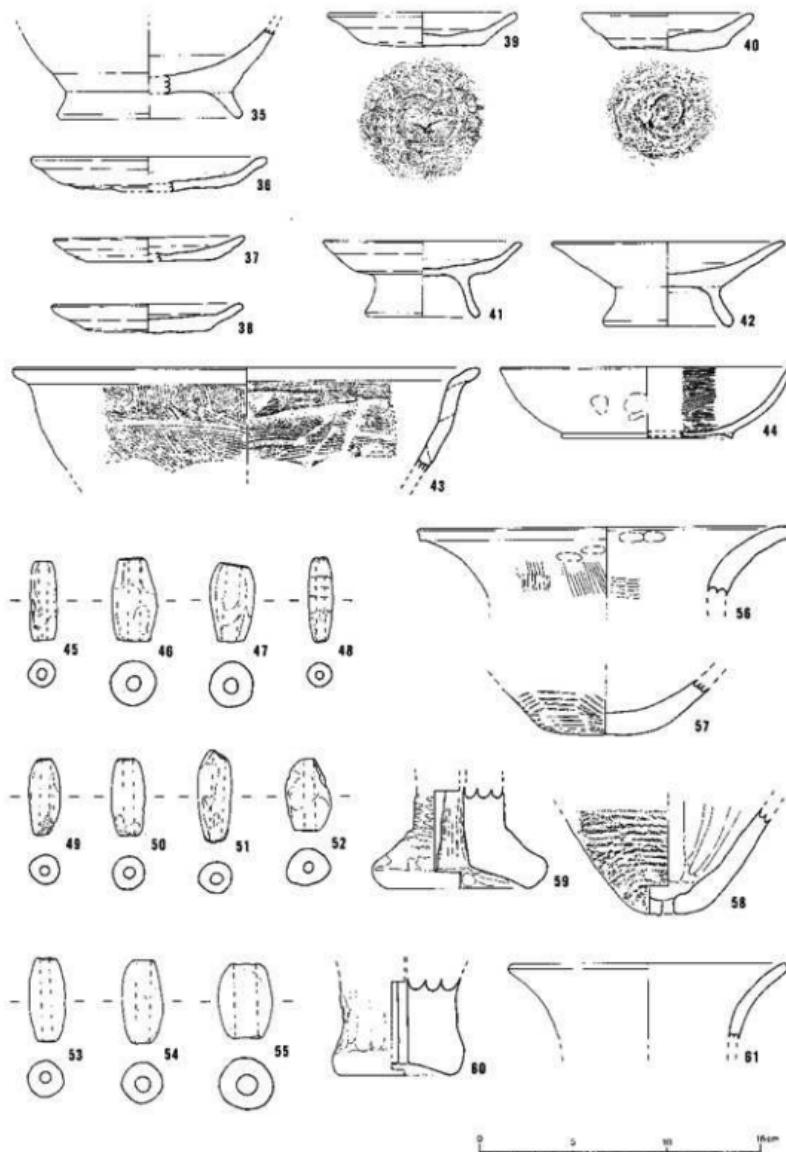




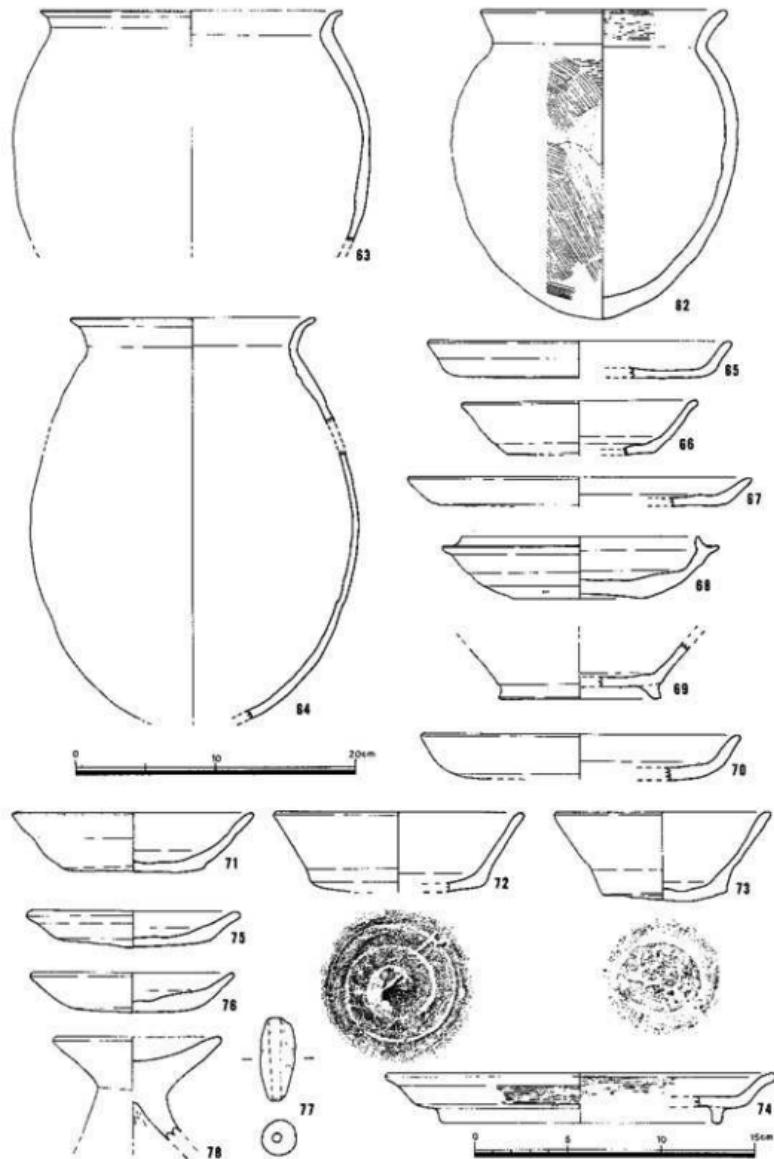
第24図 遺物実測図 1



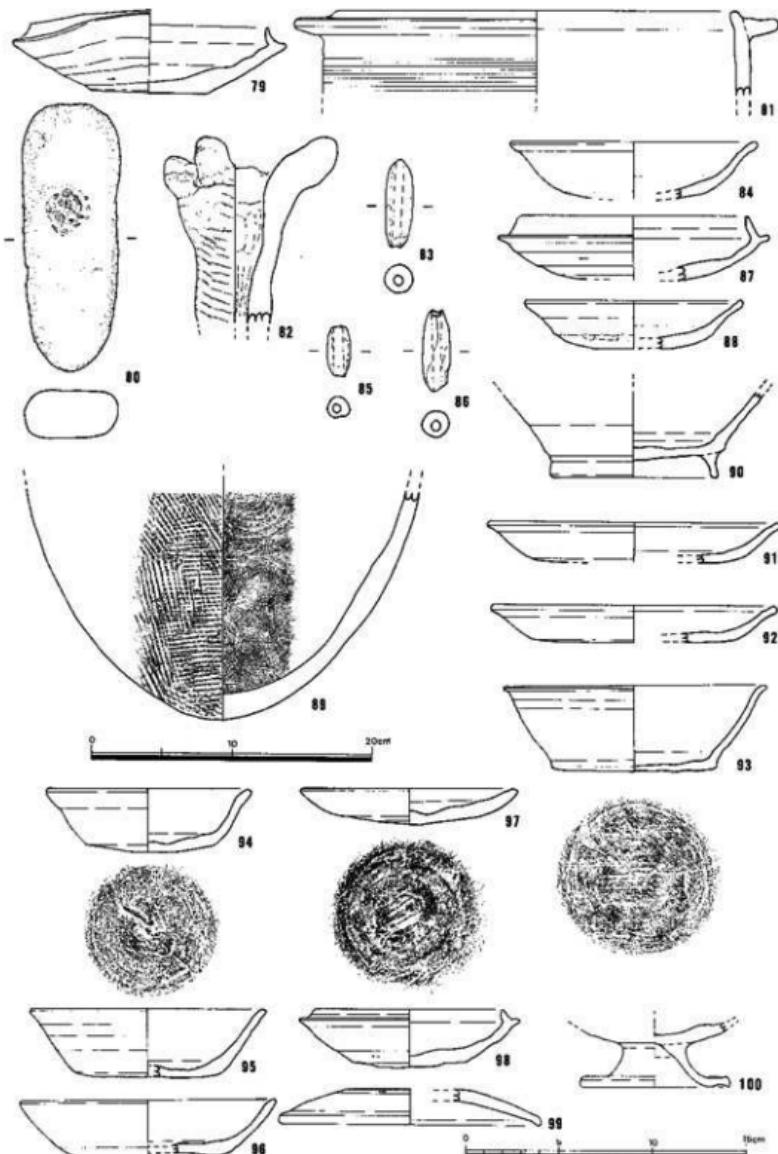
第25図 造物測定図 2



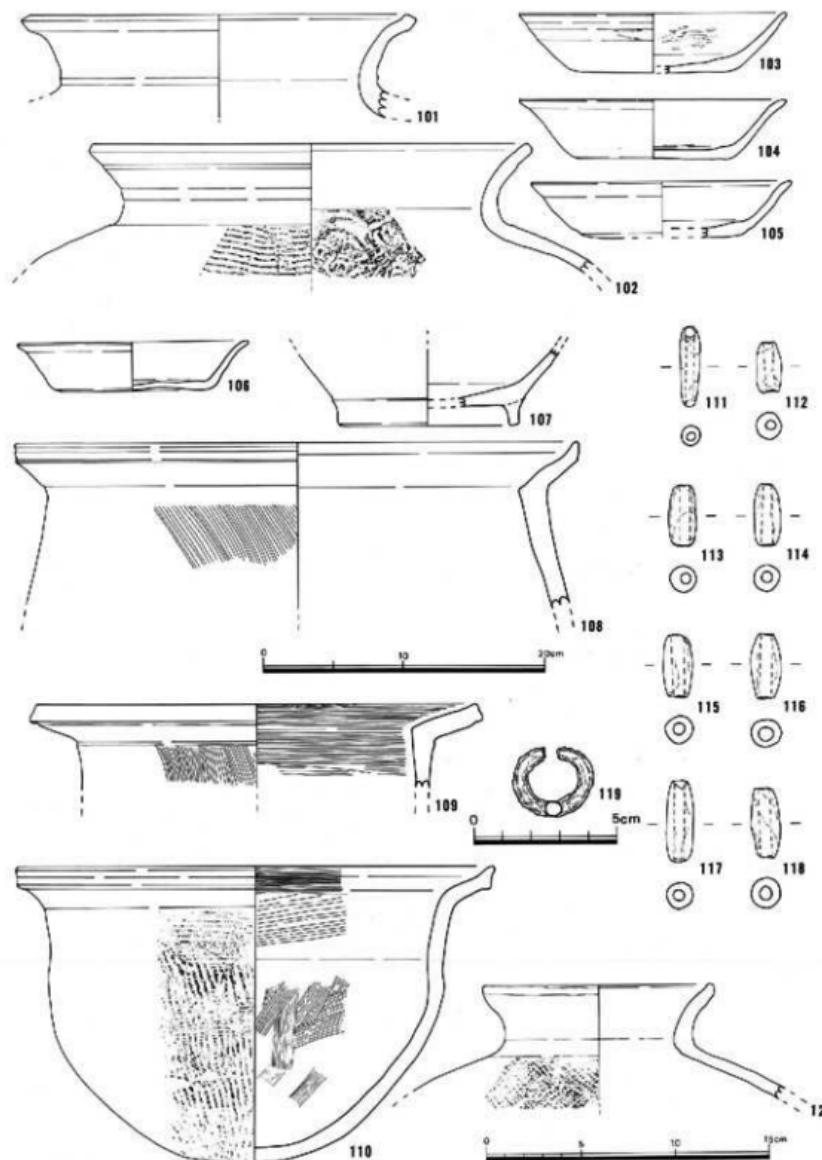
第26図 遺物実測図 3



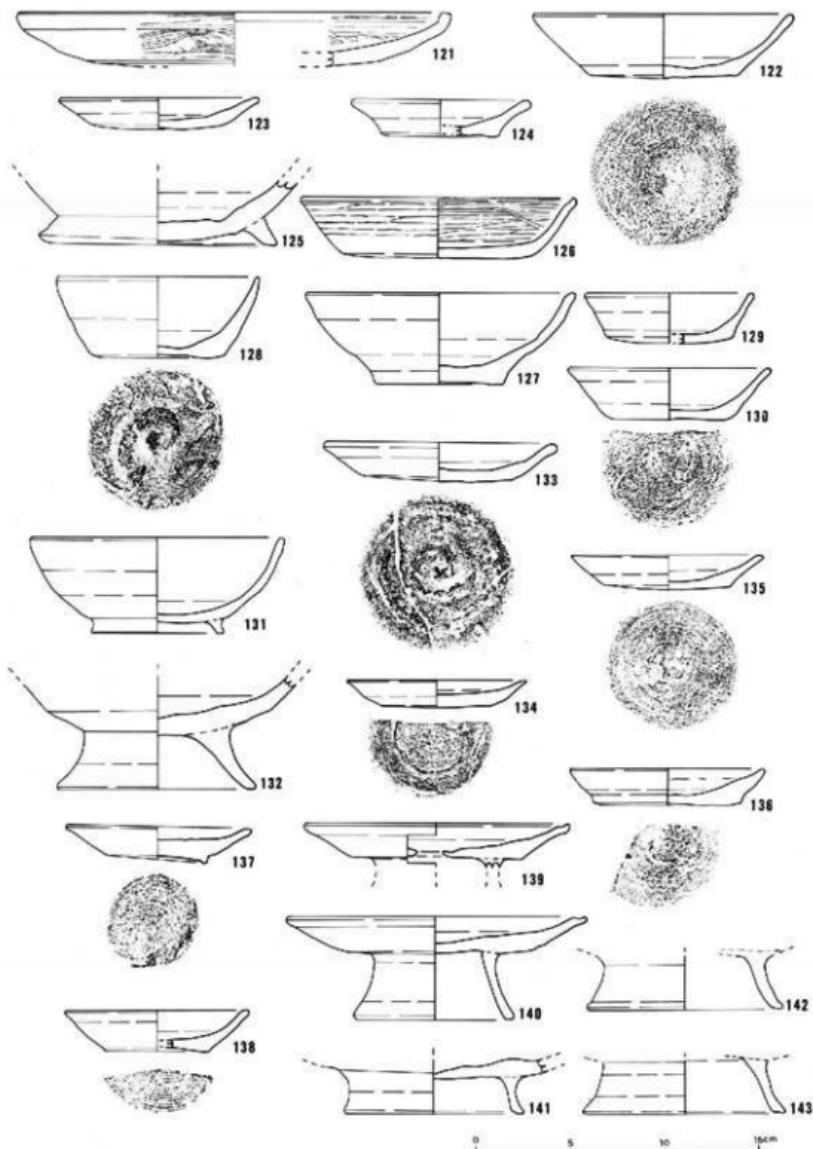
第27図 遺物実測図 4



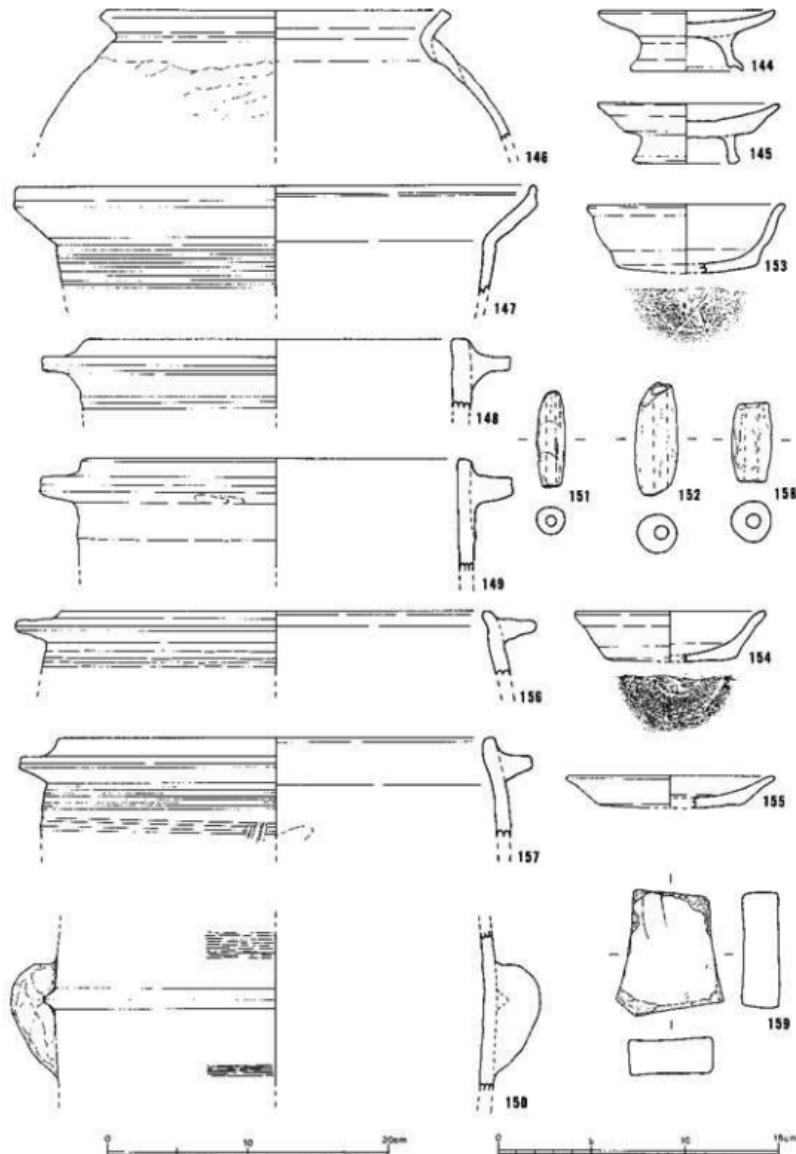
第28図 遺物実測図 5



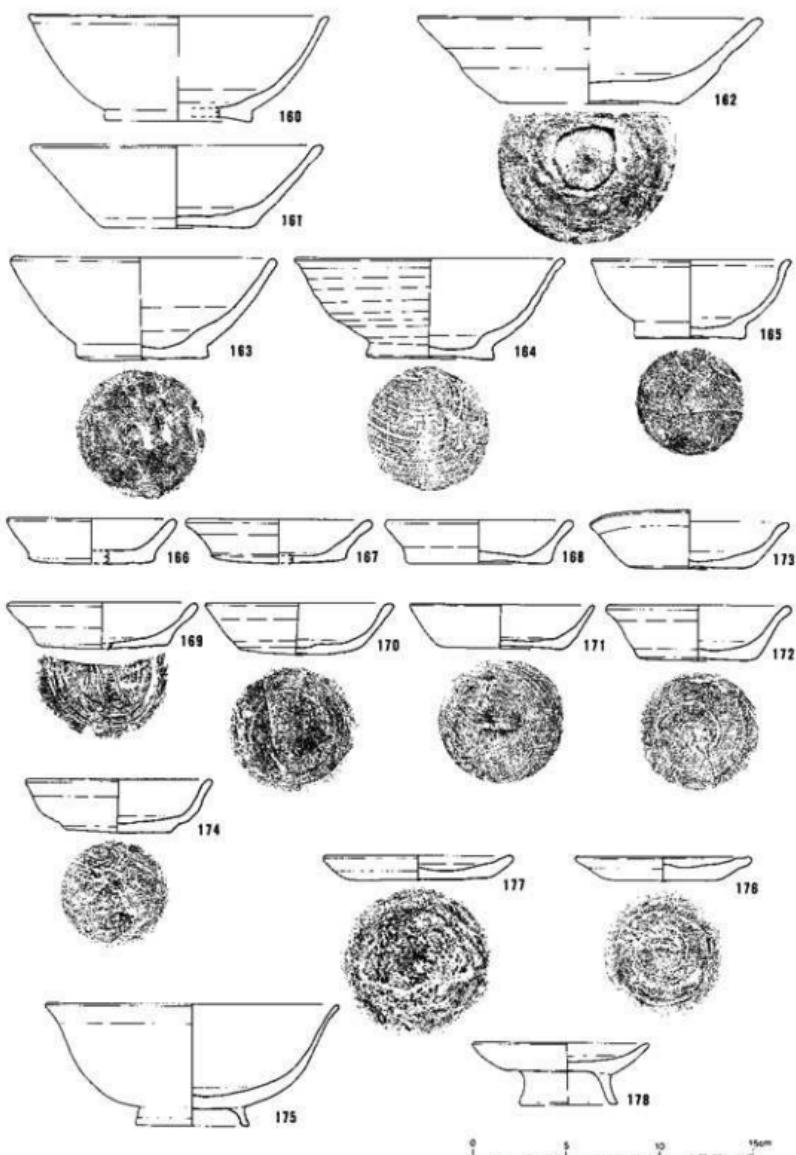
第29図 遺物実測図 6



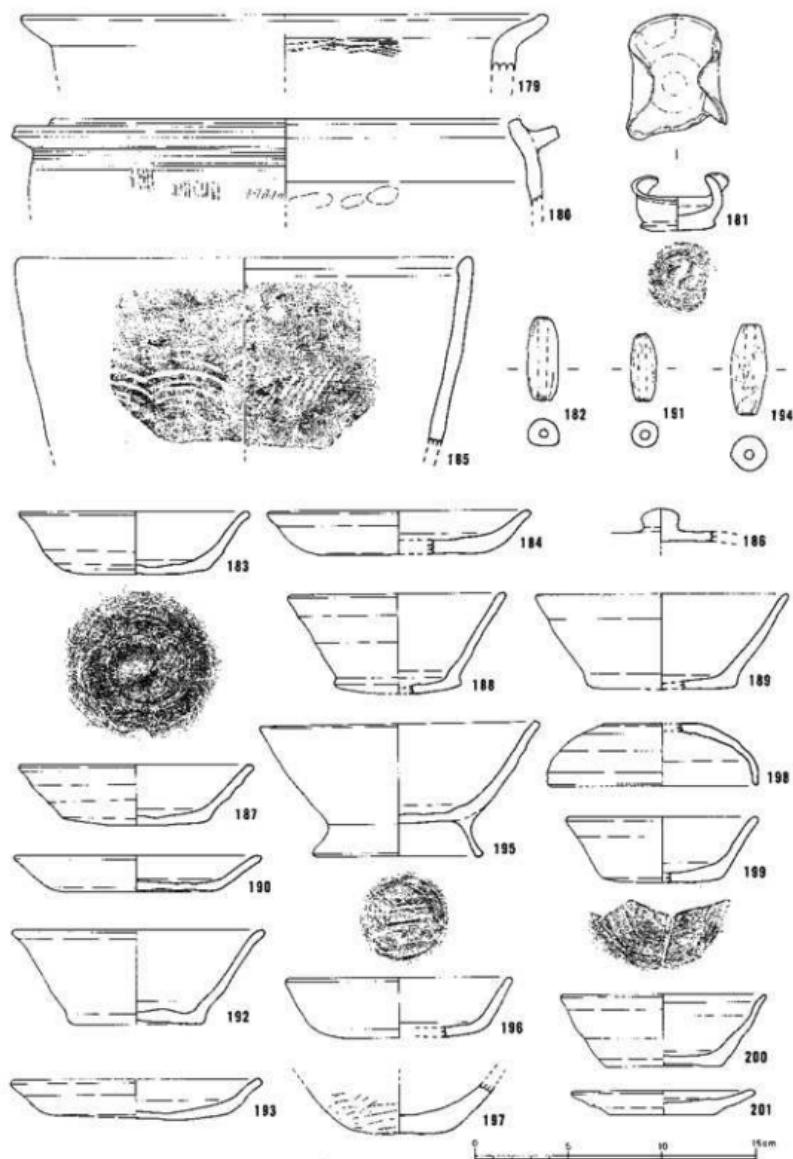
第30図 遺物実測図 7



第31図 遺物実測図 8



第32図 遺物実測図 9



第33図 遺物実測図10

図 版



A区調査前全景（北より）



B・C区調査前全景（北より）

図版 2



試掘トレンチ 遺構検出状態（北より）



試掘トレンチ 遺構検出状態（南より）

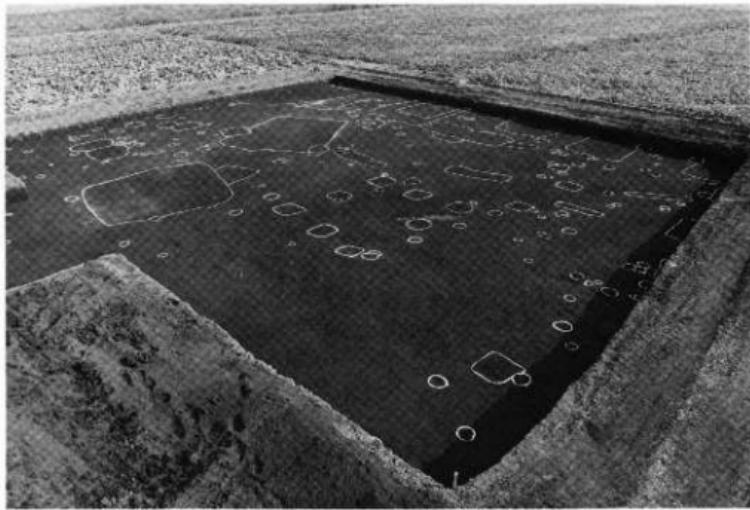


試掘トレンチ 遺構検出状態（東より）



試掘トレンチ 遺構検出状態（西より）

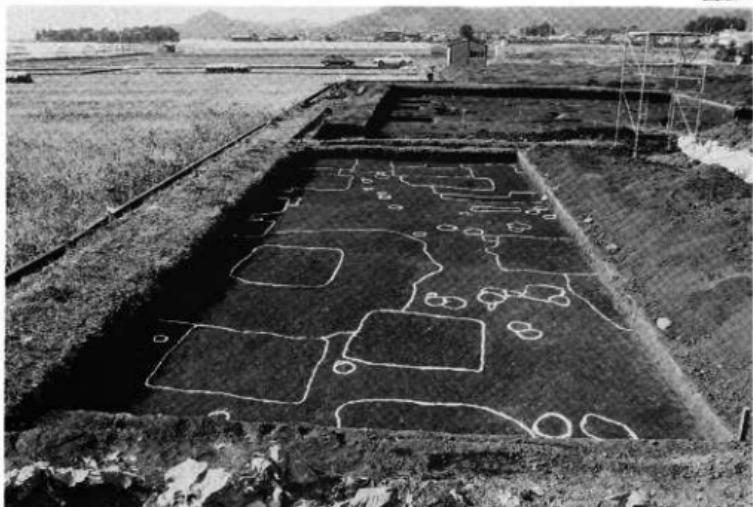
図版 4



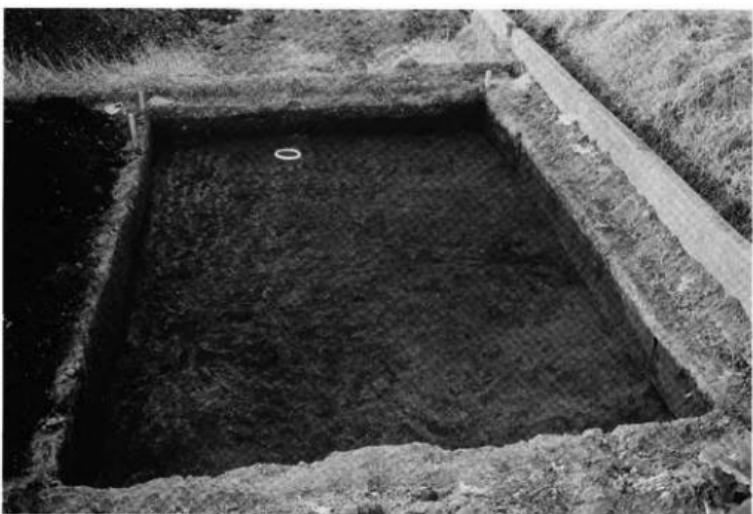
A区遺構検出状態（北より）



A区遺構検出状態（北より）



B区造構検出状態（東より）



C区造構検出状態（東より）

図版 6



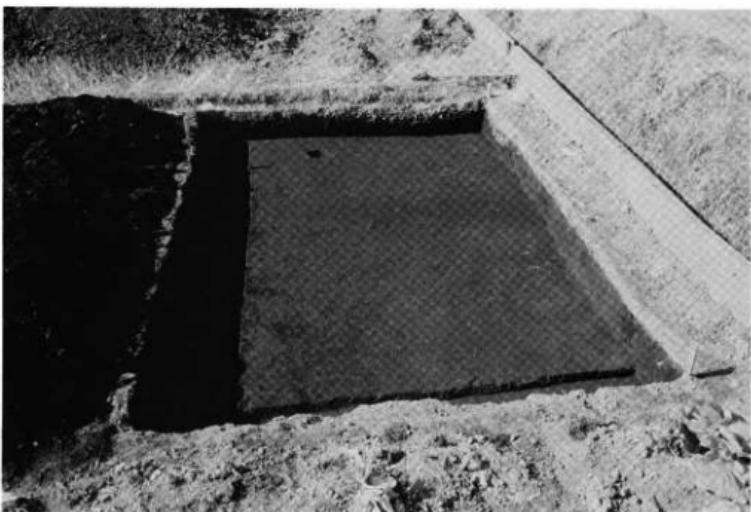
A区遺構完掘状態（北より）



A区遺構完掘状態（北より）



B区造構完掘状態（東より）



C区造構完掘状態（東より）

図版 8



A区北端部礫層検出状態（西より）



A区北端部礫層検出状態（南より）

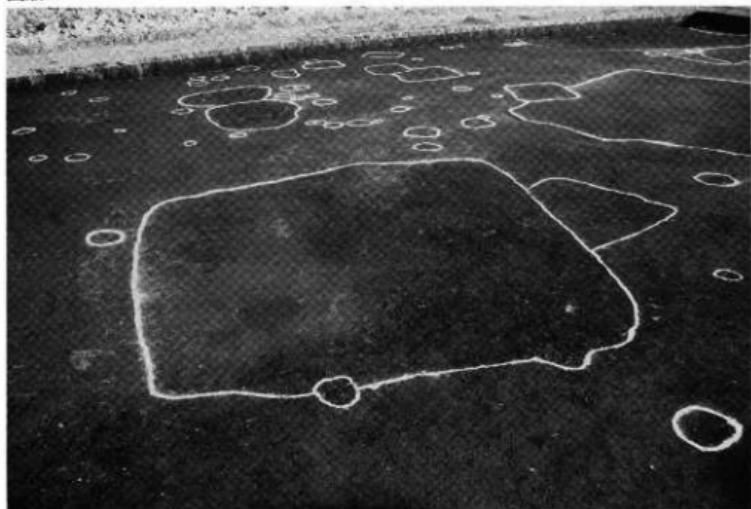


ST-25 (北より)



ST-25 (北より)

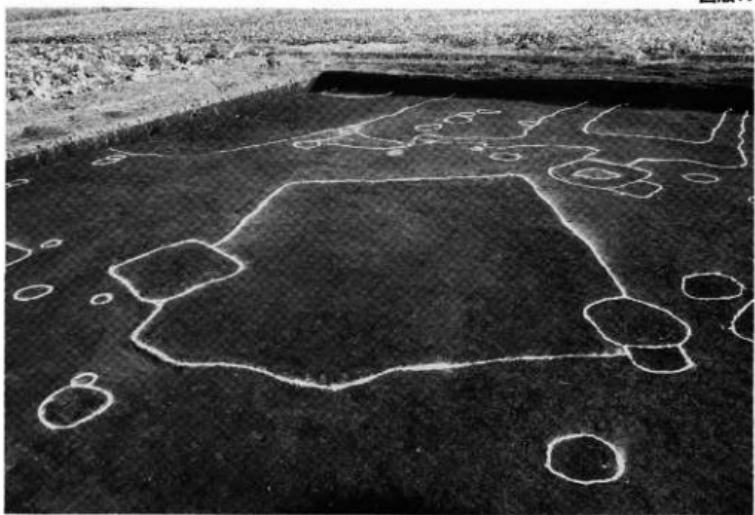
図版10



ST-26 (西より)



ST-26 (西より)



ST-27 (北より)

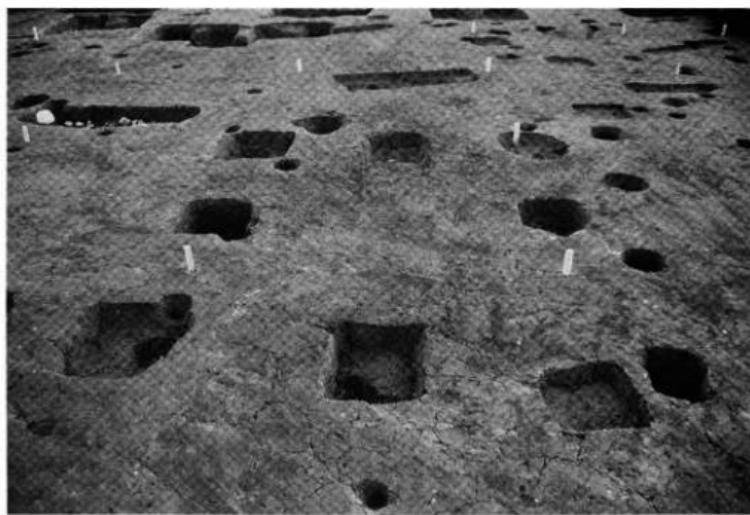


ST-27 (北より)

図版12



SB-56 (北より)



SB-56 (北より)

図版13



SB-57 (北より)



SB-58 (北より)

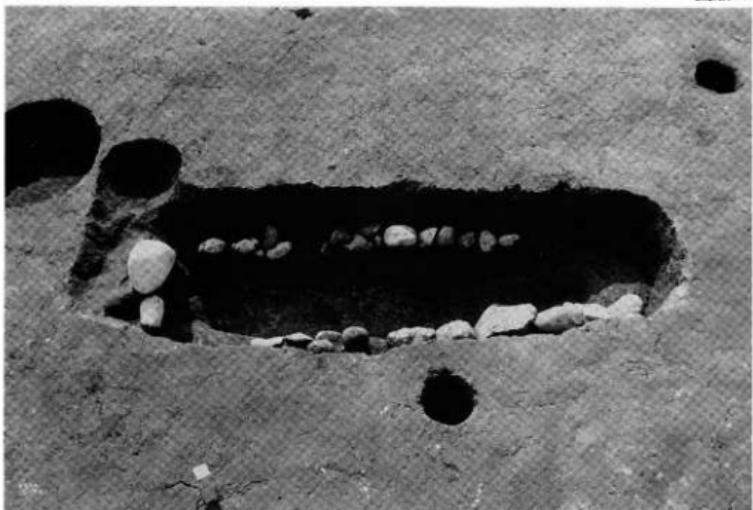
図版14



SA-16 (西より)



SA-16 (南より)

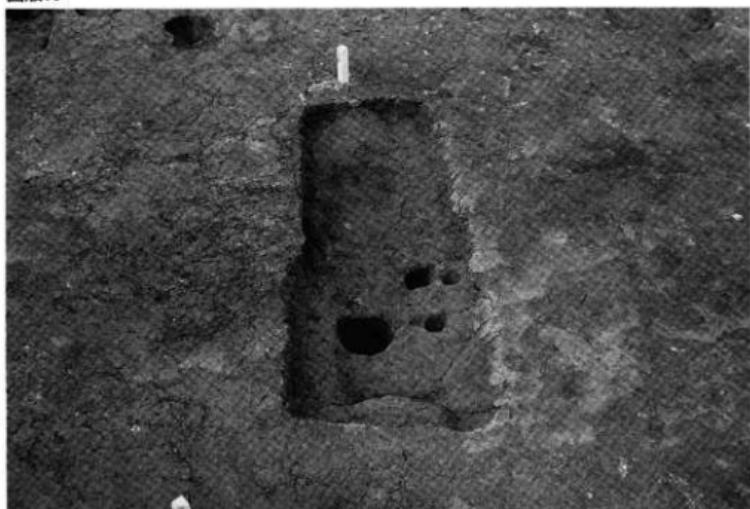


SK-79 (北より)



SK-79 (西より)

図版16



SK-80 (東より)



SK-81 (東より)



SK-82 (東より)



SK-84・85 (北より)

図版18



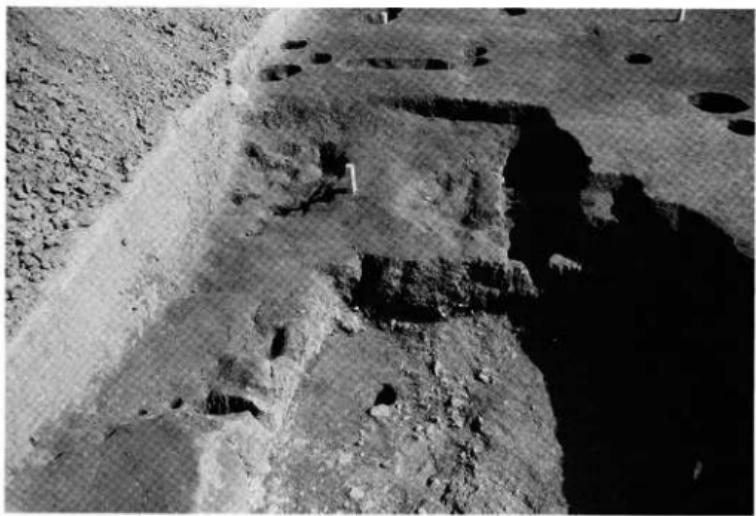
SK-88 集石検出状態（北より）



SK-88 (東より)



SK-88 (北より)



SK-94 (西より)

図版20



SX-1~7 (西より)



SX-1~7 (東より)



SX-1・2, P-1 (北より)



SX-1・2, P-1 (西より)

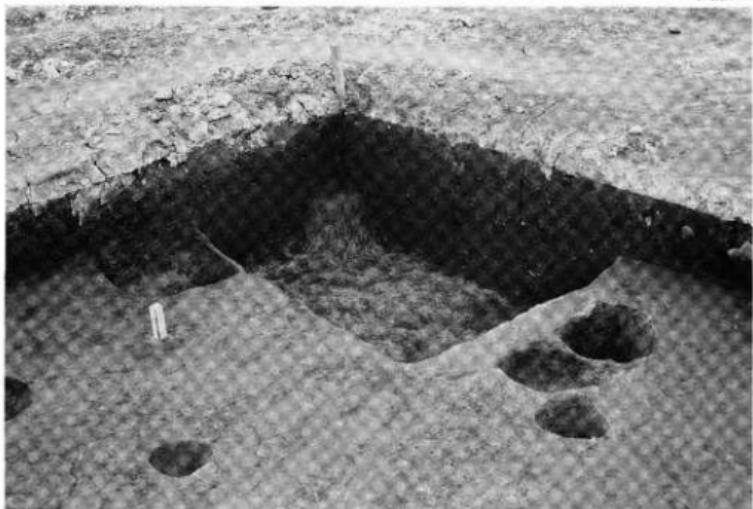
図版22



SX-1 (北より)



SX-2 (北より)

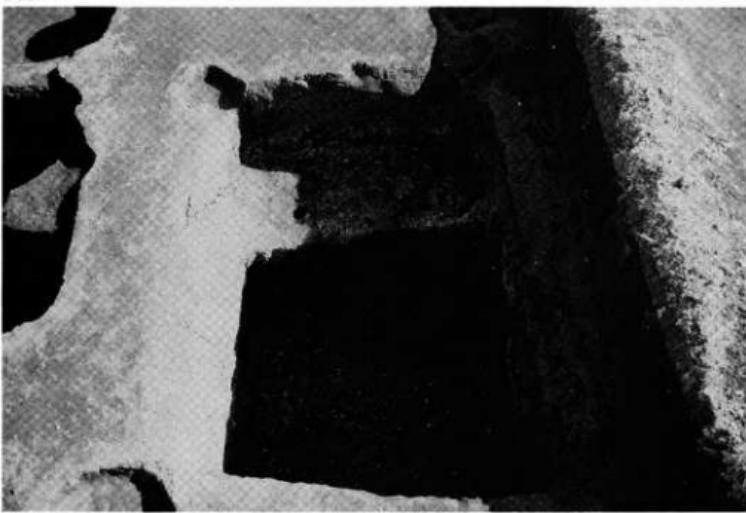


SX-3 (北より)



SX-4 (北より)

図版24



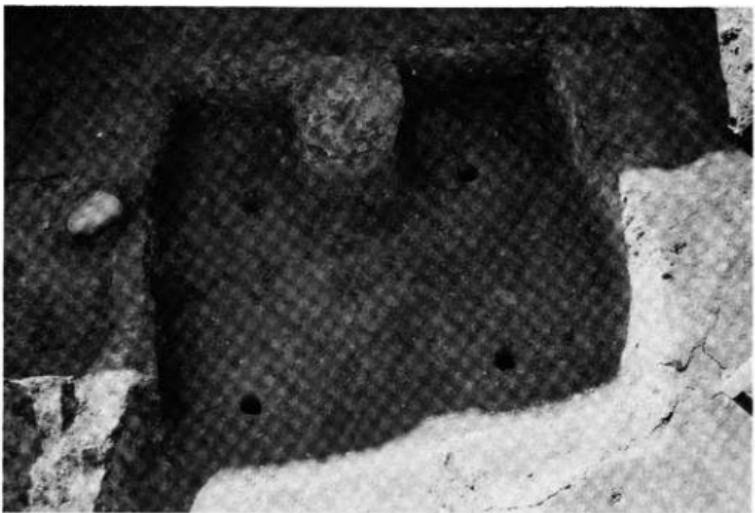
SX-5、SX-88 (西より)



SX-6 (北より)

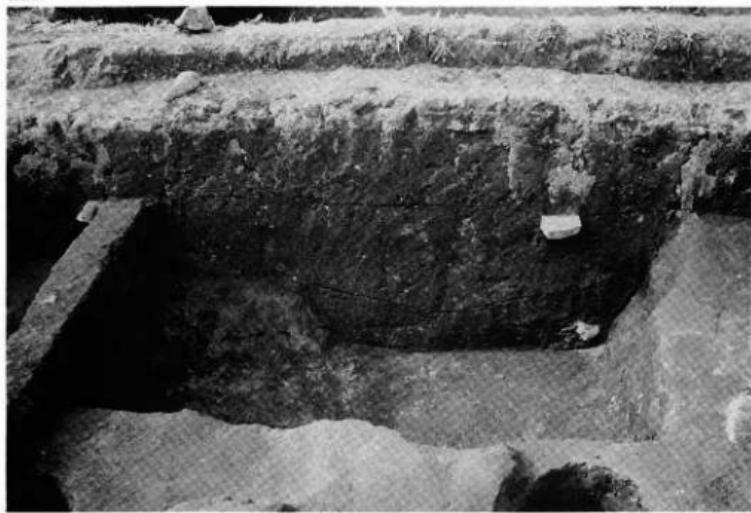


SX-7 (北より)

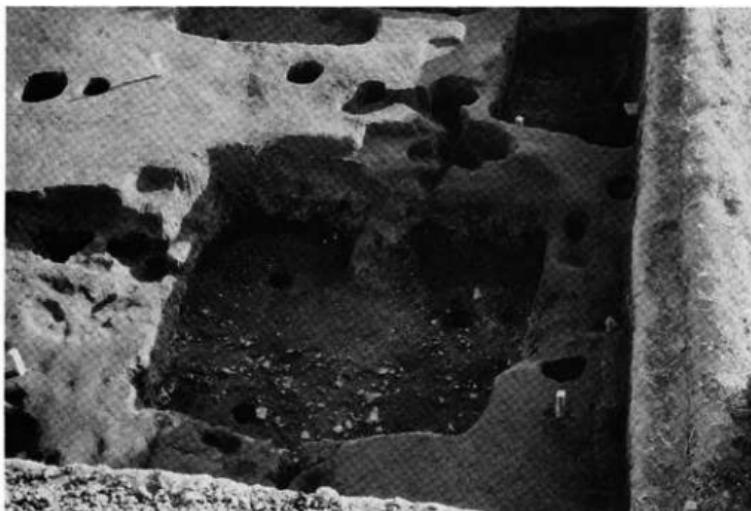


SX-7 (北より)

図版26



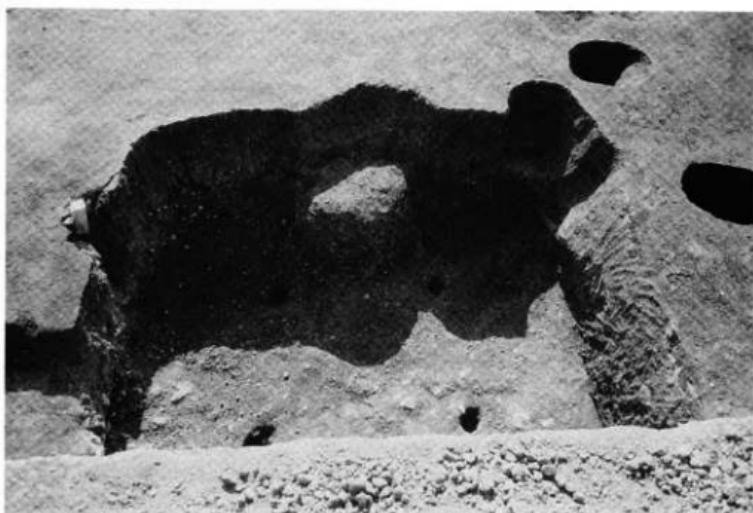
SX-8 (東より)



SX-9 (北より)



SX-10・11 (東より)



SX-12 (北より)

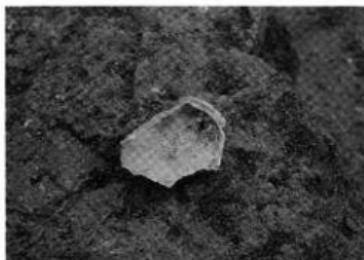
図版28



SX-13・14 (東より)



SX-15 (北より)



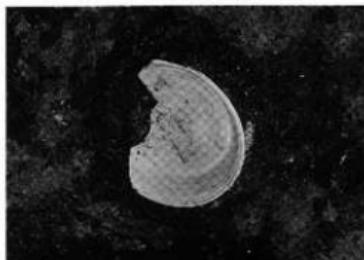
ST-25 遗物出土状態 (58)



ST-25 遗物出土状態 (59)



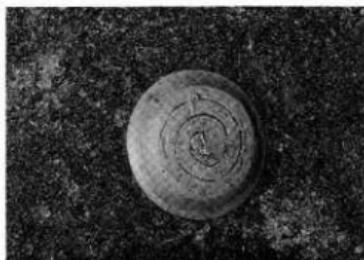
SK-78 遗物出土状態 (61)



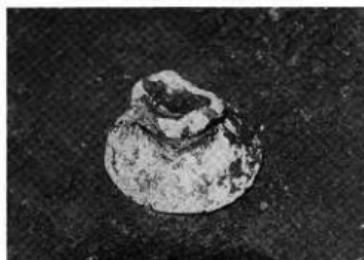
SK-88 遗物出土状態 (71)



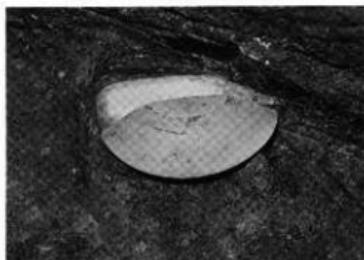
SK-88 遺物出土状態 (72)



SK-88 遺物出土状態 (75)



SK-93 遺物出土状態 (78)



SK-93 遺物出土状態 (79)

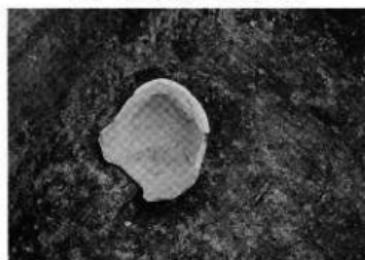
图版30



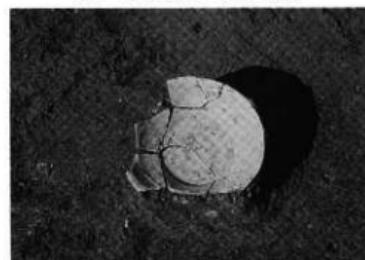
SK-79 遗物出土状態 (82)



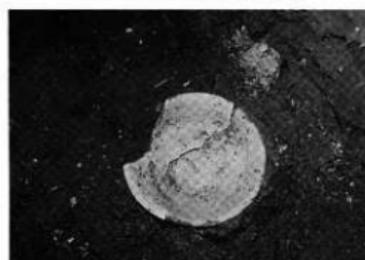
SX-2 遗物出土状態 (87)



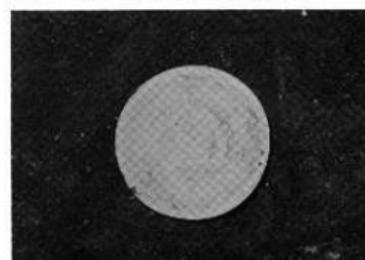
SX-3 遗物出土状態 (89)



SX-4 遗物出土状態 (93)



SX-5 遗物出土状態 (94)



SX-5 遗物出土状態 (97)



SX-6 遗物出土状態 (98)



SX-6 遗物出土状態 (100)



SX-6 遺物出土状態 (102)



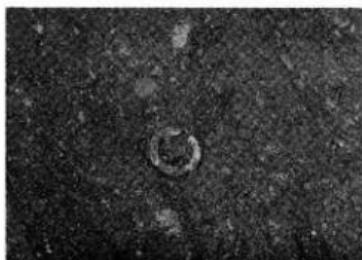
SX-6 遺物出土状態 (104)



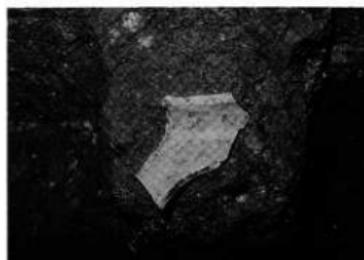
SX-6 遺物出土状態 (107)



SX-6 遺物出土状態 (110)



SX-6 遺物出土状態 (119)



SX-7 遺物出土状態 (120)



SX-7 遺物出土状態 (121)



SX-9 遺物出土状態 (131)

圖版32



SX-9 遺物出土状態 (132)



SX-9 遺物出土状態 (139)



SX-9 遺物出土状態 (140)



SX-9 遺物出土状態 (146)



SX-11 遺物出土状態



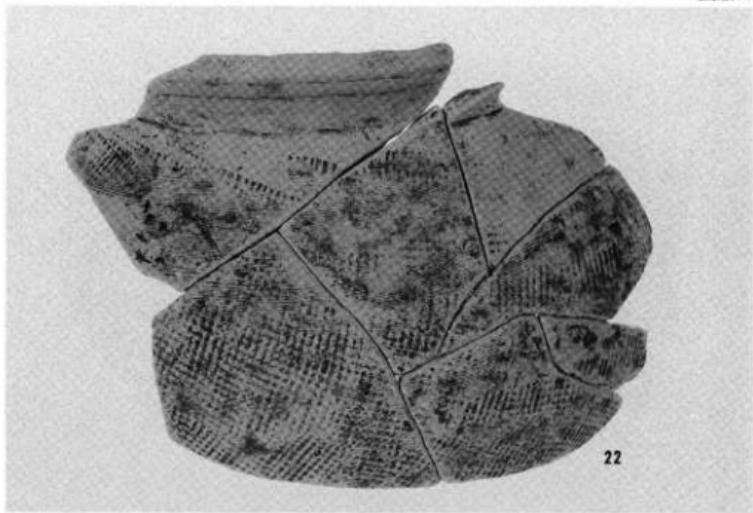
SX-11 遺物出土状態



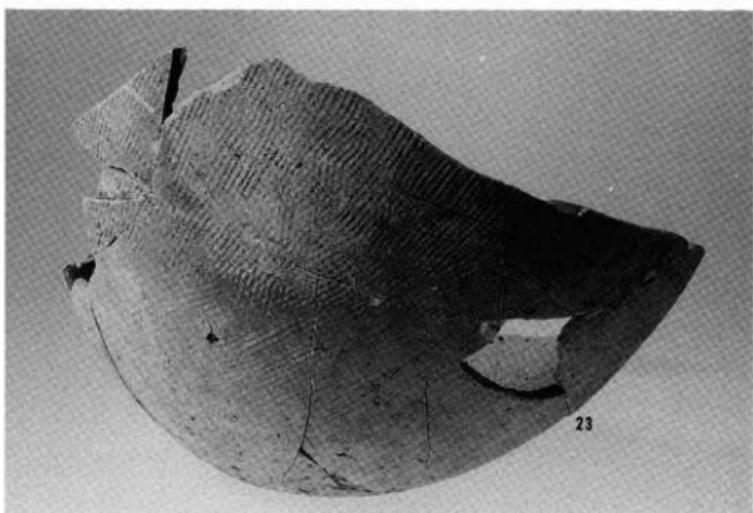
SX-14 遺物出土状態 (187)



P-1 遺物出土状態 (195)

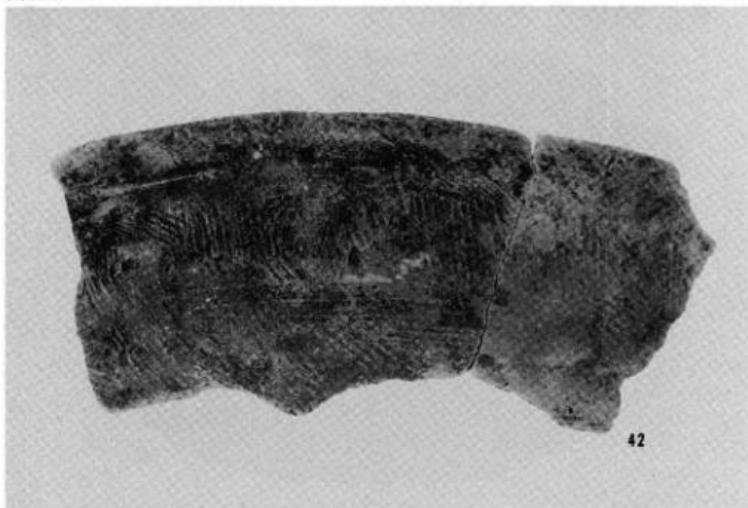


第II層 出土遺物



第II層 出土遺物

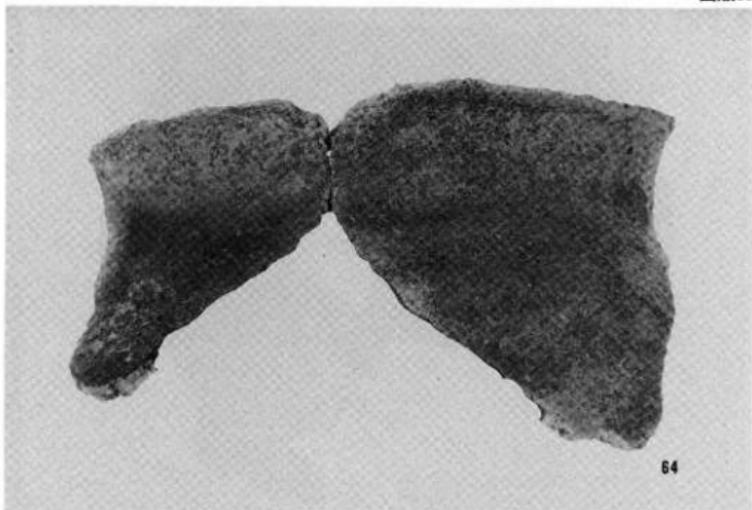
図版34



第II層 出土遺物



ST-26 出土遺物



64

ST-26 出土遺物



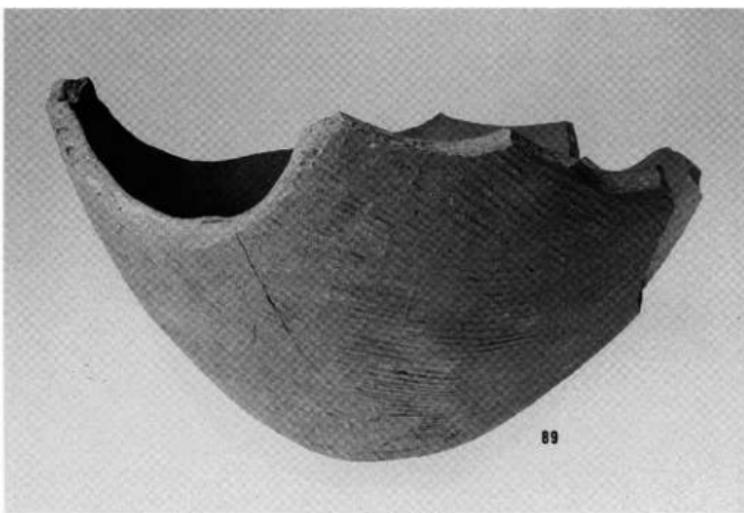
64

ST-26 出土遺物

図版36



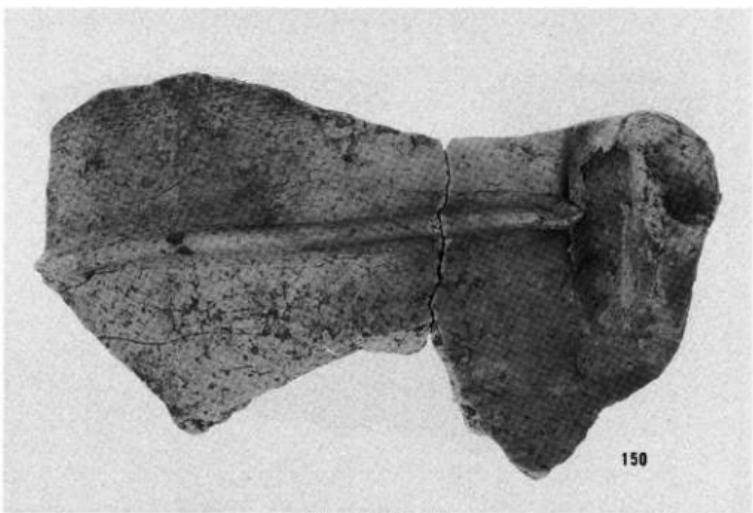
ST-26 出土遺物



SX-3 出土遺物

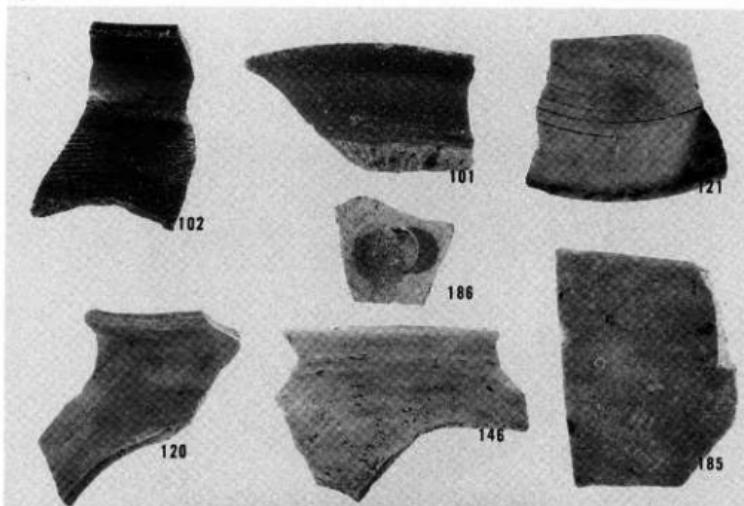


SX-6 出土遺物

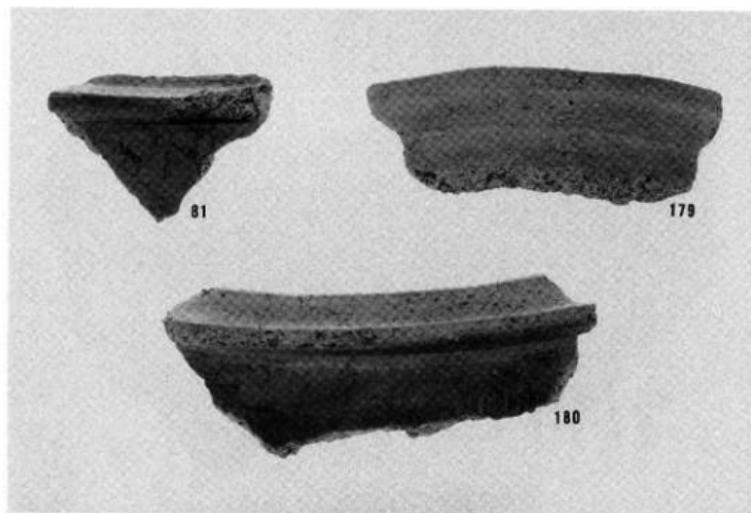


SX-9 出土遺物

圖版38

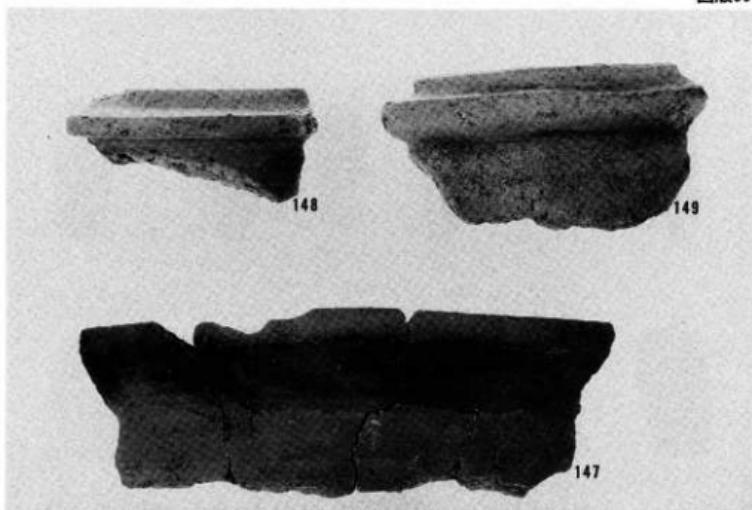


SX-6・7・9・13・14 出土遺物

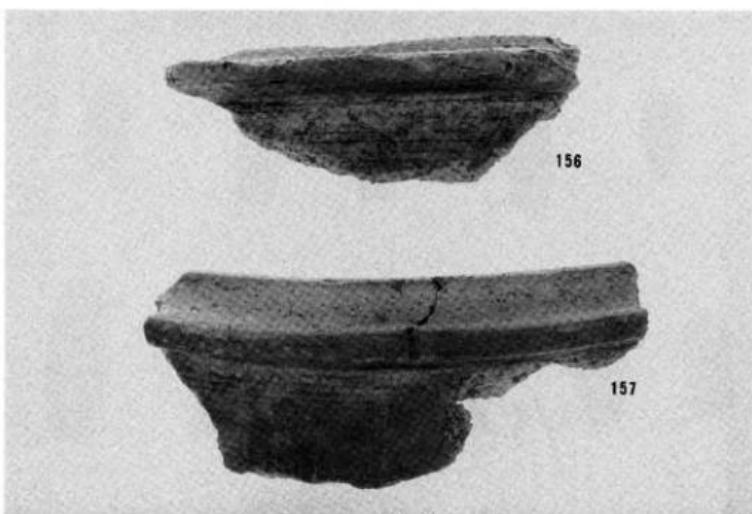


SX-11、SK-94 出土遺物

图版39

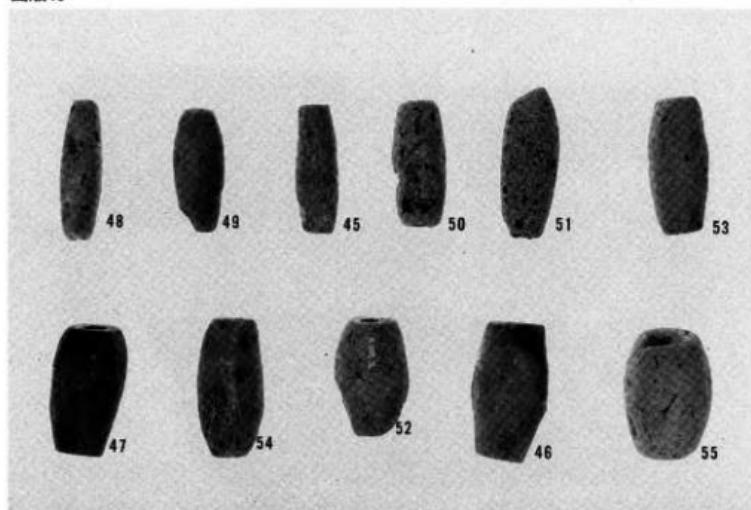


SX-9 出土遗物

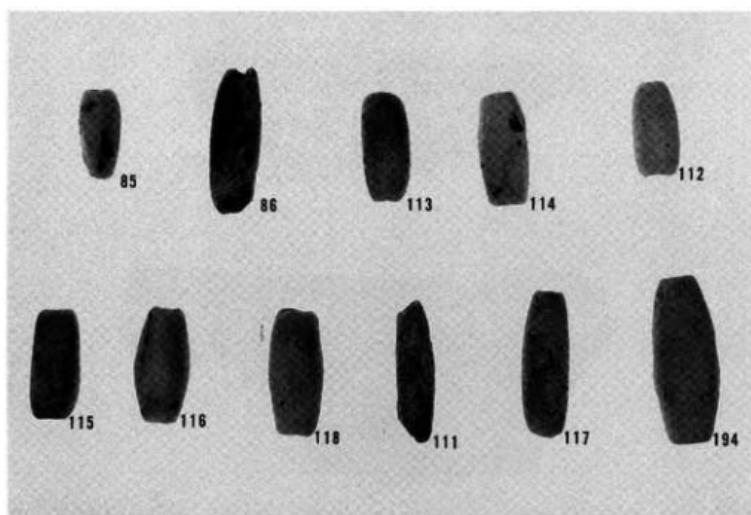


SX-11 出土遗物

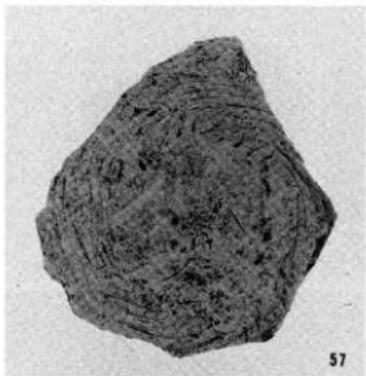
図版40



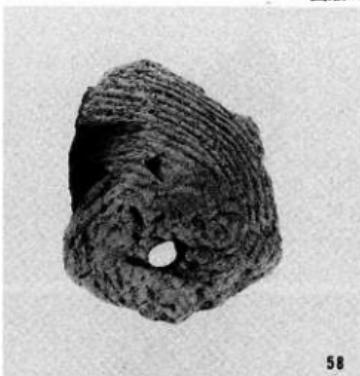
第II層 出土遺物



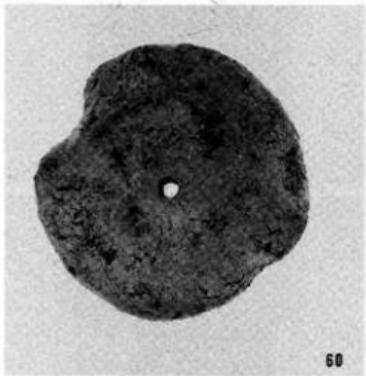
SX-1・6・15 出土遺物



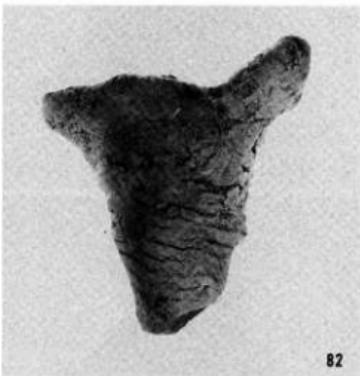
57



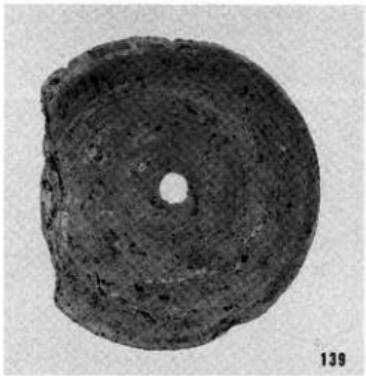
58



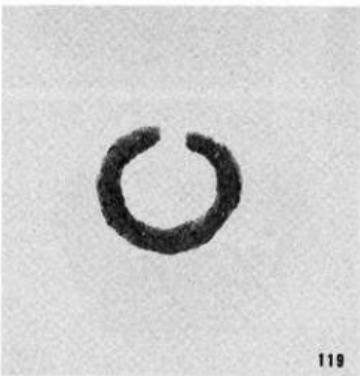
60



82



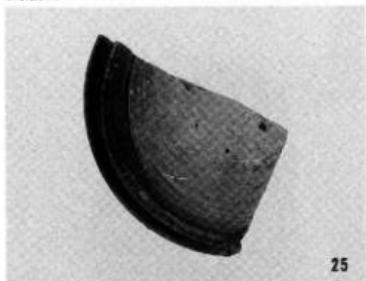
138



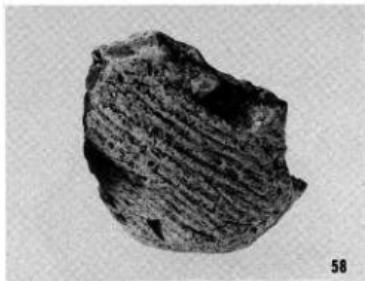
119

出土遺物 1

圖版42



25



58



59



60



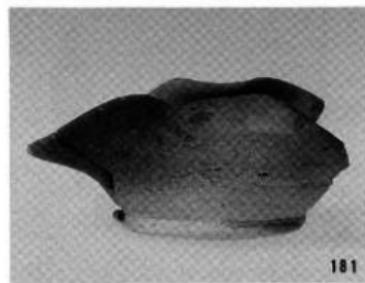
78



100

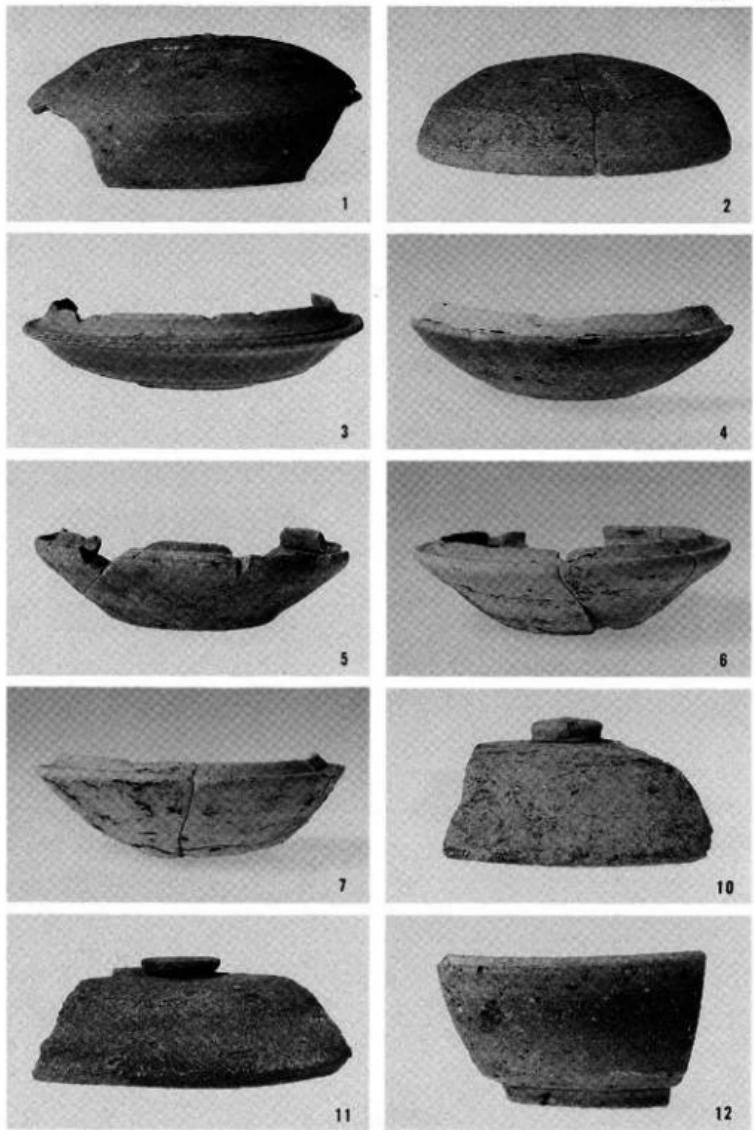


181



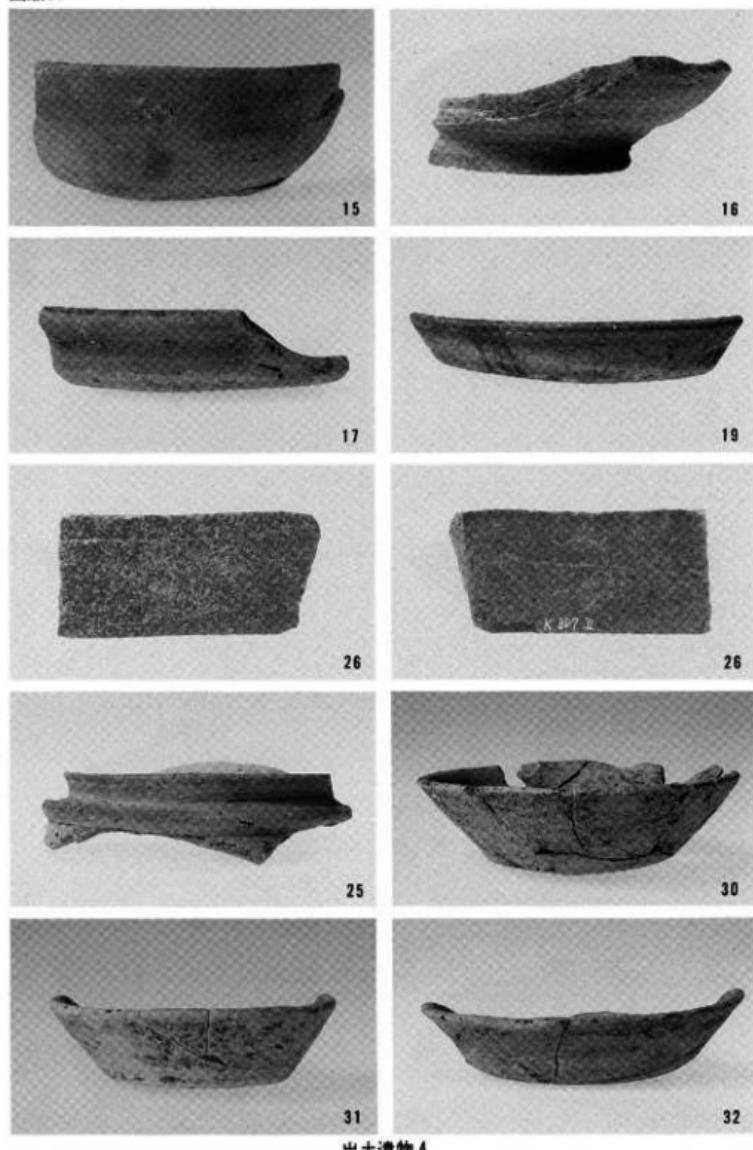
181

出土遺物 2



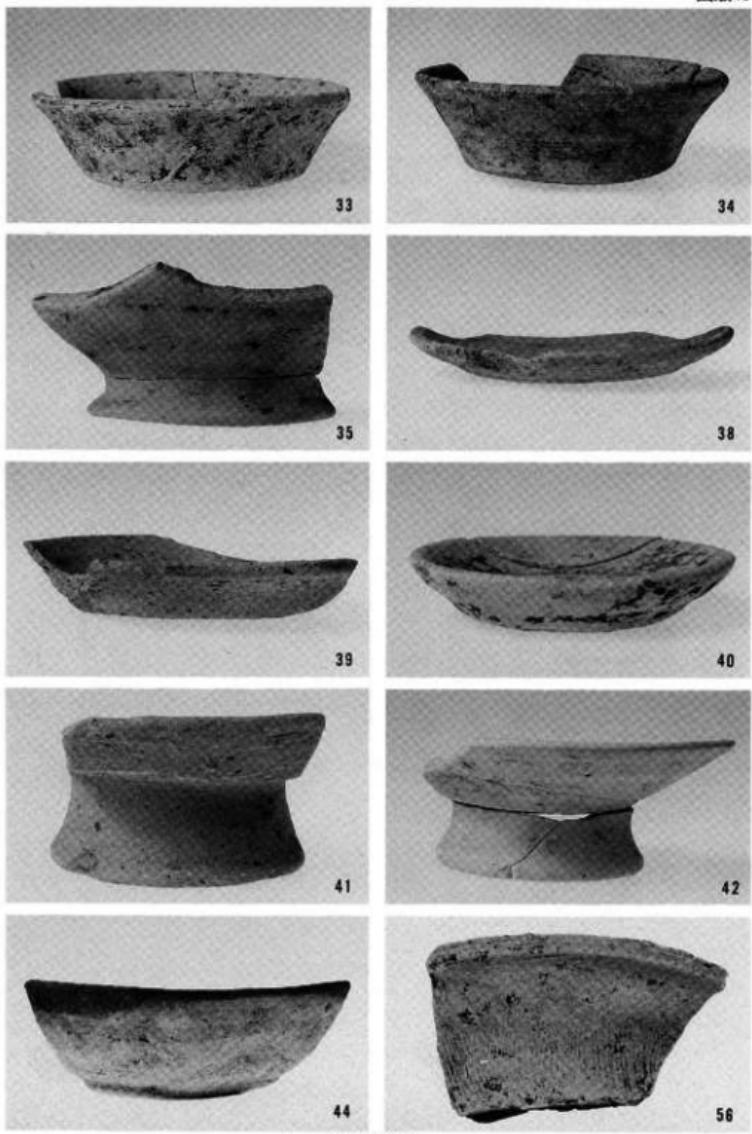
出土遺物 3

圖版44



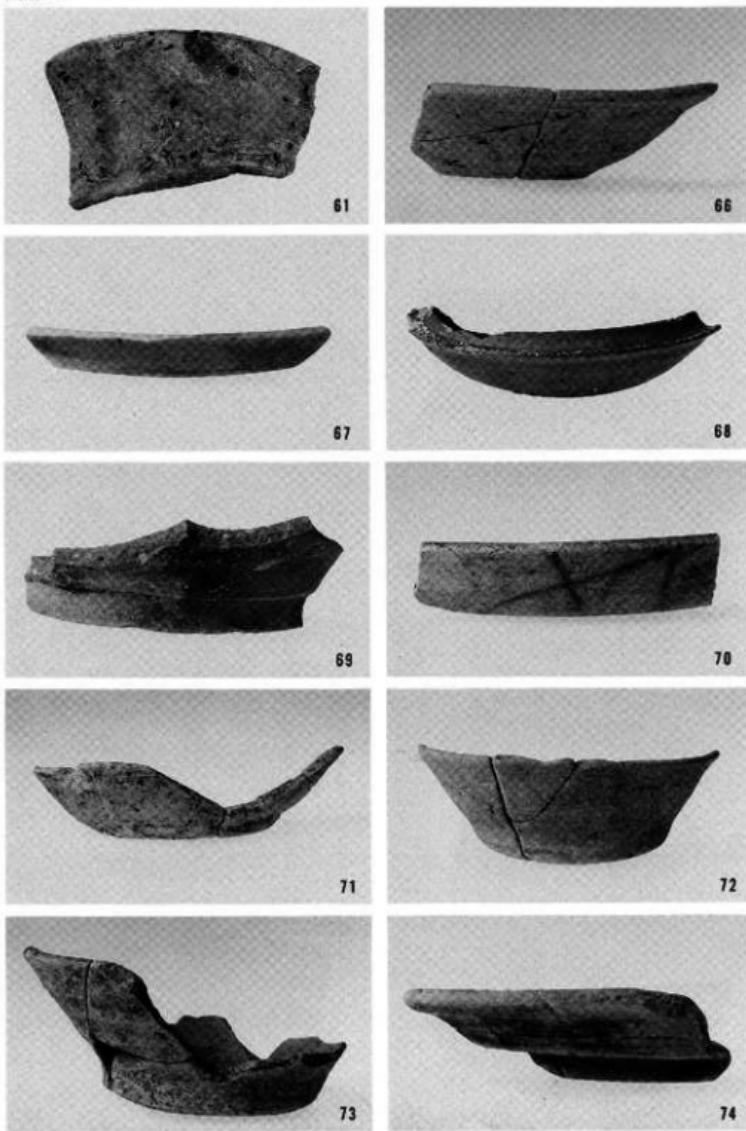
出土遺物 4

図版45



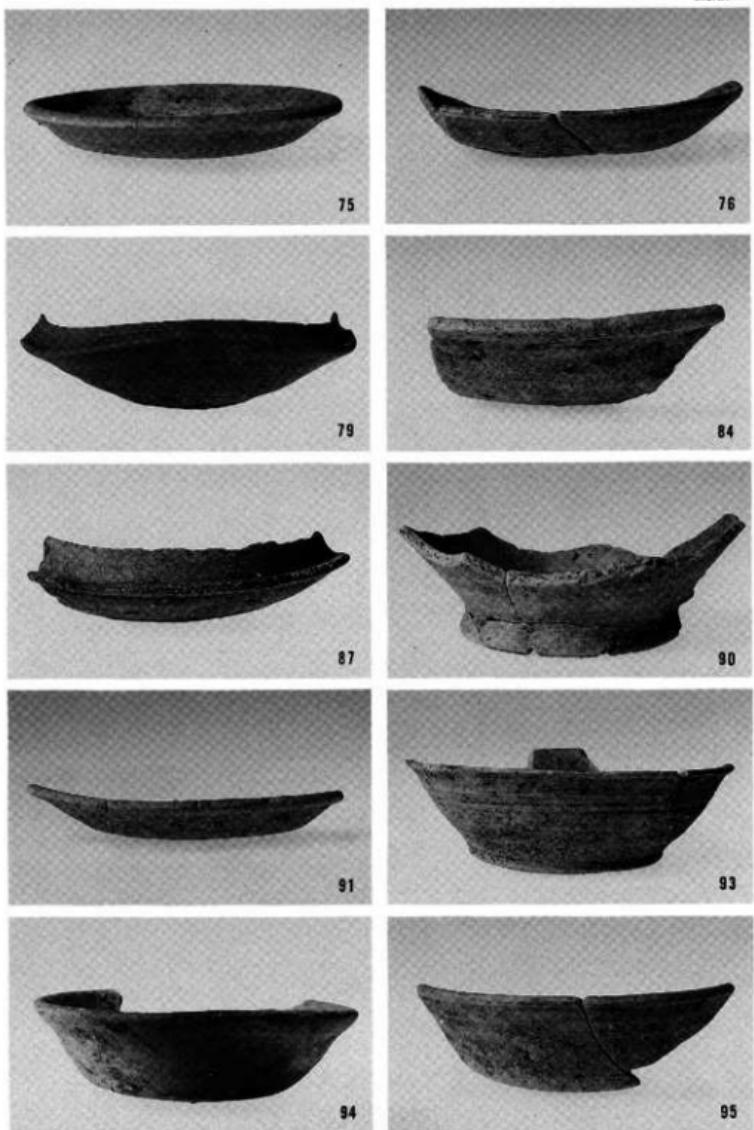
出土遺物 5

図版46



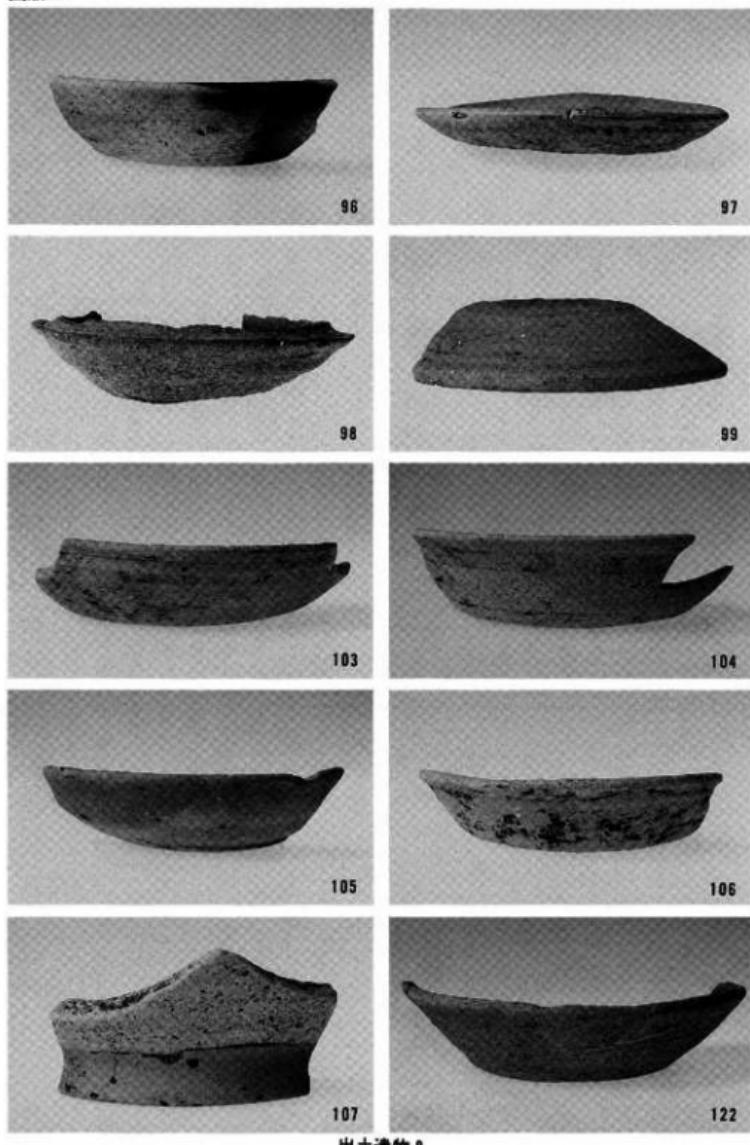
出土遺物 6

図版47

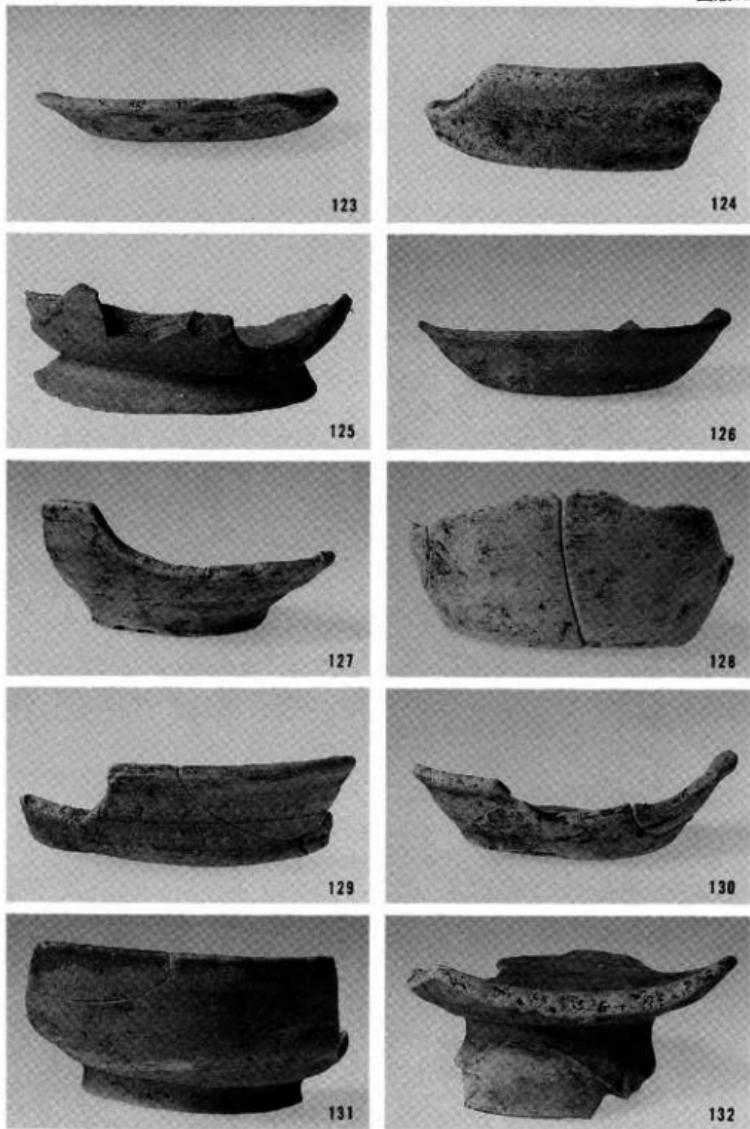


出土遺物 7

图版48



出土遗物 8



出土遺物 9

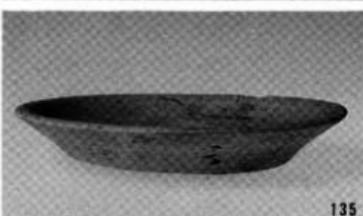
図版50



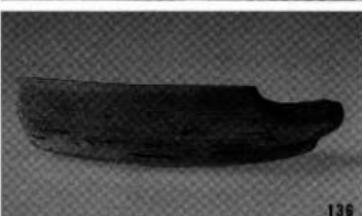
133



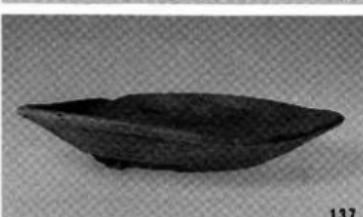
134



135



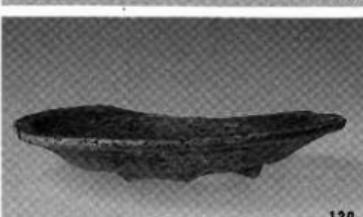
136



137



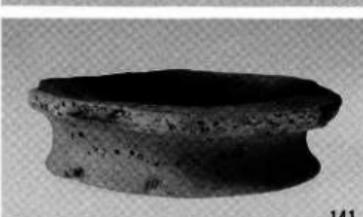
138



139



140

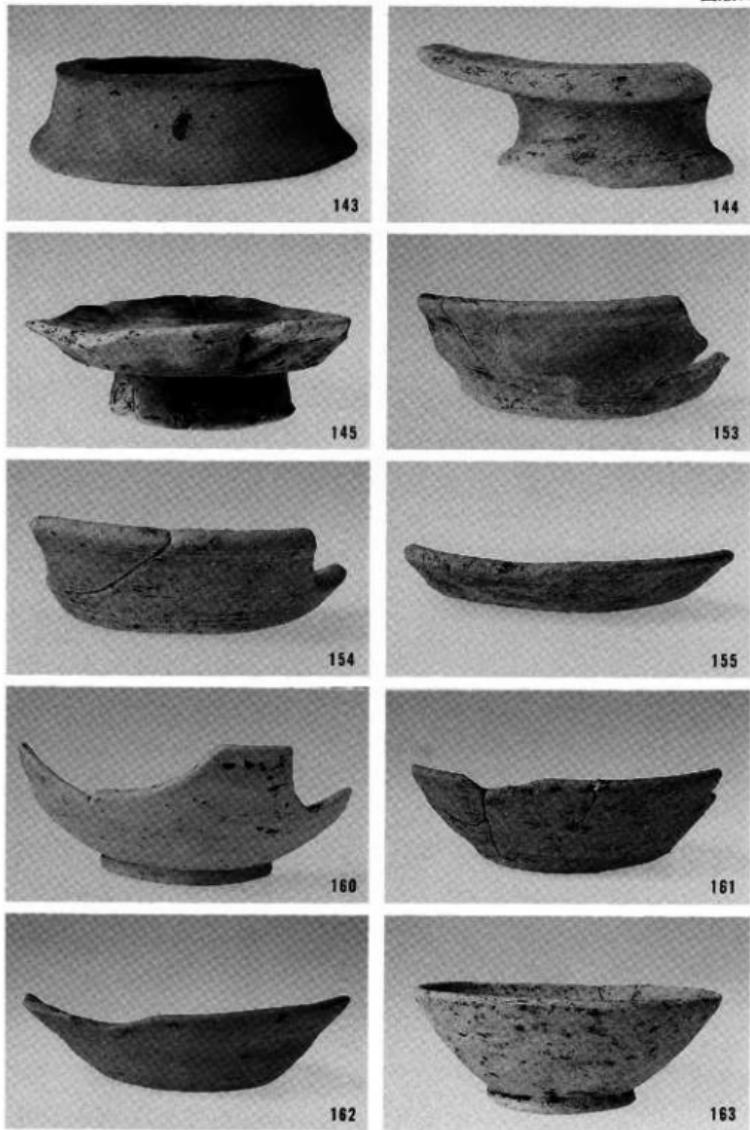


141



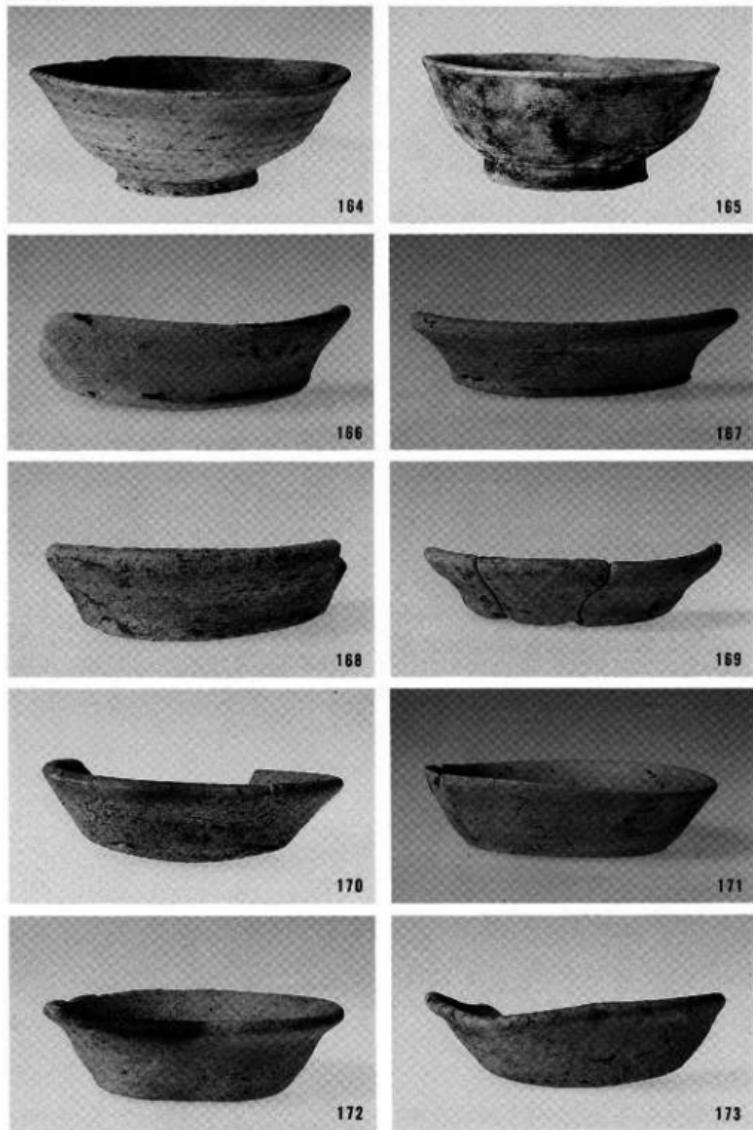
142

出土遺物10

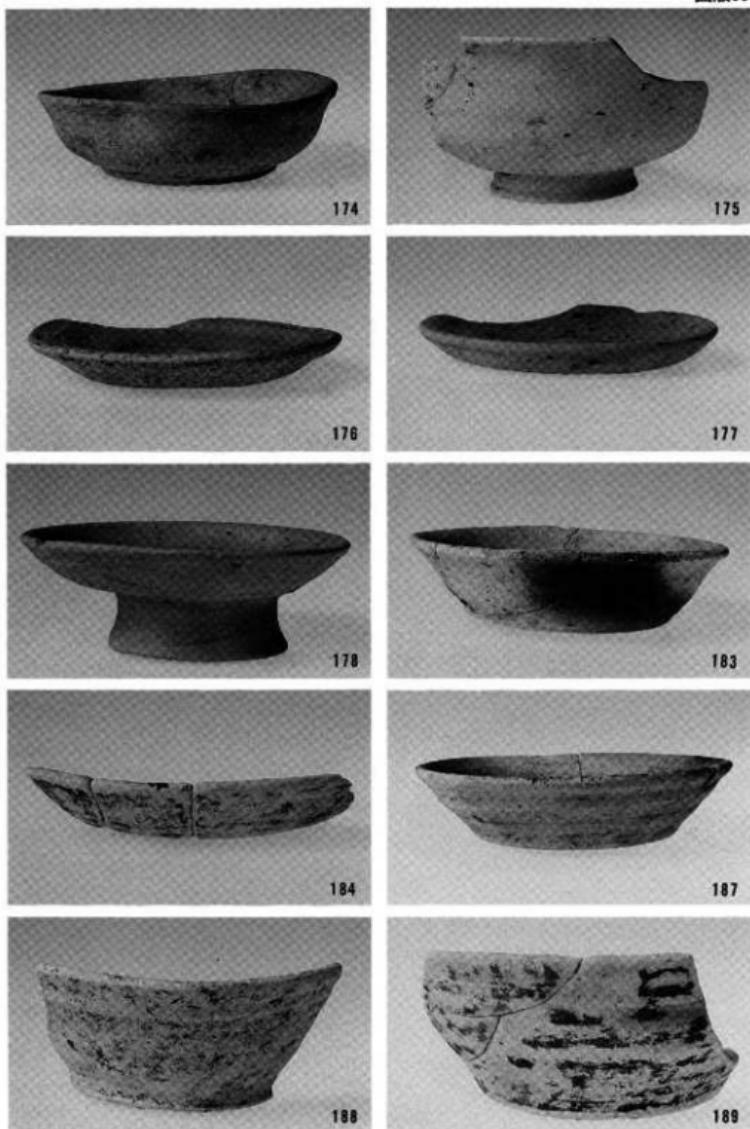


出土遺物11

図版52

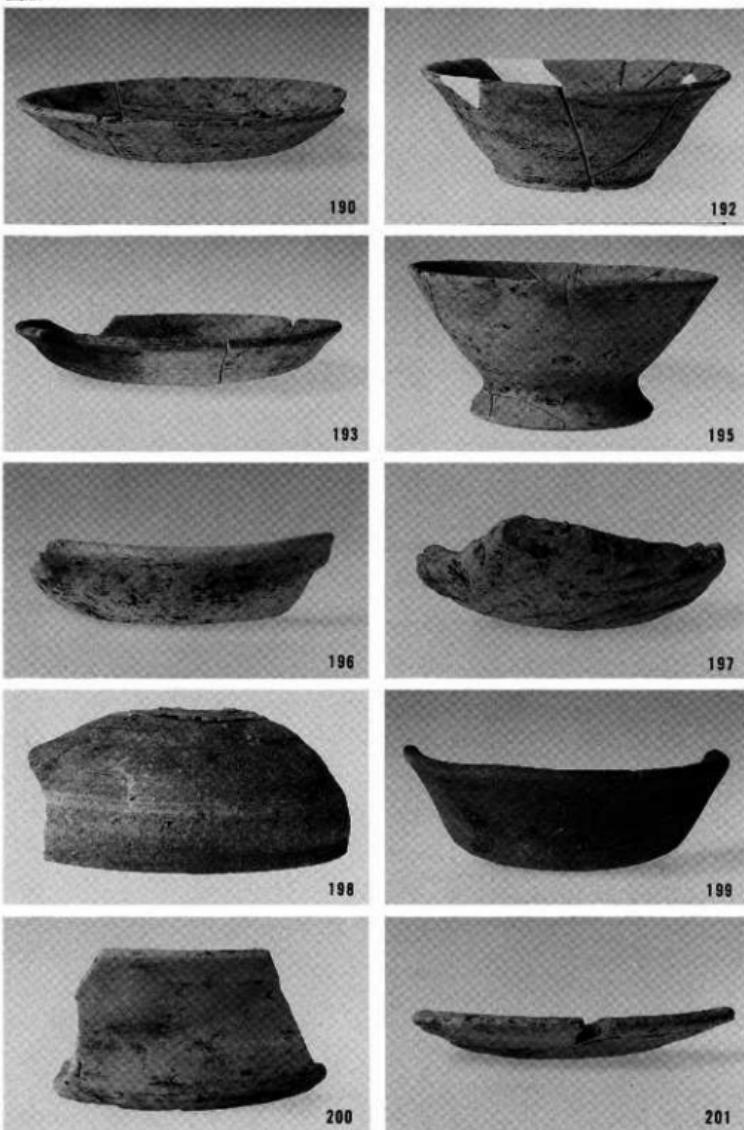


出土遺物12



出土遺物13

図版54



出土遺物14

高知県埋蔵文化財調査報告書 第26集
土佐国街跡発掘調査報告書

第 9 集

一金屋地区の調査

平成元年 3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
(高知市丸の内1-7-52)
印 刷 共和印刷株式会社

